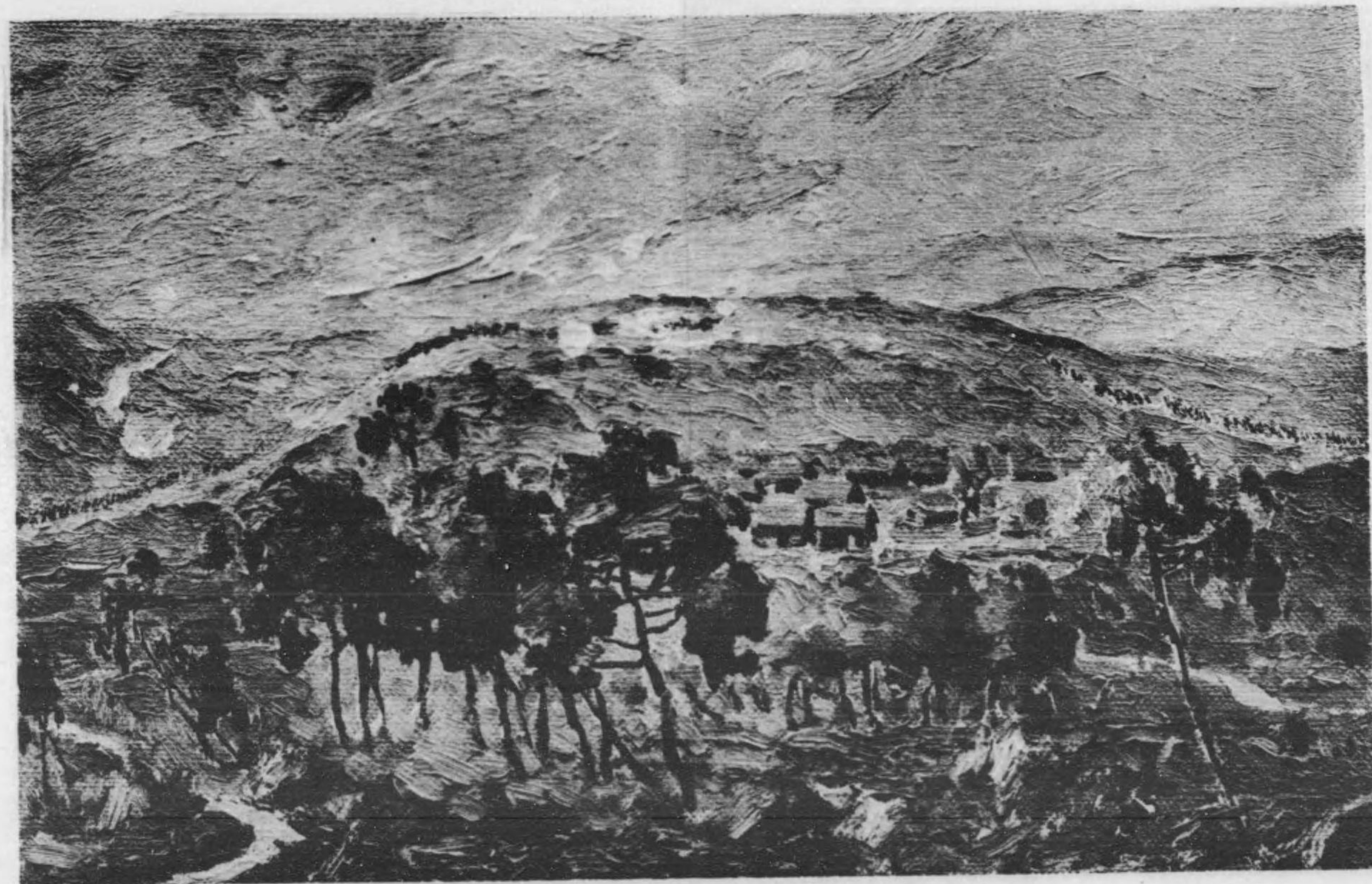


王家堡子附近前衛ノ追撃戦



九十九人石原白道畫

き王家嶺の街道から、我が有吉右側衛が堂々として前進して來たので、此所で一戦やる所の沙汰ではなく、ほうくの體で一舉に分水嶺さして退却して仕舞たのであつたが。これ實に山田大佐の攻撃部署が其宜しきを得た爲めであつたといふが至當であると評者は信ずる。

實は此日淺田支隊は相當に骨が折れる考であつた所が、上述の如く極めて容易に敵を撃退することを得て翌二十七日に於ける、分水嶺攻撃の準備を速になし遂げ得たのは好都合であつたが。これ實に最初に於て前衛と右側衛との進路の關係が頗ぶる適當であつたのと、敵と出會してからの山田大佐の決心處置が至當であつたので、左したる力を用ひずして此の橋家堡子と王家堡子の難關を容易に我手に入れ得たのであつて、蓋しこれ力を以て勝つたのでなくして謀を以て勝つたといふのが至當であらふ。山田大佐の前衛方面は先づこれ位で研究を中止して、これから鎌田支隊の評論に移るが、實はこれは殆んど何等のこともなさずして、午前十時に卜家堡子を出發して深河子と大

桑皮峪で少数の敵を驅逐して、大桑皮峪附近に宿營したといふ迄なのであつて、其他には別に研究すべきことはなかつたのであつた。

丸井支隊は如何に此日を経過したかといふと、これは實に此日に於て最も大なる事業をなし遂げて居る、即ち彼は不行儀千萬にも昨夜其左の横腹を露出して假眠したに關せず、天幸にして聊かの寢冷もせなんだのは何よりの大仕合はせてあつたが、愈々この二十六日接官听の方へ進むに就ては、最も危険を感ずる方向は北嶺を経て西瓦子溝に通ずる道路である。そこで此日の早朝に歩兵第三十九聯隊の第二、第四兩中隊と騎兵半小隊を大隊長に指揮させて、北嶺に向つて出發せしめて先づ第一に支隊背後の掩護に任じて置き、さて支隊の残餘は午前八時巍家大嶺を出發して官屯に向つたが、其出發に際して本道右側の山の稜線を傳ふて、歩兵第三十九聯隊の第一中隊を進ましめて支隊の右側を警戒し、更に歩兵第三十九聯隊の第八中隊の一小隊を、本道左側の山脈を傳ふて前進せしめて支隊の左側を掩護すると共に、東條支隊と遙かに

相連絡する方法を執つたが、これ等の處置は何れも注意周到にして聊かの申分もないと評者は思ふ。

丸井支隊は前にも述べたる如く左右に小側衛を出して充分に警戒して、歩兵第三十九聯隊第二大隊と騎兵一分隊、工兵一中隊、一小隊を以て前衛として、油斷なく搜索しつつ前進して午後二時三十分官屯に到達したが、此時支隊に屬したる獨立騎兵即ち騎兵第十聯隊の約二中隊は、聯隊長安田徐次郎少佐の指揮の下に歩兵第三十九聯隊第十中隊の一小隊を支援として、接官听附近に位置して敵の騎兵約百騎が此邊に居たのを驅逐して、其一部を以て廂房即ち後迷子勾方向を搜索し、又其主力は松圪子方向に前進して敵情を搜索して、敵の歩騎兩兵が小灰嶺から周家庄東方高地に亘る線を占領して居り、其騎兵の斥候が接官听西方の高地にあるのを知つて、逸早くこれを前衛司令官たる横山少佐と丸井支隊長とに報告した。

官屯に於て此報に接したる横山少佐は、先づ第一に前兵たりし第七中隊を

以て花紅溝東北高地を占領せしめ、更に安田少佐から敵の歩兵が上哈噠から二中隊程北進するといふ報を得たので、第六中隊を第七中隊の右方に増加し、第五中隊を其後方の高地脚に招致してこれを豫備隊となした。丁度此時行進中班家堡子から周家庄東方高地に出したる、歩兵第三十九聯隊第八中隊(一小隊欠)が歸つて來たので、これを第七中隊の左方に散開して以て前面の敵と相對したが、横山少佐の此の場合の處置は頗ぶる適當であつた、何等申分はないと評者は思ふのである。

前衛は右の如く手落なく部署したけれども、右側衛として北方山脈上を班家堡子北方高地へ向けて出した歩兵第三十九聯隊の第一中隊も、左側衛として遠く南方山稜を傳はせたる同聯隊第八中隊の一小隊も、其進路が非常に峻であつた爲め、何れもまだ前衛の占領したる陣地附近に到着せぬので、丸井少將は慎重なる態度をとつて、午後三時三十分歩兵第二十聯隊の第三中隊を後迷子溝に派遣して支隊の右側を掩護せしめ、これと時を同じくして歩

兵第三十九聯隊の第六中隊、即ち前衛司令官が第七中隊の右方へ増加したる第六中隊を、更に其西方の接官所西方高地に移らしめて、同聯隊の第十中隊を前衛の左方に増加して、以て敵の如何にするかを暫時觀望して居たのであつた。

然るに敵は午後四時とおぼしき頃、約一大隊程の兵力を以て周家庄の方から松坨子に向つて前進し來つたので、前衛たる第七、第八兩中隊は之と火戦を交ゆることかれこれ三十分間ばかりにして、敵は何と考へたか其方向を變じて銅匠峪の方向へ午後四時半から五時の間に退却して仕舞たので、何となく戦場に間がぬけた様な有様となつたが、これより先注意深かき丸井將軍は其左方を前進しつつかある東條支隊へ向つて、屢、斥候を派遣して連絡を求めたけれども、山地の峻峻なると敵の騎兵が相當に妨害を加へたので、朝から今までに一度も其情報を得ななだのであつたが、今此の敵が退却して戰場少しく間の抜けたる折も折、即ち此日の午後五時三十分にして始めて東條支隊へ派

遣せし騎兵將校斥候の報告を得たが。彼の仙家峪方面の東條支隊に對する敵は、依然尙下哈塔南方一帯の高地を堅固に占領して、爲めに東條支隊は未だ容易に清河々谷へ進出し得ざる状況にあるを知つたのであつた。然るに今現に此の丸井支隊の方に於ては、接官所の西及び北の地區には敵兵のあるものなく、前面の敵の兵力も歩兵一大隊位より多からずして、且つ自から退却するといふ有様であるから。少し日は晩に近づいて居るけれども、一番ここで一奮發して此敵を擊攘して、以て友軍たる東條支隊の進出を援助せんとして。先づ砲兵第六中隊に命じて花紅溝東方標高四一三高地に放列を布かしめ、それと同時に歩兵第三十九聯隊の第三中隊と、歩兵第二十聯隊第二中隊とを前衛に増加して、周家庄附近の敵を攻撃すべく前衛司令官たりし横山少佐に命令した。

友軍からは朝來一度も連絡をせぬに係はらず、自から非常に危険なる状況に立ちつつ、其左に連なる友軍の状況如何に大に心配して、何度も何度も斥

候を派遣した而已でも實に奇特であるのに。愈々其消息が明らかになつて彼れ東條支隊が、清河々谷へ進出し得ざる難境にあるを知ると共に、午後六時に近き夕方より攻撃を開始するの自己に不利なるをも顧みずして、唯々友軍の利益の爲めに思ひ切つて攻撃を開始して、以て東條支隊の加勢をしたのは實に丸井將軍天晴れ見揚げたお心がけてある。武士たるものは此心掛けがなくてはならぬ、而已ならず其計畫も其部署も共に頗ぶる適當である。甚だ失禮ではあるが此將軍は老骨無能であらふと實は評者は考へて居たのであるが、仲々以て立派な腕のある好將軍であつて、人は見かけによらぬものこれは實に案外千萬といはねばならぬ。

砲兵中隊が六時三十分放列を布き終つて、目的とせる敵に對して猛烈に砲撃を開始したと思ふて、周家庄東方高地及び上哈塔附近の敵兵は、これに對抗せんとせずして漸次に下哈塔から其西方に退却を始め、小灰嶺に居た敵兵はこれも亦大灰嶺の方向に退却するといふ、頗ぶる手ごたへのない張合

ひぬけのした有様であつたが。我砲兵第六中隊は委細それ等に頓著せず、必死になつて其退却する敵兵を目標として日の没する迄射撃を繼續したのであつた。又一方前衛たりし歩兵第三十九聯隊第二大隊は、其攻撃部署を充分に整へたる後日没間近かき午後七時三十分に至つて、勢よく周家庄に向つて攻撃前進を始めたが。其中に敵が無抵抗で退却して仕舞てくれたので、何の苦もなく目的としたる周家庄及び其東方の高地を占領し得た此時頃迄には此支隊の右側衛は、班家堡子北方高地に進出して支隊の右側背を嚴重に警戒し、又左側衛は前衛の左方に加はつて周家庄の攻撃前進を共にしたのであるが。既に此諸隊が進んで周家庄を占領したのは午後八時五十分であつたので、丸井少將は大に追撃して東條少將に加勢したいは山々であつたが、暮夜しかも不知案内の生地には於ける追撃の非常に危険なると、翌朝に於ける支隊の任務が正反對の方へ轉進せねばならぬのであるから、此兩様の理由の爲めに遺憾ながら終に此地を占領して此日の戦を終つた。丸井少將の俠氣に富んだる此日

の戦のやり振りは實に立派なものであつた、眞實以て將軍らしい戦のやり方であつたのは實に嬉しい。申し遅れて居たが此日早朝北嶺に派遣されたる歩兵第三十九聯隊の第二、第四中隊は、此日北嶺に到達して見ると其前面の敵は頗ぶる微弱なものであつて、歩兵は居らずして少數の騎兵が居るばかりであつたので。歩兵第二中隊に騎兵一小隊を残して、北嶺を嚴重に占領せしめてここで支隊の背後を守らせて、大隊長は自から第四中隊を引率して支隊本隊へ歸還したが、此の獨斷の處置は評者は頗ぶる至當であつたと思ふ。大隊長が二中隊を率ゐて遠く派遣されるといふ様な場合には、必ず獨斷を以て或る事柄を處置せねばならぬ様なことのある場合に限るのである。て此の大隊長は騎兵一小隊と其部下の半部とを率ゐて、二十六日早朝に支隊に先だつて出發して、午前十一時に北嶺に達し騎兵と歩兵とを以て十分に敵情を探つて見たが。前面に居るのは決して支隊に大危険を來すべき程の敵でないのを知つて、第二中隊長に充分に注意を與へて此北嶺を死守せしめて、自分は一中隊

を引率して本隊の後を追ふて、此日午後八時に本隊に歸つた處置は實に申分はない。此様な場合には一中隊でも決して無駄に遊ばせて置くべき時でないのである、翌日になれば現在の前面に當る敵には有力なる部隊を残してこれに當らせて、主力は北方に轉進して分水嶺の敵の背後を脅威せねばならぬのである。一兵卒といへども決して無益な處に置いては其任務の達成に非常に不利であるのである。其丸井少將の心中を推察して背後の掩護に出て見たが左までの兵力を置く必要なしと判断したので、決然其半を以て命ぜられたる任務を行なはせて、自分は其一半を提さげて明日の戦に加はるべく本隊に還つて來た、斯くあつてこそ小なる部隊に大隊長を附けて出したる甲斐があるのである。兎角此様な場合其敵情も其場合も辨まへずして、平氣で命令の儘を株守するといふ傾きの人が多いのに、此大隊長が獨斷を以て適當なる處置をして、本隊に歸つて明日の戦に加勢したのは實に健氣である、斯くなくては大隊長とはいはれぬと評者は思ふ。惜しい哉其人名が戦史に漏れて居る、

つまらぬことに麗々しく名前を掲げながら、此様な大隊長の名を逸するとは戦史編纂委員殿、失敬ながら少しくよりが戻りましたなと評されても、これを否認せられる権利は御座るまいと評者は思ふ。

偕てこれからは明治陸軍第一の戦術家として、一世に其學問上の名の高かつた東條將軍の支隊の批評に移るのであるが。一體世の中の事物の名實といふものは容易に相一致し得るものではないと、評者はつくづく、此の一支隊の研究に於て、少なからざる遺憾を此將軍の上に懐くの已むを得ざるに至つたのは事實である。いてや今から東條支隊の行動を忌憚なく少しく無遠慮に研究することにし様。

此將軍が川村師團長から受けた命令には、其一部を以て老盤道嶺、嵐崗嶺、新開嶺を守れとある。此の一部といふ文字は如何様にも解釋することは出来るが、前掲の三嶺たる一連の山脈であつて此の三要所を占むれば敵は容易に岫巖の方面を窺ふことが出来ぬのである。單にそれ而已ではない此の一帯の高

地線を固く占領して居つたならば萬一東條支隊が戦不利なる場合にも、充分にこれが收容に任ずるを得る而已か、此地に於て其追躡し來る敵をも必ず防ぎ止めることが出来る。それに又一方からいへば其新開嶺に通ずる道路は、現在敵の大兵力のあると推想し得べき蓋平から、我が師團の根據地とせる岫巖に通ずる唯一の良道であつて、此三嶺の防禦は決して輕視すべき次第のものでないのである。現に敵將軍中には東條支隊の坎子附近に進出して岫巖に我兵力の少なきを偵知して、速に之を奪略せんとの意見を具申した人がある位であるから、此三嶺就中此の最左方の新開嶺は最も嚴重に守備せねばならぬのはいふ迄もあるまい。

然るに二十五日夜に於て東條支隊が此地を出發して、敵に向つて前進するに當つて其歩兵四箇大隊中より、僅に一中隊即ち歩兵第十聯隊和田音五郎少佐の大隊から、其第十二中隊一箇中隊を残して新開嶺一帯の守備に當らせ、其他を擧げて仙家峪方面に進んだのはこれ實に餘りに無謀である、甚だ以て

不適當至極であると評者は思ふ。師團命令に一部とある以上は一分隊を残しても支障はないけれども、前述の如き重要な陣地を守る爲めに僅かに一中隊を以てするといふのは、何を標準としたものであるか其理由が自分には了解することが出来ぬ。まして況んやそれが狭小なる地域ならばまだしもであるが、嵐崗嶺と新開嶺の間が約三千米突からある上に、老盤道嶺までも又約三千米突程あるのであるから。約一里半に亘る間に歩兵一中隊を残して置いて、これが守備をしたといふことが出来るであらうか、これ實に評者が無謀であるといふのも強ち無理ではあるまいと思ふ。

兵は可成分離せずして集結してこれを使用するのが利益であるのはいふ迄もないが。既に一地を守らせよと師團から命令があつて、其又守るべき地が我師團の後方を掩護する爲めに重要な地であつて、且つ其正面が相當に廣いとしたならば、これを守備する爲には獨立して相當の仕事の出来る丈けの兵力は残さねばなるまいと評者は思ふ。嵐崗嶺から右の方は東條支隊の前進の

爲めに自然に掩護せられるとしても、嵐嶺から左方新開嶺の附近迄は是非とも此残留の部隊を以て守備せねば、いつ何時敵が我師團の空き巣をねらいに来るかも知れぬのである。斯く考へて見た場合には如何にしても此様な少數な兵力を此所に残すことは出来ぬ筈である。元より同支隊の前進する方面にも可成多くの兵力が必要である、けれども此方面にも又相當のものを残し置かねば後顧の大患が生ずるのは目前である。て評者の考を以てしてはここには歩兵一大隊を残すのが至當だと思ふ、萬々已むを得なんだならば大隊長の指揮する歩兵二中隊としてもよいか知れぬが、自分は此場合此所には一大隊を残すのが最も至當であると思ふ。斯くすれば約一里に近き正面も何とかして警戒することも出来、又相當の敵の襲來に應じて一時これを拒止することも出来るが。東條閣下の實施せるが如き只の一中隊では、名目ばかりで到底何の役にもたらぬのであつて、師團命令に背く譯にゆかぬからそれではほんの申譯に、單に一中隊を残したと評されても致方あるまいと自分は思ふ。

東條將軍として見れば前面の敵は相當に有力なものである、然るに其部下の兵力はといふと歩兵四大隊砲兵二中隊である。一兵でも多く自分の方へ連れてゆきたいのは人情であるが、此の重要な地點が萬一にも突破せられたならば、それこそ實に全師團の死活問題である、さればこそ師團長が態々此の三嶺を守備せよと命令したのである。此様な大切な理由のあるに係はず此の廣大なる正面に、只の一中隊を残したといふ東條將軍の考は自分には推察することが出来ぬのである。或はいはん此様な後方のことを無暗に心配するのは愚である、全力を以て速に前面の敵を突破すれば、自然に背後は安全になるのはいふ迄もないから、東條將軍が全力を擧げて進んだに何の不思議はあるまいと。如何にもそれも一つの理由はあるが併し、此方面には兼々澤山に騎兵を有する露軍が、多數の騎兵を向はしめたといふことは既に前から知れて居たのであるから。若しも其騎兵が大舉進來したならば我東條支隊が仙家峪の敵を撃破せぬ中に、却て敵がそれより早く新開嶺を突破するかも

知れぬ。これは決して有り得べからざる様な想像ではないのである。果して然らば大切なる岫巖は否、岫巖而已ならず、東條支隊の直接の背後も共に敵の蹂躪する所となつて、其危険や實にいふべからざるものがあるではないか。であるからせめては有力なる敵の騎兵を喰ひ止め得る位の兵力は残さねばならぬ。即ち此場合歩兵一大隊を残すのは實につらいけれども、全師團の爲めには已むを得ぬ大事を取つてここに一大隊を残すが至當である。然るに之に反して東條將軍が餘りに其兵力を集團して使用せんとして、其後方の重要な地に一中隊を残したのは不當である。一面からいへば自分の戦ふ方面に利益ある様にする爲めに、全師團に大利害を及ぼすべき方面を等閑に附したと見られても、否然らずとこれを辯解するの理由が立つまいと評者は思ふ。て此の一中隊を以て嵐嶺嶺新開嶺の一里に餘る正面を守備せしめた將軍の處置は、評者は全然不當である兵員が過少であると斷言する。敵が幸にして冒險的の挺進をせなんだから何等の危険はなかつた様なものの、あの多數の騎兵

を有したる敵軍が其大部を以て突然岫巖へ襲來したならば、それこそ實に容易ならざる大事件の出來するのは目前であつて。若しも此の攻撃の準備運動中に敵騎挺進の爲め急に其背後に於て混亂を生じたならば、川村師團長の折角の攻撃計畫も爲めに滅茶々々になつて水泡に歸したかも知れぬのである。斯く考へて見た場合には思ひ切つた大膽なやり方の様ではあるが、其實これは無謀であると評するのが至當であつて、名に負ふ大戦術家たる將軍の處置としては更に一層遺憾に堪へぬと評者は思ふ。

残留部隊の方は先づそれ位で切りあげて、さて今度は愈、東條支隊の行動に移ることにするが。同將軍が其支隊を二道溝北方に於て二縦隊に部署して、右縦隊は叢家堡子を経て北部下仙家峪に向はせ。左縦隊は仙家峪へ向つて前進せしめたのは意見はないが。其兵力の區分のし方に付ては大に議論すべき必論があると思ふ。一體此際東條將軍は敵情に付て餘りに詳細には知つて居なかつた、勿論これは何れの場合でも容易に知れ得るものでない、が併し自

己の支隊と同一位のもが此所に居る位の判断は出来た筈である。自己と同一位の敵が此の附近に居るとしたならば、可成其支隊の兵力を一纏めにして敵陣地の一部に向つて猛烈に衝突して、其勝利の成果を大に擴張してゆく様にするのが必要であつて、濫りに兵力を分離しては到底目的を達せられぬ。然るに東條閣下は左縦隊を歩兵一大隊、砲兵二中隊、右縦隊を歩兵二大隊として、其右縦隊の後方から歩兵一大隊、工兵一中隊を豫備隊として進めるの部署をなしたが、評者はこれが甚だ適當なる部署でないと思へるのである。

東條將軍は先づ左縦隊を以て仙家峪西北高地を占領させ、然る後に其主力たる右縦隊を以て北部下仙家峪西北高地一帯を占領する計畫であつたと戦史には記述してあるが。若し果して此の言の如く左縦隊の方から敵陣地の右翼を攻撃するの考へてあつたならば、自分は其部署を全く現在と反對にするが至當であると考へる。即ち二道溝北方から一大隊を右方に分進せしめて、これに叢家堡子西北高地を占領せしめて此方面の敵を、此の右縦隊の方に牽制

して置く様にして。さて其殘餘の全力即ち歩兵一聯隊、砲兵二中隊、工兵一中隊を以て、先づ仙家峪から三道河子に亘る間を占めて攻撃を準備し。充分に準備を整へて全力を擧げて此の陣地の鎖鑰地たる標高四八九高地を、猛烈果敢に攻撃したならば多少の困難はあつたらふが、必ずこれは此日の午前中に占領することが出来たに相違ないと思ふ。果して然らば此敵陣地右翼の鎖鑰たる標高四八九高地から、上哈噠東南一帯の敵陣地は全部側射を被むることになるので、否殆んど背射をやられることになるから、到底永く此陣地を持ちこたへることの出来る筈がない。左すれば此の標高四八九高地の陥落と共に、自然と此陣地全部は東條支隊の手には入つて、此支隊の命ぜられたる主要任務なる、『周家庄南方ヨリ仙家峪西北高地ニ亘ル敵陣地ヲ占領シ』といふ目的を達し得て、更に其友軍たる丸井支隊につまらぬ心配をさせる様な必要はないのである。

然るに東條將軍は道路の關係でもあつたらふが、主力を向はせた方には一

門の砲をも用ひずして、歩兵一大隊と砲兵二中隊を石井忠利現大佐君に托して、此の大切な標高四八九高地の攻撃に當らしめ。自分は叢家堡子の方の最も攻撃のし惜い方へ主力をつれて前進して、石井君の方の成果を待つて敵を攻撃せんと計畫した。此將軍の此計畫は頗ぶる理由がないと自分は思ふ。何故なればこのやり方では敵陣地中の要地を先づ全砲兵と少數の歩兵で奪略させて、主力が其後に於て殘敵を打拂ふといふ次第になるのであるから、全くこれでは此攻撃計畫の理由はなり立ち得ぬのである。先づ要地を占領すべき方面に主力を用ゆるなれば如何にもと首肯することが出来るけれども、最第一番に敵を攻撃するといふ大切な方へ少數の兵力を向はしめ。主力はそれの成果を待つて攻撃するといふのは適當でない。その上に主力の方には唯一門の砲兵もないといふ始末、よしそれが主力の方にはなくとも、射撃を以て主力の向ふたる方面の敵陣地を砲撃することが出来れば、それでも充分であるけれども全然それも出来ぬ仙家峪の方へ、全砲兵二中隊をやつて仕舞た

のは愈、不都合極まる部署であると評者は信ずる。

想ふに東條將軍の腹の中では全砲兵と歩兵一大隊の石井左翼縱隊を以て、大正面を占領して敵陣地の鎖鑰たる標高四八九高地を攻撃する様に、即ち全力が仙家峪の方に向つて本攻撃をする様に見せて。此方面に敵の全兵力を吸収して置き、其虚に乗じて其主力たる歩兵一聯隊を以て一舉に、上哈噠東南一帶の高地を占領せんとしたのかも知れぬが。それは頗ぶる奇を好んだやり方であつて所謂ベレン主義の戦術である。敵にも眼もあり耳もあるのであるから、まさかに其様に赤兒の手をねじる様に易々とは欺瞞することは出来ぬ。若し此様な考で此部署をしたものとすれば、自分は頗ぶる東條將軍の爲めに惜しまざるを得ぬと思ふ、此様なことはこれを小刀細工といふて決して大將軍たる人のやるべきことでない。元より戦闘に方り敵を欺瞞するといふことは必要なことであるけれども、此様な淺薄なやり方をしては敵は決して我術中に陥る筈がないのである。要するに此場合は評者が始めに述べた如く、正

々堂々と其主力を以て仙家峪から標高四八九高地を攻撃して、敵が此地に増援を送るの時間のない中に猛烈迅速にこれを奪取するのが、極めて時機に適したるやり方であつて。一方叢家堡子の方へは歩兵大隊位のもを進めて、此方面の敵が他に移轉し得ぬ様にこれを牽制するのである、これが最も道理に協ふたる攻撃の部署であると評者は信ずる。

石井忠利君が砲兵を仙家峪の東南方に布列して、山縣萬吉現大佐君が其大隊の二中隊を以て二千五百米突許の正面を占領したが。敵は一、二中隊しか居らぬ模様なので、更に一中隊を仙家峪に居る第三中隊の方へ加へて、攻撃前進に移つて見ると敵は標高四八九から三道河子北方へかけて、五、六中隊塹壕に據つて我前進を拒止し始めたので、山縣大隊長頗ぶる恐縮の體で終に其儘仙家峪に居づくまつて仕舞たが。此時迄も此方面に敵は全く砲兵の影を見せなんだ、此様に敵は此方面には餘り嚴重に防禦の配備が出来て居なんだのであるから、山縣大隊の攻撃に對しても非常に大騒動をやつて、諸方から増援

を送つて居る様な有様であつたのであるから。東條將軍にして此方面に主力を用ひたならば、此標高四八九高地は遅くも二十六日の午前中には、相違なく我が手の中に落ちたに間違ないのである。

右縦隊の方では小野寺大佐が歩兵二大隊を率ゐて先行して、其三箇中隊を以て叢家堡子西北高地を占め、其他を其左翼後の山麓に控置し。又支隊の豫備隊は叢家堡子南方に開進したが。此方面の敵の兵力容易に侮り難く、午前七時頃には前面に砲兵約四門が現出したる而已か、其歩兵も約一大隊を算するといふ有様になつて、まだ續々と増援部隊がやつて來るといふ始末。そこで東條少將は思ふて居た様に右縦隊の攻撃が進捗せぬので、此主力歩兵而已を以て此方面から攻撃を執行せんと決心して見たが。山の斜面が急峻にして其攻撃動作の困難容易でない、其上餘りに過少ななる山縣少佐の歩兵一大隊のみをやつた、左縦隊方面から敵に反對に突出せられては大變といふ引込思案が湧て來たので、前述の如く小野寺大佐の三箇中隊を展開して敵と戦を交へ

かけて見たばかりで。全く何の爲すこともなく午前十時三十分、此右縦隊を叢家堡子東南高地へ全部退却せしめて仕舞たが、評者は此の將軍の腑甲斐ない處置が非常に不同意であるのである。

敵の右翼の鎖鑰地を歩兵一大隊と砲兵十二門で攻撃させ、自分は歩兵一聯隊を以て叢家堡子方面から、敵を攻撃せんとするの覺悟を以て現在此所まで前進したのではないか。而して現に前面の敵陣地には歩兵約一大隊と砲四門しか居らぬのではないか。よし其他に多少は居るとしても見へるものはそれだけで支隊主力より遙に劣勢ではないか。然るに石井忠利君の方面が攻撃進捗せなんだ爲めに、爲すこともなく退却するといふのは如何なる理由であるか。敵が石井君の方へ突出する虞があつたからだ、よし敵が突出したとしても叢家堡子東方高地では二階から目薬である。其様な敵の方ばかりこわがる様な計畫をせずして、攻撃を決行するつもりで此所まで前進した以上、其儘で退却するといふ様な腑甲斐ないことをせずして、兎に角一度は其全力を展開

して敵を攻撃して見るがよいと自分は思ふ、それでなければ敵の實況は知る筈がないのである。然るに東條將軍は何にもせず其儘二、三千米突退却した、これは實に何人と雖ども餘りに石橋兩杖式たるを可笑しく感ぜざるを得まい。此場合此方面には大敵が居たのではないから、よしや四門や五門の砲兵があつても、又は敵陣地の東方斜面が急峻であつても、必ず多少の困難をさへ冒せばこれを奪略することが出来たに相違ないのである。それに此將軍は此方面でも全く本氣の戦を交へずして、悠然として叢家堡子東方高地上に陣地を引いた。乍失禮東條將軍は何といふ命令を受けて、如何なることをせんとせらるるのであるか。いふ迄もなく此前面一帯の高地を占領して、更に北方に轉進する所の右隣りに居る丸井支隊の、轉進を容易ならしめる様に掩護せねばならぬのであらふ。將軍が此重任を果さなかつたならば明日の分水嶺の攻撃に大影響があるのである。左すれば是非く、此二十六日に周家庄から三道子河に亘る一帯の敵陣地を、邪が非でも此の日の中に占領して仕舞はね

ば充分に其任務を盡すことは出来まい。であるから少しの無理をしても困難を冒しても、此際全力を盡して上哈噠東南高地を攻撃するが必要である。元より戦争である以上は危ないこともあらふし、又困難なことも無論澤山あるに相違ないのである。それを一々避けて居る様では敵を破ることは到底出来ぬのである。然るに東條將軍は敵の出撃と地形の困難とを理由として、専心其任務の達成に勉めずして退却を決行したのである。此の處置が果して適當であるかはた不適當であるか、それは評者がいふよりも前にも引用した歩兵操典第二部第四、決心の所が左の如く明確に示して居る曰く

『然レドモ任務ハ決心ノ基礎ニシテ地形ノ不利、敵情ノ不明等ニ依リテ躊躇スベキモノニアラズ』

此様な明白な理由を一世の仰望の標的となつたる、此東條將軍がやられる筈がないと評者は思ふのであるが、事實は實に斯の如くてあるからこれを誣ゆる譯にはいかぬのである。

思ふ東條將軍は斯く考たのであらふ、石井君に攻撃させた仙家峪の方は攻撃進捗せず、其上に敵出撃の虞がある様になつたのみか、此の前面も容易には攻撃が出来ぬ所から、敵を一つ誘ひ出すといふ考案で引き退ぞざいたのであらふ。而して敵がそれにつけ入つて追撃前進して來たならば、そこを一つ大打撃を加へて其勢で目的を達し様としたのであらふが。敵にも矢張荒神様が附いて居るから、一人で相撲をとる様な甘い都合にはゆかぬのである。折角將軍が苦心して計畫した退却も水の泡、敵は何のこともないといふ顔で平氣で眺めて居るので、此方面の戦闘は全く何をしたか知れぬ間の抜けたことになつて仕舞たが。これ要するに此將軍が餘りに小策を弄するの弊に陥つた爲めて、前には右縦隊で敵を欺瞞せんとして小刀細工をやり損じ、後には敵を誘ひ出さんとして、必要もないのに自分だけ退却するといふ様な滑稽を演じて。終に大戦術家の此日の戦闘を全くめちやく／＼にして仕舞たのは實に千載の遺憾であつた。

評者は決して明治陸軍に比類少なき、尊敬すべき故東條中將閣下を嘲けるのでは毛頭ない。評者自身も此將軍の或る點には大に推服して居るのであつて、決して明治陸軍の大人物を非難するのではないが。いはねば道理が聞へぬからそれで一言するのである。自分が永い軍隊生活の間に於て實見したる所によると、平素の演習は兎に角有名なる戦術家と稱せられる人の間に、實戦に於て頗ぶる遺憾なる處置をする人が多いのは事實である。これ大に注意すべく反省すべき事柄であつて、自分は常にこれが爲めに其人の名聲を臺なしにするのを残念に思ふことが多いのであるが。詮する所これは決して理由のないことではないのであつて、今其理由を單簡にいふて見るといふと。餘りに他の平凡な人々より戦術の理窟を知り抜いて居る爲めに、斯くすれば斯く／＼の危険があり、斯くすれば此様な弱點が出来るといふ様に、餘りに心配をし過ぎて常に敵に對して萬全の處置をし様とする所から、其自己の戦術の力の爲めに誤まれて却て戦機を失なふのであつて。一言以てこれを蔽へ

ば力まけをするのである、餘りに先き繰して心配し過ぎて自分の力で自分が負けるのである。

然るに一方此様な場合即ち此の東條將軍の退却した様な場合、これに隣接した一隊があつたとする。それは頗ぶる平凡な人物ではあるが乾坤一擲の勇氣があつて、何の糞ツといふ勢で一方の退却の場合に一方では前進したとする。此場合の如き一聯隊も持つて進めばきつと此陣地は奪略することが出来るから、その無茶苦茶な勇進が全然勝利を得たとする。さあ此場合他の人々は退ぞいた方を力まけとはいふてくれぬ、多數の人は之を指笑して腰抜けと呼ぶのは目前である。現在此の仙家峪の一戦の爲めに東條將軍は非常に其信用を軍人社界から失なはれたのは事實である。であるから戦術の奥義も知らねばならず、深思熟慮もせねばならぬが、併し一方勇氣といふものと決斷といふものを缺いては決してならぬ。戦争は勝負である萬全をのみ謀つては決して大勝は得られぬのである、或る程度以上は乾坤一擲の思ひ切りが大切に

ある。人命をかけ國家をかけ天下をかけ物にする大博奕である。其大賭博をやるのに全然負けまいといふ考てかかつては、それを頼ぶるけちな小さな勝負しか出来ぬのは當然であつて。程度を越して慎重にするのは語弊があるかも知れぬが、一方から見れば臆病といはれても詮方ないのである。

評者などは矢張非常な神経やみてあつて、兎角病氣をこわがる方の部類に屬する人間であるが。それが壯時實は少々醫學をかちつたことがあるので、生半じやくに病名や病氣の容體を知つて居る。其生ま知りが非常に氣を弱くして仕舞て、頭痛がするとすぐ腦膜炎ではないかと心配する。横つ腹が少し變だとこれは大變盲腸炎だと大騒ぎをやる。それが爲めにいつても、醫者や家族に笑はれ通してあるが。戦術も矢張り其傾向があるのは事實であつて、原理も原則も知らぬものは無茶な猪突をやつて平氣で居れるが、少しく戦術の何たるを知得する様になると、萬事萬端非常に危険な様に感ぜられて、餘りにそれに囚はれ過ぎるといふと手も足も出せぬことになる。此の程度を通

過して大悟徹底するに至らねば、それは所謂生兵法であつて却て卑怯未練の名を取るに至るのである。て評者は我が國軍に於ける戦術家といはれる人を見ると、その多くは理窟をこねることは頗ぶる上手であるが、これに實兵を指揮さして見るとそれが頗ぶる拙劣で、實行が其學力に伴なはぬものが多い様に思ふ。參謀本部などでも大にこれに注意して交互に隊附きをさせる様にはするものの、一世の寵兒といふ様なまたとない利け物になると、始終參謀官ばかりして居て指揮統御といふ様な方に縁が遠くなる。それやこれやの原因が混合して來て終に戦術家を弱蟲にして仕舞ふのであつて、世の諺にも智者は斷を缺くことが多いといふのは、餘りに先きが見へ過ぎるので思ひ切つたことが出来ず、爲めに躊躇逡巡に陥るのであつて。敵將クロバトキンの連戦連敗の如きも、評者は歸著する所彼の頭腦が餘りに明晰過ぎたので、四方八面があぶなく見へて思ひ切つたことが出来なんだ爲め、それや彼の様に二年ごし連敗を繼續したのであると思ふのである。

斯く考へて見ると我が尊敬すべき東條將軍の如きも、矢張此の智者は斷なしの諺に漏れぬ一人であつて、餘りに敵のやり方に而已考を用ひ過ごして、却て自己の力で自己の利益のない様なことをやるに至つたのであつて。此の場合單に此の方面の敵の牽制位を命ぜられたのならば、東條閣下の此日の計畫で支障はないが。假りにも敵陣地を占領して丸井支隊の轉進を掩護するといふ任務を負ふたる以上、潔よき一戦をも交へずして後方に退避して此大切な一日を浪費しては、全く其任務を地形と敵情の爲めに左右せられたと評されても、一言一句の辯解も出来ぬ筈であると評者は信ずる。

て評者は醫術界に於て能く見る所の、實際家と學理家がある通りに我が戰術界に於ても、大に學理家と實際家があることを感ぜざるを得ぬ。即ち東條將軍の如きも自分から見ると全く此の學理家であつて、彼れに學理を講説てもさしたならばそれこそ實に天下無双であるが。此の大博士に脈を見させたる舌を出して見せたりしても、それは頗ぶる不得要領なる診斷しか出来ぬ、

數醫者先生と餘りに撰ぶ所がない。といふのは此二十六日に於ける戦闘の如き、全く何れの方面に於ても點數を與へる餘地がないのである。て讀者諸君何卒競ふて實際と學理とを兼ねたる眞の戰術大家になるを心懸け、若しそれが兩全にすることが出来なんだならば、寧ろ學理家になるよりも實際家になつてほしいと評者は思ふ。現在此日の丸井少將の行動の如き頗ぶる適當にして、これを東條將軍の戦に比較して見ると確かに一段以上の相違があるが、此の丸井將軍などは天保錢でもなければ戰術家でもない。然るにそれが大戦術家の東條將軍を凌駕して居る所を見ると、これ蓋し多年の練磨經驗が自然に此將軍を實際的大戰術家にしたのであつて、これ等が實に大に考慮を費やさねばならぬ事柄であるのである。これを要するに評者は東條將軍を以て學理的戰術家と認めるを以て至當とする。此將軍は事實實際的戰術家ではなかつたと自分は思ふ。何に然らばそういふ評者はどうだとこれは實に恐れ入つた。何をかくさう實は自分は指から先へ生れた人間であつて、岡目八目と

やら他人のあらは目―にどつこい筆につくが。事實全く一中隊の兵でも思ふ様には使用することの出来ぬ、矢張東條將軍の配下に當然屬すべき大凡愚等の木葉天狗の一人である。ゆめく此様な厄難者に、讀者諸君は決してなつてくなくてはならぬのである。

大正四年七月二十八日印刷
大正四年七月三十日發行

戰史評論叢刊

著 者 無 名 戰 士

東京市麹町區平河町四丁目十一番地

發 行 者 宮 本 林 治

東京市赤坂區田町五丁目十一番地

印 刷 者 山 田 三 次 郎



發行所

東京市麴町區
平河町

宮 本 武 林 堂

振替口座東京一〇九一二番
電話番町五五一八番

關東都督府陸軍部參謀長西川少將閣下題字
關東都督府陸軍部御編纂

東蒙古

紙數四百八十五頁
菊版洋布製美本
寫真版插繪四十五枚
彩色附圖大小壹枚
蒙古明細大地圖壹枚
價貳圓五拾錢
送外內地貳拾錢

本書ハ我關東都督府カ、幾多専門ノ士ヲ派シテ多年滿蒙ヲ踏査研究セラレタルモノニシテ、地理、歴史、宗教、産業、人情、風俗ヨリ其他有ラユル方面ニ亘リテ精々盡クシ密極メ、其記事ノ正確ニシテ内容ノ豊富ナル、恐ラク全蒙古ヲ一本ニ網羅シ得タルモノ本書ノ右ニ出ツルモノナシ、今日支交渉解決ヲ見ルノ時、允許ヲ得テ之ヲ世ニ公ニスルニ至レリ、政治家、經濟家以テ讀ムヘシ、軍人、志士以テ繙クベキ最良書ナリ。

發所 東京東區平河町四丁目一〇番 宮本武林堂

八月刊行 豫告 分水嶺附近の戦闘 下
戰史評論

大正四年八月(分水嶺附近戰鬪 下)

戰史評論

宮本武林堂發行

大正
4. 11. 1.
丙午

戰史評論

成 仁 武 夫 補
無 名 戰 士 評

第二十七回 分水嶺附近の戦闘 下

前回に於ては餘りに横道にそれ過ぎた爲めに、二十六日に於ける戦闘の
統べてを研究するの暇なくして、單に東條支隊のやり損じを痛論して其研究
を終つたから。今回の始めに於て二十六日の夜に於ける第十師團の處置を評
論して、さてそれから愈翌二十七日の分水嶺の攻撃に移ることにし様と思ふ
のであるが。六月二十六日の夜は各支隊ともに前回に於ける状況を以て、淺
田支隊は瓦房店から王家堡子の間に宿營し、鎌田支隊は大桑皮峪附近に停止
して翌日の攻撃を準備し、丸井支隊は翌二十七日轉進の準備をなしつつ、官

屯附近に其支隊を宿營せしめ、東條支隊は命令の目的を達し得ずして、退ざいて仙家峪東方の地區に宿營するに至つたのは、戰史第二卷第二十章二〇七頁の載する通りであつた。

川村師團長は依然岫巖に在つて諸支隊の報告を待ちつつある中に、大本營の通報を得て二十三日以來大石橋附近に敵の大兵力の集合しつゝあるを知つた。其中に淺田、鎌田、丸井三支隊からは何れも豫定以上の計畫進捗の報に接し、獨り最右翼に出せる所の東條支隊のみは其攻撃意の如く進捗せざりしことも知つたが。前にも既に掲げた通り大石橋、蓋平間即ち此の東條支隊に最も近い方面に、敵の大兵力が集中しつゝあるのであるから。敵の方へは如何なる増援が何時此方面に出て来るかも知れず、左すれば非常に師團の爲めに危険になるのは目前であるから、大に此の方面の戰況の發展せざるを憂慮して同夜午後十一時に至り、丸井少將に向つて

「貴官ハ明日必要アル場合ニハ一部ヲ以テ東條支隊ヲ援助シ主力ヲ以テ分水

嶺ノ敵ニ對シ前任務ヲ遂行スベシ』

といふ訓令を下して、それと同時に東條少將に對して

「貴官ハ明日丸井支隊ノ轉進ヲ掩護シ萬已ムヲ得サル場合ニアラザレバ敵ト激戦スルヲ避クベシ』

殆んど前任務と同一ではあるけれども、周家庄から仙家峪北方高地に亘る線の占領を強要せずして、却て持久的の戦闘をして敵を此方面に引き止めて以て丸井支隊の轉進を掩護する様に訓令する所があつたのであつた。

此様に二十六日の夜に於て川村師團長に少なからず心配をかけた而已か、翌日分水嶺を占領してから後に於ても尙ほ且此方面の砲聲を聞いて、同師團長はこれ確かに湯池附近の敵が進來して丸井支隊を攻撃するものとの疑懼を懷くに至らしめたのは、これ全く東條少將が二十六日に於ける其攻撃の方法を誤まつた爲めに、餘計な心配を師團長にさせる様な次第になり至つたのであつて。二十六日に於ける東條少將の退嬰戦闘は非常に師團長を苦しめたの

は事實であつて、更に此夜に於て上哈囉南方高地の敵が頑守する模様聊もな
く、他の隊と共に大木溝峪の方に退却したのを知るに至つて、愈以て東條少
將の力負けを残念至極に思はざるを得ぬのである。又筆が横道へそれかけた
が師團長は更に丸井支隊の轉進が非常に困難になつたといふ現在の情況を告
げて、淺田、鎌田兩支隊の互に相協力して其任務を執行するの必要あるを注意
したが、斯くなつて來ては其儘じつと岫巖に落著いて居ることが出來ぬので、
各支隊への訓令を下し終ると共に總豫備隊たりし歩兵第二十聯隊の第二大隊
を残して岫巖を守らせ、同聯隊の第三大隊を率ゐる二十六日夜半を以て岫巖を
出發して王家堡子へ向つて前進した。此の二十六日夜に於ける各支隊の情況
の變化に應じて、それ／＼相當の訓令注意を與へたる後明拂曉を俟つことな
く、夜半を以て岫巖を出發して正面本攻を行ふべき分水嶺方面に進んだのは、
師團長の動作として實に其全體に就て一點の申分も非難もない。一體此の分
水嶺の攻撃は最初の計畫が極めて適當であつた而已でない、其準備運動開始

の後に於て愈々攻撃といふ其前晚の、即ち此の六月二十六日の夜に於ける川村
元帥の處置が、これが頗ぶる至當であつて且つ其用意が周到であつた。から
して四個の支隊を相當の距離を以て諸方にばらまいた様なやり方をしながら、
それが何れも直接間接に相策應し相協同して、終に多大の力を費やさずして
堅固なる分水嶺を豫定の如く、二十七日に於て一舉占領するを得たのであつ
て、評者は此の夜の師團長の處置は一點の非難を加ふべき餘地がないことを
斷言するを憚らぬものである。

さてこれから愈々二十七日の攻撃の研究に移るが、先づ第一に其正面より向
ふたる淺田支隊のことを評論して、それから順次左方諸支隊の研究をするの
が都合がよいから、其順序で評論するつもりであるが。川村師團長が二十七
日午前五時に王家堡子に其總豫備隊を止めて、其司令部だけが進んで瓦房店
西方高地に到着して見ると最早淺田支隊は、分水嶺の攻撃部署を殆んど終了
して今や攻撃にかからんとして居つたのであつて、即ち其配備のし方は大要

左の如きものであつた。

正面より敵を牽制して兩翼に對する迂回を成功せしむる爲め、近衛歩兵第一聯隊第二大隊をして小偏嶺西北高地を占領せしめ、其第八中隊をして小偏嶺村端に在つて本道を守らしめ、同聯隊の第一大隊をして三間房西南標高四四二高地を占領せしめ、本道を挾んで分水嶺の敵と相對峙せしめて。さて近衛砲兵第一大隊の第一中隊を白沙河西方高地に、同第三中隊を瓦房店西北高地に布列せしめ、砲兵第十聯隊の第一、第二中隊は山砲であつて其射距離が短かいので、これを少しく前の砲兵陣地より進めて小偏嶺南方高地に布陣せしめ、近衛歩兵第一聯隊第三大隊を以て支隊の豫備隊として、これを白沙河と小偏嶺北方との二箇所に分置した。而して近衛歩兵第二聯隊(三中隊欠を以て楊胖溝の方向より、分水嶺の敵の左翼に迂回せしめて此日午前七時迄に、敵の左翼に進出して攻撃を開始せしむる如く準備した。

此の淺田少將の處置は極めて適當であつて、評者も此の通りに計畫するの

外には手段があるまいと思ふ。そこで第一番に困難なる楊胖溝より分水嶺の敵の左翼に迫るべき任務を帯びたる近衛歩兵第二聯隊は、其九個中隊を二つに分つて第四、第十一、第二、三中隊と騎兵小隊を、第三大隊長川崎寅三少佐現大佐に率ゐしめて、午前零時十分の眞の夜半を以て賈家堡子を出發して、關家堡子を経て小黃溝東方高地を目標に前進せしめ、其他の主力は聯隊長深谷呑天大佐(現少將)が之を提さげて、昨夜以來此方面の偵察に従事して地形を知りぬきたる、第十二中隊を尖兵として進路を關家堡子西方高地上に取り、唐帽山を目標として肅々として前進を起したが、此部隊の區分も又其進路の選定も適當であつたと思ふのは評者ばかりではあるまい。斯くて正面牽制部隊も左翼へ迂回したる部隊も何れも天明以前に皆其命令の位置へ就いたが、丁度そこへ師團長が瓦房店西方高地へ到着したといふ都合であつたので、川村元帥に於ても何等此の攻撃の配備に對して不同意がなかつたのは、これは然あるべき等の理窟であると評者も信ずるのである。

川崎少佐の部隊が楊胖溝から道路を離れて、同村北方の高地脈を傳ふて午前四時五十分標高五一六の北方高地に到着した時。其西方の小達峪南方標高四九五の鞍部に敵兵が居て、此の歩兵が猛烈なる射撃を川崎部隊に指向した。そこで川崎少佐は其三中隊を高地上に併列して之に對戦し、又聯隊の主力は此時楊胖溝西方標高五六六高地上に達して居たので、其第一、第二中隊を展開して川崎少佐に協力して、例の鞍部から射撃をした敵歩兵を左右兩高地から敵制して十字的に猛射した。

敵が不意の瞰射に少なからず周章する中に、川崎少佐の三中隊は更に進んで小黃溝東方八百米突の高地を占領して、敵の鞍部を頑守するものの側面を瞰射したので、流石の敵も居たたまらずして唐帽山北斜面の峻崖を攀ぢつつ西北へ向つて潰走したが。此間深谷大佐は敵の妨碍を受けずして唐帽山の南方を西進し、今此の潰走する敵に追撃射撃を加へたる後、午前七時に於て唐帽山一帯の高地を占領して其隊伍を整頓した。一體此の深谷吞天大佐の受け

た命令は、午前七時迄に分水嶺の敵の左翼に迫れとの主意であつて、今其午前七時に現在唐帽山南方へ到達したばかりであるから、まだ其目的地たる敵の左翼に迫らんとするには其距離が一里以上もある上にそれが峻山深谷であるから。此所て其隊伍を整頓する様な悠長なことをせずして、一刻も早く敵の左翼に急進するが至當であるといふ非難もあらふ。が併し評者は此の場合此の深谷大佐の處置は極めて至當であつたと思ふ、其故如何にとなれば此の聯隊の進路は全部が非常に峻岨である上に、それが多くは道路外の山稜を傳ふのであるから、此所まで到着するのに時間を多く費やしたのは無理からぬこととて、途中で敵がこれを拒止したに於て更に其時間を費やすの已むを得ざりしを諒とせねばならぬ。而して支ゆる小敵を散々に潰走せしめて、此の唐帽山一帯の高地を占領した以上は、まだ敵の左翼までは相當の距離はあるが、分水嶺の敵は爲めに少なからざる不安を感じたのは事實であるから、これ其目的の過半は遂行し得たと見てもよいのである。で此様な非常な山地

を夜間急進して敵と戦を交へた爲めに、隊伍が混淆したのはこれも亦た是非ないことであつて、此の儘で急進しては早く敵の左翼に迫り得るとしても、部隊混淆の爲めに指揮が容易でないから大した効力を顯し難い。そこで一先づ此所で隊伍を整頓して敵に向つて前進するに決したので、此の深谷聯隊長の處置は決して不當ではないのである。又川崎少佐は敵の退却したる後方に追躡して、江家堡から遠く石庄子勾の方まで進出したが退路の危殆をあやぶんで、第四中隊をあと戻りをさせて先に敵の占め居たる、小達峪南方鞍部を占領して自己部隊と深谷聯隊の後方を安全ならしめ、二箇中隊を率ゐて石庄子勾から右折して更に松坨子へ向つて前進したが、此川崎少佐の處置も適當であつて、此迂回に任じたる近衛歩兵第二聯隊は其主力も川崎少佐の部隊も共に淺田少將の指令の時刻に於て、敵の側背に迫ること能はずして敵の退却したる後に於て、分水嶺以北に進出したのは何となく戰機を逸したるの觀があるけれども、事實に於ては楊胖溝から唐帽山を経て、敵の左側背に向ふ此

深谷聯隊の急進を知つたる敵將レウエヌタム少將は、到底分水嶺陣地を守りおぼせぬことを覺つて退却に決心したのであつて。丁度都合よく其の敵の退却する所を苦しめることは出来ななだけれども、敵が分水嶺撤退の第一主因を作つたのは、其峻山深谷を物ともせずして急進して敵を脅威したる深谷聯隊の效能である。此の深谷大佐と川崎少佐の運動は、分水嶺占領に大なる効果を得せしめたものといふが至當であつて、難者の言の如きは極めて淺薄なる皮相の見としてこれを排斥するが至當であると評者は思ふ。

本道方面は前に掲げた通りの部署が夜の明けぬ内に出来て居たが、午前五時三十分頃に敵の歩兵が兄弟山村落附近を退却するのを見て、これに對して砲撃を開始すると相前後して、砲兵第十聯隊石光眞臣少佐の二中隊も、馬地勾西方附近高地に重層に配備したる、敵の散兵壕を目標として射撃を開いたのであるが。此の砲撃の開始を待つて居たらしかつた敵の砲兵は、其十六門を分水嶺附近に備へて直にこれに應戦し、其全火力を近衛砲兵二箇中隊の陣

地に集中して、凄まじき迄猛烈なる砲戦が交換されたのであつたが。武富少佐が過早に弾薬を消費し盡すを顧慮して、二、三十分の後に漸次さし控へて射撃を中止すると敵も亦、暫時猛射をしたる後にこれも同様に亦其砲撃を中止するに至つた。

元來此日淺田少將の考ては、丸井支隊が敵の背後へ進出して脅威の充分に成功して、敵が右側背を顧みて不安な様子を現はす時を待つて、猛烈に正面から分水嶺を攻撃するの豫定であつて。それ迄に敵が其の兵力を他方へ移動せぬ様にする爲めに、先づ砲兵兩大隊を以て砲撃を開始せしめた次第であつたが。既に午前の六時に近づいて來たけれども、楊胖溝から敵の左翼へ迫らせたる深谷大佐からも、何等の報告もない上にそれが適當に進出したらしい模様も敵の動作の上に見へぬのみか。鎌田支隊のことも丸井支隊のことも皆目少しも消息がないので、少なからず苦心焦慮の有様に立ち至つたのは無理もないことであるが。一方昨夜夜師團長からの訓令によると下哈塔附近の敵が

頗ぶる優勢であるといふので、迂回の成功を待つて居る中に極めて危険の位置に立つて居る、丸井支隊が此方面の敵から背後又は左側を脅かされる様になつては、それこそ全師團の死活に關する程な大危険に陥るの虞があつたので。幸ひ敵の砲兵が我砲兵の砲撃中止に伴ふて其砲撃をやめたのを機として、此方面の攻撃に任じたる近衛歩兵第一聯隊に攻撃前進を命じたのであつたが、此攻撃の開始は少しく時機が早かつたと思ふ。それは午前七時迄に深谷大佐が分水嶺の左翼に迫る豫定であり、又丸井支隊は今曉官屯から轉進を始めるのであるから。此兩迂回隊が充分に敵の側背に迫つて敵を驚ろかす爲めには、此の淺田支隊は午前七時前後から正面の攻撃を開始するが至當であつて、それ迄は砲戦を交へつゝ敵のせん様を眼を放さずに注視するのが必要である。然るに淺田少將が午前六時前に攻撃命令を下して、近衛歩兵第一聯隊の第二大隊は六時五分に前進を開始したが、これは確かに一時間餘り其攻撃の開始が早かつたと思ふ。但しここで少しく淺田少將に同情せねばならぬことは、

昨日の東條支隊のやり損じからして丸井支隊が非常に危険な位置に立つ様になつたことを、昨夜遅く師團長から知らせて来て居ることであつて、若し淺田支隊が丸井少將の迂回而已を當てにして、のんびんだらりと待つて居た場合、敵が此の丸井支隊を三方から攻撃する様な羽目に陥つては大變と考へた。それも無理からぬことで深谷大佐を始め極近い鎌田支隊も丸井支隊も、此日の運動に付て何等の通報も送らぬので、各支隊の行動が豫定の通り進捗して居るか否かが皆無不明であつた。そこで第一番に丸井支隊の萬一の危険を而己氣に懸けて居た淺田少將は、少し攻撃開始の過早であるのは知つて居たけれども、敵砲兵の射撃中止を好機として丸井支隊に萬一の危険なからしめんが爲めに、此の午前六時から攻撃を開始したのであつて、此の攻撃の開始は確かに一時間早過ぎたが、併し全く理由なくして其様なことをしたのでないであつた。

敵が深谷聯隊と丸井支隊の迂回と、鎌田支隊の兄弟山方面よりの右翼攻撃

とに驚ろいて、其戦線に動搖を來すの機に投じて正面なる此の淺田支隊が、猛然起つて攻撃前進に移つたならば、我に大なる損害を受くることなくして、敵をば非常に困難なる状況に陥らしめ得た而已ならず。迂回に任ぜられたる諸隊は充分に敵背後に侵入し得るので、敵は全く其退路を遮斷せられて四分五裂の有様を以て、潰走するの外に策のない様な大敗北に陥るのは目前であつたが。淺田支隊の攻撃開始が少しく早かつた爲めに、彼の防戦の爲めに比較的多くの損害を我正面の方面に受けたのと、敵の退却の決心を早くなされたのとは頗ぶる遺憾千萬であつた。特に此の日午前七時半頃に敵が退却を開始して、我が山砲兵は其陣地を變換して此の敵の退却を猛射した場合、馬地勾東南に猛進して猛烈なる射撃を開始したる近衛歩兵第一聯隊の第二大隊長、少佐大庭景一君が勇ましく此の大隊の前進を督勵して居る所を、敵の爲めに射撃せられて本道南方楊樹林の附近で、悲壯なる戦死を遂ぐるに至つたのは實に惜しむにも餘りある、壯烈を極めたる出來事であつたと評者は思ふ。

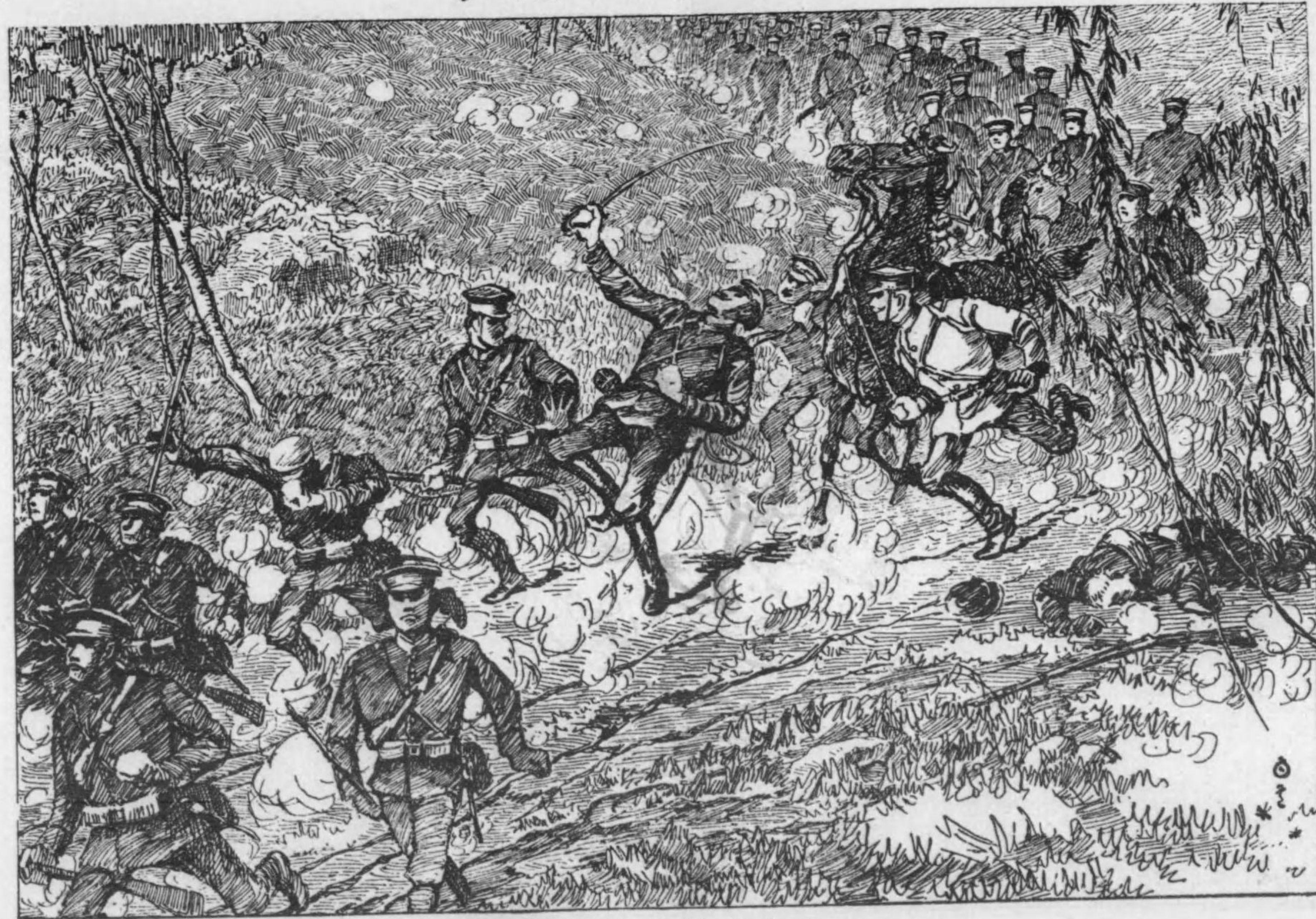
此の大庭景一君といふのは頭腦明敏なる上に、其出身が長州のしかも有力なる人の小供であつたので、士官學校を卒業すると共に頭はよし肩書はよし要路にばかり用ひられて居たが。若い人の破格の優遇は多くは其人に不利を齎らすものであつて、此の大庭君も餘りに持て過ぎて大分に遊び過ぎして、それが此人の一生に少なからざる累をなして、中途にして轆轤不遇の境に立つに至り、酒好きと磊落と奇行とで再び大庭君の名は全軍に高かつた。彼が松山衛戍に貧乏中尉として奉職した頃であつたが、實に頗ぶる人を絶倒せしむるに足る大奇行を演じた。當時檢閲のある毎に將校行李の整頓を檢査することが流行して、入用もない『ホワイトシャツ』などを度々買はせられたものであるが、赤貧洗ふが如き大庭君何とて其様な小面倒臭きことをするに堪へ様や。彼は軍用行李を全然空虚にしたる上に、其中へ銀貨五十圓宛の立派に封じたるもの二包を入れて、平然として師團長の行李檢査を受けたものである。此人が平素金満家であれば師團長もこれを信じられたであらふが、評判

の高い貧的が百圓の軍用金を貯へて居るといふのが頗ぶる奇蹟であるから、不審を懷かれた師團長は不遠慮千萬にも其立派に封じたる五十圓包を中央からぼつきとばかり折つて見たものである。果せるかな師團長の不思議に思はれたのも無理はない、其五十圓包の中味は二錢銅貨の喰はせものであつたので、流石の檢閲官も苦笑するばかり腹を立てる譯にもゆかず、それを見た大庭中尉は『ヤ仕舞た』とばかり兩手で頭をかかへた滑稽な有様に、檢閲官一同が思はず吹き出して仕舞て、これから廣島師團には『大庭の軍用金』の名が高くなつた。此様な人物であつたので常規に逸すること多く、休職や停職をくり返して居つたが日清戦役から全く眞面目になつて、満頭の白髪をものともせず近衛の大隊長として出陣し、大に爲すあらんとして居たものを惜しむべし。さして大苦戦でもなかつた此の分水嶺の戦闘で、討死をさせたのは實に残念なことであつた。實は評者は此の分水嶺の戦闘後間もなく此地を通過したのであつたが、三間房を出はなれると本道左方の小流のある楊樹林中に、

新らしい大きな木標を立てられて居るので。まだ其時は大庭少佐の戦死のことは少しも知らず、何人の墓標であるかと立ち寄つて馬を止めると、思ひかけきやこれが舊友大庭景一君の戦死の處であつたのである。戦場に出るものは元より生還は少しも期して居らぬけれども、人なき此の分水嶺の東麓の草茫々たる楊樹林中に於て、此の思ひがけなき故人の墓に謁した時には、流石木強漢と人から常に悪口をされる評者も、落涙滂沱たるを禁じ得なんだのは事實である。馬を下つて小流の水を掬して墓前に濺ぎ、其附近の原野の中をあさつて色も浅き胡地の夏草の花二三莖を墓前に捧げて、彼が瞑福あらんことを祈つた寂しい、心情は、今既に十三年後の今日に於てもこれを忘れることが出来ぬのである。

敵の動搖を見て益々攻撃を進捗せしめて、終に分水嶺を占領するに至つたけれども。若しも此の攻撃の開始を今少しく遅くして、十時に占領した分水嶺を午前十一時前後に占領する様にしたならば。深谷聯隊も丸井支隊も何れも

分水峯ノ攻撃



第九十九人進白面

其迂回を成功して、敵を三方から包圍し小孤山に通ずる隘路内で、殆んど全滅に陥らしむることが出来たのである。それを少し焦り過ぎた爲めに其兵員を損したる而已か、敵の退却を早からしめてこちらから態々注意して、敵を危地から脱出せしめた様な次第になり至つたのは遺憾であつたが。要するにこれは評者の望蜀の希望に過ぎぬのであつて、これ位に其攻撃が進捗したならば、先づこれを好結果と評しても支障はないのである。

又砲兵第十聯隊の石光大隊が、其射程の短かいのを補ふ爲めに常に敵に接近して陣地を占めるに意を用ひ、攻撃開始後に一度陣地を變換したる而已でなく、更に敵を追撃する爲めに機を逸せず分水嶺上まで急進して、退却する敵の諸兵を散々に猛射して小孤山方向に潰走せしめたのは、頗ぶる其處置が機敏にして且つ勇敢であつて、これ實に此の石井隼太聯隊長と石光少佐とが野戰砲兵操典第二部の

第十四 山砲ハ野砲ニ比シ射程上ノ威力小ナルモ運動輕易ナルヲ以テ山地

又ハ運動困難ナル地形ニ使用スルニ適ス(下略)

第四十五第二項 山砲ハ其特性ヲ利用シ野砲ニ比シ一層敵ニ近ク其陣地ヲ選定セザルベカラズ

第四十一 一局面ノ戰況劇變シ砲兵ノ神速ナル前進ヲ要スルニ方リ認可ヲ請フノ違ナキトキハ砲兵ノ各指揮官ハ之ヲ決行シテ後報告スベシ

第七十七 (前略)故ニ攻撃功ヲ奏スルヤ殊ニ野戰砲兵ハ其速度ヲ利用シ猛烈果敢ニ追撃ヲ行ヒ敵ヲ殲滅シテ戰勝ノ效果ヲ完カラシムルコトヲ勉ムベシとある各條を遵守して巧妙に運動したるの致す所であつて、此山砲は實に最も適當に戦闘をしたと思ふ。がそれに反して近衛砲兵大隊は敵砲兵の集中火の爲に、將校以下悉く耳を聳する様な目にあつて大損害を被つた爲めでもあらふが、最初の陣地に居ずくまつて何等前進を企てなんだのは、それが野砲であつた爲め山地の運動が困難であつたのが原因であるとはいへ、これは餘りに因循姑息に過ぎはせぬかと思ふ。最も野戰砲兵操典第二部第三十六に

『陣地變換ハ何レノ場合ヲ問ハズ一時射撃ヲ中絶スルヲ以テ妄ニ之ヲ行フベキモノニアラズ』

とあるから一地に於て充分に敵を射撃し得たならば、少しも其位置を變換するの必要はないのであるが。現在の近衛砲兵の陣地から分水嶺頂までは五千から六千米突位あるのであるから、充分に效力があるとは斷言出来ぬのみか。自分が實見したる所では此の本道の兩側には前進しても砲兵を置くに適する土地はあるのであるから、敵の退却前になつたならば其位置を進めるのが至當であつたが。敵砲十六門の集中火を喰つて一同が聳になつて仕舞た爲めに、此の大隊は頗ぶる其後の行動が遅鈍千萬になつて仕舞たのは遺憾である。一體戰史の上には『將校以下多クハ耳聳シテ號令徹底セス纒カニ記號ニ因リ動作スルニ至リシモ云々』とあるが、砲兵の將卒が砲彈の破裂の音響の爲めに聳になるといふのは、平素の訓練が不充分であつたか又は其準備が缺けた爲めであつて、これ又武富大隊が其教育の上に充分ならざる點のありしを證

するものである。であるから此の日の近衛砲兵二中隊の行動は、評者は遅鈍であつたと論ずるも決して苛酷でないと思へるのである。

淺田支隊は先づ此邊で切りあげて、さて此の二十七日に鎌田支隊は何をしなかと云ふと、これは頗ぶる適當に運動して夜を冒して敵に近づき、兄弟山の敵陣地を奪略して分水嶺の敵の右翼に迫り、敵の退却するの模様を現はすと共に全力を盡して追撃して、本道の右方の谷を西瓦子溝まで追撃したのは、實以て申分のない豫定通りの行動であつたが。唯一つ評者が頗る大不満足に思ふのは、折角敵の右側背を脅かすの好位置を占領して居りながら、其中隊の大切な砲兵を後方に布陣せしめた爲めに、此砲兵を以て敵の右横面を烈しく砲撃することが出来ななだことである。此砲兵が工兵小隊の加勢によつて午前六時三十分標高六九四鞍部東南千五百米突に布陣して、其距離が遠くして効果が擧らぬといふことが知れたならば、直ちに其運動の輕捷なるを利用して速に歩兵に隨伴して其陣地を進めて、兄弟山附近に進出布陣したなら

ば敵に偉大な苦しみを與へ得たに相違ないのであつたが。此砲兵第十聯隊の第三中隊長が氣がきかなのだのと、鎌田支隊長が砲兵の使用法に慣熟して居らななだ爲めに、進路が峻険であつたといふ名のもとに、極めて大切な砲兵一中隊を遠方から袖手觀戰の位置に立たしめたのは、我軍の爲め非常な大損をしたものであつた。此砲兵の使用の不適當と近い／＼淺田支隊へ、連絡して互に情況を知らせ合ふことの缺けたのは、此の鎌田支隊の此日に於ける不満足な點である。勿論連繫交通の不充分なりしは淺田支隊にも其罪があるのはいふ迄もないが、若しも此の兩支隊の間の連繫が今少しよくとれて居たならば、此の戦闘はもつと巧妙に且つ適當に進捗したであらふ。其他には別に申分はない先づ／＼無難な戦闘をやつたといふのが、鎌田支隊に對する此日の總評として最も至當なる、短評であると評者は考へる次第である。

あ次ぎの番は丸井支隊であるが、此支隊の行動に就ては評者は大々的に大なる申分があるのである。同支隊が此日歩兵第三十九聯隊の第二大隊を官屯

に残して、東條支隊と協力して支隊の背後を掩護せしめて、午前三時を以て後迷子溝を出發し横地長幹少佐現少將を前衛として、敵の背後松坨子を目標として進んだのは頗ぶる適當であつたが、約一里餘を進んだる瓦房溝に其支隊の主力を止めて、分水嶺方面に砲聲の起るを待つて居たのは何といふ不始末であるか。元來此支隊は敵の背後に進入するのを目的として、非常な危険を冒して此位置まで進んだのであつて、淺田支隊が本道と楊胖溝の兩方から敵を攻撃し、鎌田支隊が大桑皮峪から分水嶺の右翼に迫る手筈であつて、昨夜それを變更したといふ通知がない以上は、此朝これ等の豫定計畫は著々實行せられるに相違ないのである。果して然らば九井少將たるもの何も分水嶺の砲聲を待つ必要は少しもない、午前七時に瓦房溝に到着したならば、左側衛たる森少佐をして哈塔嶺の方面を押へさして、其全力を擧げて北部三道溝から南天門嶺に急進して、南天門嶺から文家勾に延びたる高地を占領して、敵の退路を其西方から瞰制したならば、レウエスタム少將部隊は全く此所で

全滅に歸したに相違ない。午前七時に瓦房溝に達して集合したとあるから、それから約一里半内外の南天門嶺山上迄は、遅くも午前九時には進出し得られる筈である。此の九井少將が歩兵二大隊半と砲兵一中隊を提さげて、午前十時前に此の南天門嶺の上に突出したとしたならば、其眼前の析木城街道には無数の敵が百足の様な有様で、もみにもんで小孤山に向つて退却最中である『バノラマ』が、其九井少將の双眸の中に満ちたであらふ。果して然りとすればそれから後のことはいふに及ぶまいと思ふのであるが、昨日頗ぶる適當に行動したる九井少將は、此日殆んど別人の如き拙ない行動をして、瓦房溝で無益に砲聲を聞く爲めに時間を浪費し、單にそれ而已でない大切な兵力を小数の敵の爲めに、其邊一帶にばらまいて仕舞て松坨子に焔煙の飛揚するのを見て、愚劣千萬にも道を換へて小孤山に進出せんとして、終に小数の敵の爲めに其進路を扼せられ、全く敵の側背に潜伏して此戦間を空しく過ごしたのは、何といふ腑甲斐ない戦闘のやり方をしたものであつたらふ。

但し丸井少將の任務は最初から最も困難であつた、からして評者なども大に同少將の行動を氣遣つたのであるが、それが官屯迄難なく侵入し得て更にそれから、松埒子に轉進することも出来たのであるから。同少將が愈々其實際の腕前を現はすのは、實に此の二十七日の早朝の行動如何にあるのであつて、何も他の砲聲や何かを心配することはないのであつて、最早こゝまで豫定通りに戦況が進んで来た以上は、丸井少將が敵の退路に迫れば敵は退却するの外には策がないのである。又同少將が瓦房溝に居たからとて、更に進んで松埒子西方高地を占領したからとて、危険の程度に少しも變りはない筈であつて。同少將の支隊が危険を感じるのは、レウエスタム少將の方面ではない、湯池の方からミシチェンゴ支隊に加勢が来て、それが背後から迫るのが一番に恐ろしいのである。からして一時も早く分水嶺の敵の退路に迫り、之を全滅せしむるか降伏せしむるか又は栃木城の方へ潰走せしむれば、丸井支隊の危険は頗ぶる軽減して来て、萬一敵が背後から出て来る様な場合には、其隊

を轉回せしめて西方に面して、退路を分水嶺の方向に變換すれば何のこともないのである。此様な見易い道理が了解出来ずして、瓦房溝で逡巡して仕舞たのは丸井少將の爲めに評者は大に遺憾千萬であると思ふ。

單にそれ而已ではない丸井少將は、此朝から殆んど砲聲を聞かなんだ様に戦史には記述してあるが、分水嶺の敵砲兵からも鎌田支隊の砲兵からも、瓦房溝までは直径約二里であるからして、近衛砲兵の武富大隊が將校以下金聲になるまで砲撃された砲聲が、少しも丸井支隊へ聞へなんだといふも不思議の一つである。風向きが悪ければ二里の距離では聞へぬかも知れぬが、敵砲十六門淺田支隊の砲二十四門鎌田支隊が六門、彼我合計四十六門の大砲が二里内外の所で激戦を交へたのであるから。丸井少將の耳へも少し位は感ぜねばならぬ筈であるが、此少將も近衛砲兵隊同様に砲聲を聞かぬ先から金聲にでもなられたのかと思ふ程、評者は此の戦聲の聞へなんだのに不審をたてざるを得ぬのである。

それ等一切は先づよしとしても、午前十時頃に松坨子の焔煙を見て敵が物資を焼くと知つた以上、更にそれから蔡家溝の方へ轉進せんとしたのは頗ぶる拙ない。先づ其焔煙を目標に何故に松坨子へ急行せなんだのであるか、斯くすれば遅そくとも少しは敵を苦しめ得たに相違ないのに、更に其後方に進出せんとして却て少敵の爲めに喰ひ止められて、此日此の丸井支隊は何等の爲すことなくして戦闘を終つて仕舞つたのは實に残念といはねばならぬ。最も直接の戦闘はしななだけれども此瓦房溝方面に進出したる丸井支隊の行動が、レウエスタム少將の心膽を寒からしめたのは事實であつて。此の丸井支隊と深谷聯隊とに其兩翼を迂回されたので、數月以來堅固に築造したる分水嶺の陣地の威力を、六七分も發揮せぬ中に退却して仕舞たのであるから、間接に於ける丸井支隊の効果は頗ぶる顯著であるけれども。それと共に併せて直接の大戦功を立てられる好位置にありながら、空しく流星光底に長蛇を逸し去つたのは、丸井少將が全く武運が拙なかつたのであつて、若しも此日

丸井支隊が午前十時前後迄に、松坨子附近へ進出して居たなれば、此日の戦勝の功は全く丸井將軍一人に歸することになつたのである。それが此様に頗ぶるへまになつて仕舞たのは、滿るを缺くといふ天の配劑であつたかも知れぬが、評者は將軍の爲めに實に齒癢く思ふの念に堪へぬのである。

忽ちにして一天墨の如くかき曇つて、急風驟雨殆んど通視も出来ぬといふ大天變に遭遇したが。是れ實に萬事萬端頗ぶる都合よく丸井支隊の爲めに配膳してくれた、天佑的の山海の大珍味の箸をとらずして、遠方に於て躊躇逡巡したる丸井少將の胸甲斐なき有様を見て。非常に憤慨すると共に其武運拙なきを悲しんで、天公が我が日本軍の爲めに蹴いてくれたる萬斛のくやし涙に相違ない。然るに此様な天の怒りに出會ふても少しもそれに氣が著かずして、更に雨が晴れあがつたけれども、追撃の時機を逸したるを知つて其儘何もせなんだのは、全く此日此將軍は何か魔物にても魅せられて居たのであらふ。此様な何れの部隊も極めて引込思案なことばかりして居る間に於て、歩

兵第三十九聯隊の第十中隊が、獨り南天門嶺附近まで進出して、今や松埤子を通過せんとする敵の後尾に追撃射撃を決行して、これを潰亂せしめたのは天晴れてある。若し此支隊の各隊長が此中隊長の爪の垢でも呑んで居たならば、敵を此の隘路で全滅に陥らしむるは決して難事ではないのであつたが、返すくも惜しいことをしてのけて仕舞たものである。

二十六日餘りに決斷のない戦闘をした爲めに、此方面の戦況非常に師團長の意圖に合せざることとなつて仕舞て、已むを得ずして丸井支隊へは要すれば東條支隊を加勢せよと命令し、又東條支隊へは勉めて激戦を交ゆるなといふ訓令を下したが。此の訓令を受けたる東條少將は此夜に至つて、非常に此の二十六日に於ける引込思案の戦闘の至當ならざりしを自覺して、此の激戦を避くべき訓令を受けたに關はず、二十七日早朝に於て其攻撃の計畫を全く前日と一變して、一大隊を以て仙家峪方面を押へさせて置き、他の歩砲の全力を擧げて上哈噠方向より猛烈に攻撃するの準備を整へて以て丸井支隊の

二十七日に於ける轉進を掩護し様と決心したが。遅いながらも先づ、此様な戦闘をやる決心が出来たのは、同將軍の名譽を絶対に地にまみれるに至らしめなんだのであつた。

一體此上哈噠東南の陣地は敵の前哨陣地であつて、二十六日東條支隊の主力が進出した時には一中隊餘しか居らなんだのである。然るに東條將軍が力負けをして居る間に漸次兵力を増したが、それでも一大隊足らずのものであつたのである。然るに周家庄の方から丸井支隊に攻撃せられた爲めに、此方面に加勢に赴いたトルマチェフ大佐が銅匠峪の方へ退却すると同時に、何等退却の命令もなにもないのに此の上哈噠東南高地を守りたる敵二中隊も、ヤレ引けやいと大喜びで退却して仕舞たので、實際此の方面の陣地には全く敵が居らなんだのであつた。若し東條將軍が此日攻撃をせなんだとしても、せめては上仙家峪西方高地を占領せしめて置いたならば、丸井少將が義侠的に夕方からしてくれた攻撃の此効果を、眼前に見ることが出来た筈であつて、

左すれば此の陣地は二十六日の夕方に於て東條支隊に屬することになり、師團長や丸井少將に非常な心配をかけたなり、又は丸井少將の二十七日の行動を、彼の様に躊躇せしむるに至らんで済んだのであつたに。理由なき此支隊の主力の退却は全く師團の攻撃計畫を、爲めに將に大に誤まり了らんとしたのは事實であつた。

二十六日の夕方から一兵も居らなんだ陣地を、夜中に於て其攻撃の計畫を一變して、歩兵一聯隊砲兵二中隊工兵一中隊の兵力を以て全力を舉げてこれを攻撃し。山縣少佐の一大隊は依然仙家峪にあつて此方面の敵を牽制したのであるから、何等の大なる戦闘をもなすことなくして、最初師團長から命ぜられた占領すべき陣地の半部、即ち周家庄から上哈噠東南に至る間の高地を占領し得たが。實際これは敵が大なる過失を犯して其儘て夜を明してくれたので、幸運なりし第十聯隊長小野寺大佐や山畑少佐現大佐が無抵抗で占領したのであつて、乍遺憾少しも東條少將攻撃計畫の優秀によりしものでないの

であつた。

此攻撃の際に於て兩軍ともに殆んど同じ過失を犯した中隊のあるのは頗ぶる面白い對照である、即ち敵の標高四三五鞍部に出て居た一中隊半程の歩兵は、我歩兵が上仙家峪西方高地に現出したるを見て、まだく此地の維持が困難に陥るには餘程間があるに係はらず、其西南方の高地上に占位する例の標高四八三高地の味方の許へ退却して仕舞た。これが爲め敵は此地を固守せんとして増援を送り、又其地を死守すべき命令をも下したが何れも後の祭となつて仕舞て、易々と日本軍に此高地を占領せられたのは、露軍の爲めには非常に残念なる失敗であつて。此の一中隊餘の兵が頑張つて居て、そこへ増援が到着したならば此攻撃は容易に進捗せなんだのは勿論であると思ふ。

然るに此の露軍の中隊長によく似た中隊長が我軍にもあつた、それは此の敵の棄てて逃げたる標高四三五鞍部の北方高地を占領したる、歩兵第十聯隊

の第五中隊長であつた。彼は敵の居らぬので何等の抵抗も受けずして該地を占領したが、其中に敵の砲弾が下哈塔の方から飛んで来るし、標高四八三高地からは敵歩兵の射撃を蒙つた上に、其左前方の下哈塔の方から有力な歩騎兵が前進しつつあるのを見たので。大早計にも到底永く此陣地を保持する能はざるものと、手前勝手に都合のよい判断を下して仕舞て午前九時四十分、後仙家峪に向つてをめぐと敵に後ろを見せて仕舞て、自己の北方高地上に進出したる他の各中隊の側方の危険などには聊か以て頓著せなんだ。これ實に此の中隊長の心得のよろしくないはいふ迄もないが、併し戦史は此場合に於て此陣地固守の支隊命令が小野寺大佐に下つたと記述して居る所を見ると、此陣地に進出してこれを占領したのも其實支隊長の計畫でなくして、此小野寺大佐の獨斷的自然のなり行きが、敵の居らなんだ爲めに此陣地を偶然に我手に入れたものと見るが至當であつて。それであるから此の陣地を退ぞいてはならぬと此場合に至つて支隊命令を下したのであらふ。若し最初此

の早朝から此陣地を攻撃する命令を下して戦つたものならば、一度占領したる陣地を容易に棄ててならぬことは、歩兵操典第二部第三十七に於て
『一旦占有セル地區ハ尺土ト雖再ビ之ヲ敵ニ委スベカラス』

と大嚴戒を掲げてあるのでも知れ切つたことである。であるから此朝の東條支隊主力の攻撃といふのも、其實敵が居らなんだ爲めに上仙家峪東方高地迄進んだ諸隊が、何の氣なしに進出してそれが物怪の幸となつた様な次第であつたに相違ない。斯く考へて見ると此の第五中隊長の退却も強ち咎めだては出来ぬのであつて、自分の勝手に進んだのであるから自分の勝手に退却した迄で、何も東條支隊長とは没交渉であるのであるが。併し假りにも中隊長たるものが此様な地を占めたならば、自分の進退が全支隊の大利害に關係するといふことを考へねばならぬのであつて、其位の判断の出来ぬものであつたとしたならば、此の中隊長は士官たるの價値のない人物である。同一地區に於て敵も味方も同一なる過失を犯したが、我軍に於ては小野寺大佐が機を

逸せず第八中隊を急進させて、此の第五中隊の跡を直ちに占領させたので、爲めに東條支隊は此日の任務を辛ふじて遂行し得たのであつて、此の日露兩軍中隊長の退却は何れも軍法を以て之を問ふべき價值が十分にあると評者は信ずる。

右様な過失や行違ひは多かつたけれども、東條將軍が昨日仙家峪の方から歩兵一大隊と砲二中隊で敵を威嚇した效能が今日偶然現はれて、敵は爲めに其兵力を多く下哈塔から下仙家峪の方に集めたので、夾山勾から松坨子東方に亘る丸井支隊の殘留部隊と相連繫して、周家庄から上哈噠東南方鞍部に至る高地を占めて、全く敵の丸井支隊の背後を窺ふことの出来ぬ様にしたのは、先づ以て東條將軍の手柄であつたのに相違ない。が併し此支隊が防支し得たのはミシチェンゴ支隊の主力而已であつて、此日拂曉より銅匠峪附近に集合したるトルマチェフ少將が、無遠慮に接官听から後迷子溝の方へ侵入したならば、丸井支隊の殘留部隊は到底これを防止する爲めには餘りに力が少な過

ぎるし。去りとして上哈噠南方より大兵力の歩騎兵から攻撃を受けつつある東條支隊は、如何にしても此方面に加勢をすることは出来ぬので、それこそ非常な大危険が丸井支隊の背後へ迫ることになる所であつたが。天佑は我が日本軍の常に有する所であつて、敵將トルマチェフは爲すこともなく此の好機を前に控へながら、銅匠峪で此日一日の午睡を貪ぼつてくれたので。失敬な申分の様ではあるが昨日の東條將軍の攻撃計畫の失敗が、却て此の二十七日に至つて全く過ちの功名となつて現出して、辛ふじて此の將軍の戰術的名譽を間一髪の所てつなぎ止めたのは、此將軍中々に武運の拙なくない好運兒であつた。

難者或はいはん東條將軍は此日立派に其任務を盡したてはないか、それを彼れ是れと非難がましい言辭を弄するのは頗ぶる其意を得ぬ。即ち激戦を交ることなく又所命の陣地の一部を占領して、立派に丸井支隊の背後を掩護した以上は、何も彼是れと申分のある筈はないかと。成敗の結果を以

てこれを論ずれば難者の言にも一理はある、が併し此日淺田支隊長が適當なる攻撃の時機到るを待つを危ふしとして、過早に正面から攻撃を開始したのは何の爲めであるか。丸井少將が昨日の行動に似も付かず、此日非常に躊躇逡巡したのは果して何の爲めであるか。更に川村師團長に激戦を交ゆるなどいふ命令を東條支隊に下さざるを得ざるに至らしめたのは何の爲めであるか。更に評者の親友大庭景一少佐に無益の戦死を遂げさせたのは抑、何の爲めであるか。數へ來ればまだ、澤山十指を屈するも足らぬ程なる失態の原因は、一にかかつて此東條支隊の二十六日に於ける、其行動の不適當から來て居るぬのではないのであつて。これ程他の人々に迷惑をさしたる東條支隊が、よしや此日此方面で多少自分の兵力よりは優勢なりしミシチエンゴ少將支隊を喰ひ止めたからとて、これを以て立派に任務を遂行し得たと稱すべきものではないのは評者の言を俟つまいと思ふ。況やそれが他の平凡なる人ならばいざ知らず、人も日本一の戦術家と仰ぎ又彼れ自身も、其戦術家を以て自から任

じたる東條將軍が、此様な拙ない戦争をやつてそれで其任務を遂行したりと考へたとしたならば、評者は少なからず此將軍の爲めに惜まぬを得ぬと思ふのである。人誰か過なからん過て改むるに憚ることなくんば、それでこそ人格の人と稱すべきである。此東條將軍の戦術上の學力の優秀なるは稱賛するに餘りあるも、此兩日に於ける此の將軍の戦闘は評者は稱賛すべき一點をも見出し得ぬのである。

前回以來の露軍の行動に就て少しく研究して見様と思ふが、餘り永談議にならぬ様に摘要的にこれを評論して見ると、二十六日の早朝に日本軍が前日から運動を始めたらしいので、王家堡子に居たクウジミン、カラワーエフといふ恐ろしい難かしい名の中佐は、數箇の有力なる搜索隊を岫巖方向に進めたはよいが。此搜索隊は日本軍の一縦隊が四道河子の方から前進するを認めただばかりで、何れも大偏嶺に向つて退却して來たが。此偵察隊が鎌田支隊の方のことを少しも知らなんだのは大不注意であつて、爲めに分水嶺守備隊が適

當なる部署をなし得ななどは事實である。又同中佐が餘りに歩々の防禦をせんとした爲めに時間を費やして、敵の進來を遅緩せしむることが出来なだ上に、其部隊は終始日本軍から烈しい追撃を受けて、其一部の如きは鎌田支隊の一部に衝突して居りながら、餘りに狼狽してこれを他の縦隊と思はずして自己が敵の追撃隊から退路を断られたと速了して、各箇各別潰亂離散をなしたる爲め約百名を失なつた如きは、此前進支隊の行動の頗ぶる拙劣であつたのを證するもので、爲めに分水嶺守備隊は非常に志氣を沮喪せしめたのである。

分水嶺附近の防守に任じて居たフレシコフ少將が、二十五日に丸井支隊の魏家大嶺方向に前進したのを知つて、北嶺方面に兵力を増加したのは適當であるが。此の派遣された大隊長は其主力を兄弟山に置いて、ほんの僅少な部隊を北嶺に出した而已か、其僅少の部隊も二十六日早朝に兄弟山へ退却して仕舞たので、レウエストラム少將が此方面を心配して出したる西瓦子溝東南谷

地の一大隊と連絡するに至らずして、此方面が極めて不用心であつた而已か、鎌田支隊の運動を充分に知るを得ななどはこれも至當でな。此様な次第であつた爲めにフレシコフ少將がレウエストラム少將に送つた報告が、非常に馬鹿氣た程に誇大に敵情を判断してあつて、

『二十六日午後四時ヨリ五時ノ間ニ於テ歩兵九聯隊、騎兵三聯隊、野砲三門、山砲四門五間房附近ニ集合シ後歩兵三大隊、騎兵一中隊ハ賈家堡子方向ニ歩兵九大隊ハ大桑皮峪ニ轉進シ殘餘十五大隊中六大隊ハ橋家堡子ニ退却セリ』
といふ報告をしたがこれは實に何をいふたのか少しも譯が分らぬ報告であつて、歩兵九聯隊には何人と雖ども一驚を喫せざるものはあるまいと思ふ。此様な誇大極まる報告を信じたものであるから此分水嶺の露軍は、常に殆んど逃げ腰しのみをして居る様になつたので、これ全くクウジミン中佐及びフレシコフ少將の敵情搜索不行届の罪である。

又ミシチェンゴ少將支隊の方では二十六日東條將軍に、一本參つたけれど

もこれも實は東條少將が力負けをしたので、何等ミシチエンゴ少將の功績と認むべきものがない而已か、丸井支隊に其左翼を攻撃されてトルマチエフ少將が増援にゆき、それが力及ばずとして銅匠峪に退却するに當つて、これが右方の上哈囉東南高地の大切なる陣地を守つて居た西伯利歩兵第十二聯隊の第五、第六中隊が、其陣地を棄てて大木溝峪へ退却して仕舞たのは大失態で、東條少將は爲めに二十七日に此地を易々と占領して、此支隊を此方面にひき止め得たのは全く此の兩中隊が陣地を棄ててくれたお蔭である。

二十七日深谷大佐の迂回するに當つて、其進路を扼したる露軍一中隊の行動は實に健氣であつたが。其後方長嶺に居た騎兵めが大腰拔て、日本軍が趙家堡子以西に侵入して其退路を全く斷絶したといふ虚報を傳へた爲めに、非常な困難をして唐帽山北方の斷崖的斜面を横斷して退却したのは勇敢であつて。此中隊が騎兵の虚報に誤まられなんだならば、まだく深谷大佐の迂回を遅緩せしめたに相違ないのであつた。單にそれ而已でない此中隊は其兵卒

迄が何れも勇敢であつて、何でも唐帽山附近に設けたる回光信號所を預かつたる上等兵は、我が深谷聯隊の大迂回を回光を以て分水嶺に信號したが、分水嶺から受信の信號がないので、何度もく其信號をくり返して居る中に、日本軍は間近に迫つて猛烈にこれを射撃したが。勇猛なる此の上等兵は少しもそれに騒かずして、相變らず日軍大迂回の回光信號をくり返して、分水嶺から受信の確報があつたのを見て、始めて退却せる中隊のあとを追ふて狼狽することなく退却したのは、實に見あげた勇士であつたと稱賛するばかりでは足りない。此通信があつた爲めに支隊長が早く分水嶺の退却を決心し得たのであるから、敵が我が兩翼包圍から巧に脱し得た効能の大部分は、此の上等兵の勇敢なる信號のお蔭であるといふてもよい、實に天晴れなる上等兵の振舞であつた。て敵の左翼に遠く出て居た歩兵中隊は、此戦闘中一番確實に其任務を遂行して居たといへるが、更に其左方にあつて翼側を警戒して居た騎兵は實に怪しからぬ奴輩で。自己が過早に逃げ出して河峪險子へ退ぞいた

而已か、日軍大迂回の虚報を傳へて友軍歩兵中隊に非常な無駄骨折をさせたのは、實に不都合千萬なる腰抜けどもであつた。

露軍の右翼から迫るに當つては、兄弟山を堅固に占領せられて居た場合には其運動が非常に困難である、からして鎌田支隊も此の要地を懸念して夜を冒してこれに近接したのであるが、此地には歩兵二中隊と獵兵が一隊居たに係はらず、日軍の近接すると共に碌々戦闘をも交へずして其後方に退却したが、これは實に不都合千萬であるといはねばならぬ。左翼には歩兵一中隊しか出さなんだ分水嶺の防禦指揮官が、其倍數の歩兵と獵兵一隊を此所に置いたのは、鎌田支隊がここから進來したならば、一時此の要地に據つてこれを苦しめんと計畫したものであつて、單に監視の爲めに出したのではないのである。然るに敵の近接を知りそれが自分より優勢であるを感ずると共に直ちに其後方に退いたのは頗ぶる腑甲斐ないやり方であつて、鎌田支隊の進行が其後甚だ緩慢であつたから、左までに此の兄弟山の過早撤退が全軍に影響

を及ぼさなんだが、若し此の露軍の退却に尾して鎌田支隊が急進した場合に、丁度正面からの攻撃が少しく發展しかけた頃には、此支隊は分水嶺の側面に當る高地へ進出し得たる而已か、更に進んで交界牌の高地を占めて敵の退却を散々な目にあはせたとに相違ない。であるから此地を守つた歩兵二中隊の退却は極めて過早であつた、此地は如何に烈しき日軍の攻撃を受け様とも分水嶺の東方の大部分が交界牌以北へ退却する迄は、死力を盡して頑強に防守すべきが至當であつて、決して輕々しく撤退すべき地點でない。それを僅々一大隊位の兵が其前面に現出したのに驚ろいて、さしたる交戦をもなさずして退却したのは、其守備兵の隊長の處置も頗ぶる不當であるのはいふ迄もないが、一方地區指揮官からの命令の下し方も、左までに此地點を重要視して居らなんだのに起因するのであつて。これを攻めたる我鎌田支隊の行動も極めて緩慢であつたのは遺憾千萬で、要するに敵味方の過失が集合して、此地の過早撤退が左したる露軍に苦痛を與へるに至らなんだのは、誠に不思議な

る出来事であつたと評者は思ふ。

レウエストム少將が前面の攻撃は烈しくないが、兩翼から大迂回をなしたる日軍の著々成功するのを見て、其分水嶺の防禦が非常に危険に瀕せるを看破し、午前七時前後に於て退却の決心をしたのは評者は大に同意である。若し此の場合前面の敵情の餘りに急に迫らぬ爲めに欺むかれて、うつかりして時間を此所て徒消したとしたならば、深谷呑天大佐は左より鎌田支隊は右より、更に丸井將軍は全く其背後を扼するといふ、大々の危険に陥つて仕舞て分水嶺の露軍は全滅に歸する所であつた。然るにレウエストム將軍は速に退却の決心をして、極めて迅速に其退却の諸準備を完了した爲めに、萬死の中に一生を得て小孤山以北に退ぞくを得たのであつて、此の退却の決心は頗ぶる至當であつたと思ふ。

但し此所て一つ非難を申上げるのは、此退却を決すると共に松埤子にある糧秣の莫大なるものに火をかけたる一事である。此日日軍はまだ露軍が

退却に決心したとは知らなんだが、天を焦して焰々として燃へあがる黒煙りを望んだる、各方面の日軍は此の煙を見て何れも露軍の退却を察知した。糧を敵に委するは實に残念千萬である、一粒でも残して置きたくないは人情であるけれども、此様な場合狼りに糧秣を火するといふ様なことをすると、これが退却の報告を敵に呈すると同一の結果になるのは目前であるから、此様な場合には少し位の糧秣は敵手に委しても過早にこれを焼くべきものでない。戦況不明に苦しんだる丸井支隊も深谷聯隊も、正面の淺田將軍も鎌田大佐も、皆一様に此の松埤子の煙を望見して敵の退却を知つたのは事實であるが、其退却を知ると同時にこれを急追するの快舉に出た人が一人もなかつたので、敵は早くから退却報告を日軍に呈して置きながら、比較的容易に退却を遂行し得たのであるがこれ實に日軍諸將の油断であつて、此焰煙天に冲するを見ると共に各方面とも遮二無二突進急迫したならば、レウエストム少將は捕虜となつて分水嶺支隊は全滅に陥つたかも知れぬのである。て此の戦に於ては

日軍の追撃が頗ぶる緩慢であつたお蔭で大なる危険に陥らなうだが、此様な場合に早くから糧秣燒棄を實行するのは非常に危険である而已か、味方の志氣の上にも大影響を及ぼすからこれは大に考へねばならぬと思ふのは、評者一人の偏見では決してないのであると自分は考へる。

ミシチエング支隊の方では、此日攻撃の假似方をやつて見たが何の効果もなく終つたが、此日此攻撃に當つてパウロフ大佐が中途で逡巡して更に督促命令を受けたなどは、實に片腹いたいやり方であつて此様なざまでは、到底本式に東條支隊の陣地をとり還すことは不可能である。更に其左に並んで居たトルマチエフ少將の如きは、歩兵二大隊、哥騎兵六中隊、砲六門を擁して居りながら。其前面には一大隊足らずの丸井支隊の殘留部隊が居るのみで、何等有力なるものが居らぬのであるから、夾山勾の方面から丸井支隊の背後を攪亂したならば、左なきだに躊躇して居た丸井支隊は、全く其運動をこれに制限せられたに相違ないのに。此のトルマチエフ少將殿少しも其様なことに頓

著なく、唯其前面の零碎なる歩兵と小戦を交へることを能事として、此好位置に此の二十七日一日安閑として暮したのは、何といふ惜しいことをしたものであらう。若此のトルマチエフ將軍にして本氣に丸井支隊の後方に迫つたとしたならば、東條支隊はミシチエング支隊の主力に遮られて此方面に向ふことが出来ず、如何に丸井支隊は危地に陥つたか知れぬのであつたに。これに此の將軍が氣がつかなんだのはこれ全く天佑であつて、露軍の爲めには實に天罰とでもいふの外はあるまいと評者は思ふ。

之を要するに此の分水嶺の戦闘は、兩軍ともに烈しき戦を交へたのでもなく、又割合に大ならざる部隊の對抗したるものであつたに係はらず、其攻撃の計畫も防禦の部署も頗ぶる大仕掛けてあつて。之を攻撃したる川村元帥のやり方も先以て頗ぶる巧妙に進捗して、非常に惡戦をなさずして敵を退却せしめ得て、分水嶺の險を占領したのは大手柄であつたが。敵も割合に手廣く陣地を占めて居たに關せず、速に其退却の決心をなして非常なる難境に陥ら

ぬ先に、兎に角全部を纏めて退却を遂行し得たのは、悪る口はたたくものの
 レウエスタム少將、彼れも中々手腕のある人物であつた。先づこれて分水嶺
 の戦闘の研究を終つて、更に來月は何か面白い戦史の評論をやつて、此の炎
 暑の爲めに不消化に陥つた胃中の、溜飲三斗を一氣に吐き出して讀者諸君と
 相見へる考へてある。

大正四年八月二十八日印刷
 大正四年八月三十日發行

戦史評論奥附

著 者 者

無 名 戦 士

發 行 者

宮 本 林 治

東京市麴町區平河町四丁目十一番地

印 刷 者

山 田 三 次 郎

東京市赤坂區田町五丁目十一番地



發 行 所

東京市麴町區
 平 河 町

宮 本 武 林 堂

振替口座東京一〇九二二番
 電話番町五五一八番

關東都督府陸軍部參謀長西川少將閣下題字
關東都督府陸軍部御編纂

東蒙古

紙數四百八十五頁
菊版洋布製美本
寫真版插繪大小八枚
彩色附圖大地圖壹枚
蒙古明細大地圖壹枚
價貳圓五拾錢
送外內地貳拾錢

本書ハ我關東都督府カ、幾多専門ノ士ヲ派シテ多年滿蒙ヲ踏査研究セラレタルモノニシテ、地理、歴史、宗教、産業、人情、風俗ヨリ其他有ラユル方面ニ亘リテ精ヲ盡クシ密ヲ極メ、其記事ノ正確ニシテ内容ノ豊富ナル、恐ラク全蒙古ヲ一本ニ網羅シ得タルモノ本書ノ右ニ出ツルモノナシ、今ヤ日支交渉解決ヲ見ルノ時、允許ヲ得テ之ヲ世ニ公ニスルニ至レリ、政治家、經濟家以テ讀ムヘシ、軍人、志士以テ繙クベキ最良書ナリ。

發所 東京東區平河町四丁目番二九〇 宮本武林堂

九月刊行 豫告 遼陽會戰に於ける第十二師團の戰鬪

正誤

本評論前回(第二十六回)ノ表紙「大正四年七月(分水嶺附近戰鬪下)ハ」大正四年七月(分水嶺附近戰鬪上)ノ誤リニ付訂正ス

大正四年九月（於遼陽會戰第十二師團 上）

戰史評論

宮本武林堂發行

大正
4. 10. 20
內交

戰史評論

無名戰士評
成仁武夫補

第二十八回 遼陽會戰に於ける第十二師團 上

明治三十七年八月上旬に於て、我總軍司令官大山元帥は遼陽附近に大集中を行なへる敵を攻撃せんとして、其指揮下にある各軍司令官に對して攻撃計畫を通報したが。折あしくも其計畫を實施せんとせし同月中旬に入ると共に、何れの方面に於ても連日の大雨車軸を流さんばかりの有様、滿洲全體殆んど水浸りになるといふてもよい大洪水。爲めに増援後備旅團の來著は遅延する、交通殆んど斷絶して其糧秣の運搬も頗ぶる不充分になつた爲め、遂に一時其攻撃實施を延期することになつて仕舞た。流石の大山元帥も滿洲の長霖には

閉口せざるを得なんだと見えて、ここ數日間爲すこともなく空しく経過する間に十六日頃から晴天になつては來たが。由來前の計畫の當時でさへも敵は我より其歩兵五十八大隊其砲百三十四門の優勢であつたが、此の我滿洲軍の雨宿りの十日の間に陸續として増援隊が到着して、現在我總參謀部で偵知し得たる所によると、歩兵に於て七十三大隊騎兵に於て百二十七中隊砲兵に於て七十四門といふ、非常な懸隔ある大優勢となつて仕舞たのである。

然るに一方味方の方は如何にと見ると、降雨の爲めに増加せらるべき後備旅團も到着せず重砲兵も途中にあるといふ有様。萬事萬端頗ぶる雨の爲めに大妨害を受けた而已か、同月十九日旅順に於ける乃木第三軍の總攻撃は全然失敗に終つて。更にこれから根氣よく正攻法を以て之を壓迫するの外に策がないことになつて仕舞たので、大山總軍司令官の計畫に大頓挫を來し其胸中の悶々は實に言辭に盡されず、帷幄に於ける畫策は非常な苦心慘怛たるものであつた。茫々として常に何事をも考へて居らぬ様な眞の好々老爺としか見

えぬ大山元帥も、此時ばかりは少なからず大に憂慮し大に心配したのは事實であつたが。果斷にして多智なる總參謀長と其幕内の多士濟々たる新進有爲の諸參謀とは、適時適切に頗ぶる有益なる材料を蒐集して其意見を呈出し、大々的に大山元帥の參考に供する所があつたので。ここに始めて同元帥は此の殆んど半數に近い寡兵を以て優勢なる敵の大軍を攻撃せんと、斷々乎として大決心を堅めたのであつた。

此時に當つて一日を猶豫すれば敵は一日だけ増加する、然るに大本營では第七と第八師團をまだ握つて居るが、これを滿洲軍の總豫備隊にするといふ大山元帥の意見具申に同意せぬ而已か。乃木第三軍が旅順で正攻法を始めた以上は、これが北方に増加するのは如何に味方を有利にばかり計算しても、どうしても九月以後と思はねばならぬのであるから、今の所一月や半月待つて見た所で少しも兵力の増加をする見込は立たない。これに反して敵の方は如何にといふと前にも述べた如くここ一二月の間に、約三軍團其兵力歩兵無

慮九十六大隊砲兵三十七中隊が、間斷なく遼陽附近へ毎日〳〵到着するのであるから、ここ一日を遅延すれば結局一日づつ味方の大損になるのは目前。即ちここに大山元帥は大果斷を以て攻撃に決心して、我日本人の忠烈と勇猛と其兵の運用の巧妙とを以て、寡を以て衆を破るべく確信を抱いて大決心をなしたのである。

此攻撃の決心たるや實に美事にして至當である實に勇ましい實に健氣である。此様に偉大なる攻撃精神を總軍司令官自身が抱持して居たればこそ、此遼陽の大會戰は全く我軍の勝に歸したのであつて、これ決して凡庸普通なる指揮官の決行し得べき策略でない。此偉大なる大山元帥閣下にして後始めて此決心が出来たのであると評者は確信する。歩兵操典綱領第四の二項に曰く、『攻撃精神ハ忠君愛國ノ至誠ト獻身殉國ノ大節トヨリ發スル軍人精神ノ精華ナリ』
ナリ武技之ニ依リテ精ヲ致シ教練之ニ依リテ光ヲ放チ戰鬪之ニ依リテ捷ヲ奏ス蓋シ勝敗ノ數ハ必ズシモ兵力ノ多寡ニ依ラズ精練ニシテ且攻撃精神ニ

富〇メ〇ル〇軍〇隊〇ハ〇毎〇ニ〇寡〇ヲ〇以〇テ〇衆〇ヲ〇破〇ル〇コ〇ト〇ヲ〇得〇ル〇モ〇ノ〇ナリ

善い哉千歳不動の金言、これ實に大山元帥の大決心の根據とせし所である。至誠忠烈萬國に比類を見ざる殉國獻身の勇士を以て組織せる、我が天皇陛下の股肱たる軍隊の其攻撃精神の旺盛に信賴して、以て此の寡を以て衆に敵する位ならばまだしも、全く少を以て多を攻撃するの決心をなしたのである。此の如きの決心はよく〳〵我國民性を知りぬいた上に、當時に於ける我軍の志氣如何を常に充分に注意し觀察して居らねば出来ぬ藝當である。日露の戦役たる舉國一致上下其國家興廢の岐かるる所、眞に天下分け目の大國難たることを知覺して、一人として一身一家を顧みるものなく競うて君國の爲に犠牲となるの覺悟を堅めて居た上に、開戦以來各方面に於て常に敵を攻撃して先手〳〵と機先を制して、敵を連戦連敗の現狀に陥し入れたのは全く我諸將軍の運用の妙に外ならぬ、即ち此攻撃精神の旺盛と軍隊運用の巧妙と更に其志氣の大振起とを敏くも看破したる大山元帥は、ここに殆んど三分一以上の

懸隔ある寡兵を以て目に餘る大軍を攻撃するに決心したのであつて。是れ實に適當である合理である斯くてこそ總軍司令官たるの價値が充分に認められるのである。茫漠として際涯を見ず殆んどつかまへ所のない様な此元帥閣下に於ては、一面此の如き機微を妙察するの大機智大偉略を備へて居るのである偉なる哉貴とむべき哉。

現に今日目前に展開せる歐洲大戰の有様は如何、殆んど歐洲列強が協力團結して總がかりといふ有様でありながら、彼の一獨逸の爲めに常に連戦連敗して居るのは何の爲めであるか。獨は前後左右から敵を受けて國民上下國の存亡を適切に其心中に感得して、上カイゼル陛下より下一兵卒に至る迄全然決死戰に臨んで居るのであるから、其旺盛を極めたる攻撃精神が至る所へ發揮せられるのであつて。これに反して聯合各國の方を見ると残念ながら頗ぶる其覺悟が不充分で、互に他人をのみ頼みにして意氣地のない佛國の如きは、遠い〜我日本軍の加勢を頻りと待つて居るといふ腑甲斐ない爲體らく

であるから。其結果は連戦勝つ能はず實にあはれ見じめなものであつて、これ則ち我が操典の綱領が必ずしも勝敗を兵の多寡に依らずと斷定したる所以である。今や我國の如きも日露大戰勝の後財政の危機に瀕するに係はらず國民の意氣頗ぶる驕り、加ふるに英明なりし先帝陛下の御崩御ありて以來國內紛擾絶ゆることなく、英國を同盟國として無闇にこれに信賴するものもあれば、又露國が近來好意顔をして我國に兵器彈藥などを續々注文するので、大早計にも日露同盟を呼號して、これ先づ〜大安心國防や兵備などはどうでもよいといふ陋態、全く眼先きの見えぬものばかり澤山になつて來たのは、即ちこれ一時の驕慢心から大切な忠君愛國の至誠を缺乏せしめたる證據であつて、我國人の攻撃精神は此の十年が程の間に非常な大變革を來して居るのは事實である。此の攻撃精神の衰微に傾むきかけた我が軍隊が、右は露國を唯一の頼みにして左りは英國に無二の大依頼心を起したとしたならば、國家一朝有事の場合には我帝國は何となるか、必ず敗殘滅亡するの外に方法がな

いと評者は斷言する。彼れ露國が今日遺恨を忘れて好意顔をして居るのは何の爲めであるか、今や露獨方面では古今未曾有の大敗北に大敗北を重ねて、糧食、兵器、彈藥等ともに自國の力では到底これを補充し得ぬ、背に腹はかへられぬのでそれで猫撫聲をして『日本大さん好き』などと、勝手な御詫言をならべるのであつて。彼や何として白人中の最強者なる名譽を一戦に破壊し了つたる我日本に、何の理由あつて眞實心底より好意を以て相交ることが出来る様か。嘗て故乃木大將閣下が露國を通る時ステツセル將軍を訪問せんとせしに、彼露國人の激昂は非常なものであつて、流石剛性なる將軍も爲に兩國間に事端を生ずる様なことがあつてはならぬと、本國出發前から豫定した此の訪問を見合せられた程である。千歳の恥辱を忘れずしてこれ程な敵愾心を持つて居るのは當然である全く當り前である。男子としては斯くあるべきが道理である、それを何ぞや一時的の現象に氣を安め心をゆるして、國防などは放つて置けとはどこを押せば其様な音が出るのであるか。更に又英國とて

も利に敏なるは人後に落ちぬ仲々利口な國である、見よあの佛國に對する此一年來の加勢の致し方でも大概は其心底は見えて居るではないか、此様な同盟國を當てにする様な腰抜けなことでは我日本國は實際破滅の外はないのである。以上の如く我國内には驕慢風や油斷風や依頼心の大嵐が吹きささんで來たのであるから、早く此の大嵐を防ぎ止める工夫をせぬ場合には攻撃精神も日本魂も、時の間に天涯萬里へ吹き飛ばされて仕舞ふのは掌を指さすよりも明かである。此様な見易い道理が不可解であつて頻りと自分ばかり嬉しがつて、露國は我に好意を有し天下太平なり英國は我に交誼厚く平穩無事なりなどと、極々薄つぺら極まる皮相觀を以て得意がつて納まつて居る腑抜け間抜け供の澤山になつたのは、これ全く日露戰勝の驕慢心からして身にも心にも油斷を生じ、其の油斷が日本魂や攻撃精神を消耗侵蝕すること深くして、終に此様な慨すべき悲しむべき有様を呈したのであつて。若し現在の様であつたならば到底此の時此の場合、我が國人の攻撃精神に信頼して大

山元帥の様な飛びぬけた大決断は出来難い、否やつた所で全然大敗北を來すに至るは目前である。醒めよ我國民油断すな我が陛下の大切な軍人達。今や東西南北悉皆これ我の敵ならぬはないのであるぞ。其四面の敵中に獨立して毅然として奮闘し様といふ我國人が、人の特鼻揮で相撲をとる様なづるい考を起しては、それが最後であるそれが滅亡である全くそれが壇の浦である。これは決して杞憂ではない激語ではない、正真正銘の評者の誠心誠意の告白である。

又しても飛んだ所で脱線して申譯がないが、常に心の中に憤慨して居た事柄が、つい此の大決心を感服するの餘りに急に破裂したのであるから、何卒これはお咎めない様にお願致す次第である。そこで此の二十八日より開始することになつた大山元帥の遼陽攻撃計畫は如何なるものであるかといふと、第四、第二軍を遼陽に通ずる本道の兩側に併列して敵を南方より漸次遼陽に壓迫し。其間に第一軍をして太子河右岸に進出して敵の退路に迫らしめ、一舉

以て敵の遼陽撤退を餘儀なくせしめ様といふ策略であつて。此の作戰計畫を見ると寡を以て衆を攻むるとしては、少しく大膽に過ぎる様な感じがするけれども、先以て適當なる攻撃のやり方であるといふことが出來ると思ふ。最初義州方面からと大孤山からとそれから鹽大澳の三箇所から分進したる三軍を、此遼河平野の要地たる遼陽城邊に集結して、敵を正面及び左側面より攻撃するの策を建てる迄には、實に容易ならざる大苦心を重ねて始めて此様な有様を現出したのであるが。併し敵は今や三分の一以上多いのである、それを包圍して攻撃し様といふのであるから、我軍の勇氣と決心が非常に堅確でない以上は頗ぶる此の攻撃の成功は疑問である。然るに我大山元帥は其部下を信用して必ず勝てると思つた。又其攻撃計畫を示されたる黒木野津、奥の各軍司令官も、一人として此の攻撃を不可能であると思ふたものは全くない。何れも自己配下の軍隊の勇猛と自己の伎倆とを信用して、必勝を期して著々として其攻撃計畫實行の準備を取り急そいだ。斯くの如く各上級指揮

官が攻撃精神が溢れる様な有様であつたので、其部下諸軍隊は志氣の振興して居た其上に、更に此の諸將軍の勇氣と決心に愈益其勇氣を鼓舞せられて、眼中殆んど露軍の優勢や遼陽の堅固なる設堡陣地なしといふ迄に興奮した。これどころ寡を以て衆を攻むることが出来る少を以て多を破ぶることが出来るのである。

以上の計畫を以て各軍相協同して遼陽を目標に前進して、二十九日に於ては第一、第四軍は南方より小沙河の線に到達し。又第一軍は英守堡から石咀子を経て要四方臺北方に亘る線まで前進して、其左翼の近衛師團は第四軍右翼の第十師團と連絡をすることが出来る様になつたのであつたが。此夜軍司令官黒木大將は兒玉總參謀長から此軍の太子河右岸に移るの時日と、其幾何の兵力を此方面に向はしむることが出来るかを問合はされると共に、左の如き通報を受けた、

『敵若シ遼陽ニ於テ眞面目ノ抵抗ヲ爲サバ第一軍主力ノ太子河右岸ニ於テ戰

備ヲ整ヘ畢ルヲ以テ總攻撃ノ基礎トナスベク若シ敵遼陽ヲ撤退セバ太子河右岸ノ第一軍ハ敵ヲ潰滅セシムルヲ得ルノ戰況ヲ現スベシ』

といふ頗ぶる重要な質問と通報を受領したので、黒木大將は熟考の上其夜直ちに左の通り電報を以て總參謀長に返答した。

『軍ノ主力ヲ太子河右岸ニ移スノ時日及兵力共ニ未ダ之ヲ決定スルノ時機ニ達セズト雖ドモ少クモ二師團ヲ以テ九月二日頃東黒英臺附近ニ戰備ヲ完了スルノ希望ヲ有ス』

といふ大要の軍行動に付ての返電を發したが。是より先軍司令官は滿洲軍全般の戰況と其豫定の攻撃計畫とから考へて、軍の主力を速に太子河右岸に移すの必要を生ずべきを豫察して、既に昨二十八日午後一時に於て其最右翼に位置したる第十二師團に對して渡河準備に付て内々訓令する所があつたが。更に此二十九日午前八時三十分に於て第二師團に黒峪英守堡道を取つて太子河を渡過するの計畫を内示し、必要なる偵察及修理をなさしめ、次で又第十

二、第二師團の工兵隊相協力して黒峪附近の道路を修理せしめて野砲の通過を支障なからしむる様にした。そこへ總參謀長から前述の質問と通報が来たのであつて、由來總軍司令官は第一軍を非常に力にし頼みにして居たのであるから。充分に其意圖を推察したる黒木第一軍司令官は其前進の運動中に著々として、太子河渡過の準備を整へつつあつたので、速に前に掲げた返電をも發し得たし、又其通報に應ずる如く容易に其運動を爲さしむることを得たのである。

黒木大將が先に總軍司令官から示されたる攻撃戰鬪の計畫に基づき、爾來攻撃開始の延期や雨天の爲めの滯留等種々なる事故の多かつたに係はらず、一意よく總軍司令官の意圖のある所を體して、其一部を以て第四軍と相連繫して遼陽南方に向はしめ、自から其主力を率ゐて太子河右岸に移るの準備を怠らざりし黒木閣下の所爲は、實に協同動作の模範である而已か愈、總參謀長の質問があつた場合、直ちにこれに向つて其近衛師團を第四軍方面に残して、

他の二師團を以て敵の背後に侵入するの策を決して、電報を以てこれを返答すると共に直ちに其實行に著手したのは實に立派なるやり方である。由來我軍は頗ぶる敵よりも劣勢であるのは前述の通りである、就中第一軍は他の二軍とは其境遇を異にして殆んど半孤立の状態にあるから、一兵たりとも自分の進む方へ多くつれて行きたいが山々である人情である。然るに係はらず黒木大將は滿洲軍全體の戦況に鑑みて、自己一箇の利害等を眼中に置くことなく、第四軍の右翼に向つて近衛師團を進ましめてこれと連繫して太子河南方の敵設堡陣地攻撃に加勢せしめて、自身は背水の陣を敷いて敵の背後に侵入するに二師團足らずの兵力を以て勇ましく、堂々として太子河を渡つて敵の第十七軍團の堅固に備へたる陣地に向つたのは、其心中實に一點の利己とか私慾とかの念慮なく、全く君と國との爲めに其本分を盡す以外には、更に何等の求むる所がなかつたのを明にするものであつて、斯くてこそ戦勝も得らるれば寡を以て衆に勝つことも出来るのである。此將軍などを何の優遇す

る所もなくして後備にしたなどは、頗ぶる評者は當局の處置其當を得ぬと思ふのである。元帥で目をつく様な今日から之を考へて見ると、此人などの勤績なり伎倆なりは確かに元帥として少しも恥かしい所はない、自分は元帥の稱號を得ざりし此大將に元帥以上の敬意を表するに躊躇せぬものである。

閑話休題さてこれから愈々本題に入るつもりであるが、其前に今一つ黒木軍司令官が種々手を盡して太子河右岸の敵を偵察したる後、此の三十日の正午近衛師團から其戦況を知らせると共に、遼陽西端附近に火災起れりとの報告を得て。これ實に敵の遼陽を撤退するものならんと判断して、即夜太子河を渡らんと決心して午後一時に下したる軍の渡河命令を研究して。さてそれから愈々第十二師團の戦鬪に移ることにし様。該命令の要旨を掲ぐれば概ね左の如きものであつた。

一、第十二師團ハ三十日夜連刀灣ニ於テ太子河ヲ渡リ皇姑墳ニ進出シ第二師團ノ渡河ヲ掩護シ江官屯附近ニ軍橋ヲ架設スベシ但シ吊水樓、双廟子間

ノ現在ノ陣地ニハ警戒部隊ヲ殘置スルヲ要ス

二、第二師團ハ三十一日朝其砲兵ヲ吊水樓附近ニ配置シ第十二師團ノ前進ヲ援助シ其歩兵ハ第十二師團ニ次キテ渡河シ官屯附近ニ集合スベシ但シ石咀子ニ一部隊ヲ殘シ湯河々谷ヲ警備セシムルヲ要ス

三、近衛師團ハ虎頭崖ヨリ高力村南方ニ亘ル高地線ヲ占領シ第四軍ニ協力スベシ

四、梅澤旅團ハ爲シ得レバ明三十一日ヨリ本溪湖方面ノ敵ヲ攻撃シ軍ノ右側背ヲ掩護スベシ

此命令に於ける最も大切なる渡河點を連刀灣附近と選定したのは頗ぶる適當である、軍司令官は早くより連刀灣附近の徒涉點より、我第一軍の主力を渡河せしめんと考へて居たのであるが、それを敵から感付かれない様にする爲めに、第十二師團をそれよりずつと北方の河岸、即ち江官屯から吊水樓下平州、双廟子に至る間に進めて、此の廣大なる正面の何れからか渡河せんとす

る如くに見せかけて、敵の第十七軍團と其龍騎兵第五十二聯隊との注意を、全然此の方面へ牽きつけて置いて。其間に第十二師團及び第二師團に密令して、連刀灣附近のぐつと南方即ち太子河の味方の方に彎入して、其渡河を祕するに頗ぶる都合のよい上に、極めて適當なる徒渉點のある連刀灣附近に、二十八日以来極内々に渡河の準備をして。沙坎小渡附近に全く敵の居らぬのを突き止めたる後、始めて三十日の夜に於て全二箇師團を轉進せしめて急に此の連刀灣から渡河せしむる命令を下した。是れ實に河川を敵前に於て渡るとしては最も都合のよいやり方であつて、其計畫が巧妙に都合よく我豫定通りにやれたのも、敵に大なる油斷があつたのは否認せぬが、一方確かに此の軍命令に於ける渡河點の選定が最も其宜しきを得たのに外ならぬと評者は思ふ。工兵操典第二部第九十三に曰く

『敵前ノ渡河ハ極メテ困難ナリ故ニ敵ノ不意ニ出デ若ハ陽動ニ依リ敵ヲ欺ムキテ速ニ渡河スルヲ要ス從ヒテ偵察及ビ渡河ニ關スル諸動作ヲ敵ニ祕匿ス

ルコト最モ緊要ナリ之カ爲渡河ノ準備ハ敵ノ視聽ヲ避ケ得ル地點ニ於テ成ルベク架橋著手前ニ之ヲ完了スベシ而シテ架橋ハ多クハ夜間ニ之ヲ實施シ拂曉前ニ完了セザルベカラズ』

此命令の第一項は實に此の工兵操典の明文通りになつて居る、即ち第十二師團がずつと北方の河岸まで進んで、殆んど其方面から渡河でもする様に陽動して敵を欺むき、敵の全くの不意に乗じて思ひがけない南方の連刀灣から、全一夜をも費やさずして急に全二師團を渡河せしめ。其前に於ては度々此方面の偵察もしたり、又は道路の修繕等を実施したけれども、少しもそれを敵方に知らしめずして、敵は我第十二師團が皇姑墳近かくに至つてから、始めて我軍の河を渡つたのを覺つた位に、其諸動作を祕匿して全然敵の視聽を避けるに充分なる、此の連刀灣に於て架橋著手前に之を行つたのであるから、此の第一項の渡河は全く此の操典の明文の示す如くに計畫せられて、それが又其命令通りに實行せられたのであるから、此の渡河こそは實に理想的に命

令せられ實施せられたといふことが出来る、但し軍司令官が敵の放火を見て遼陽撤退と判断したのは、間違ひではないが少しく早計であつたと思ふ。

一度敵を欺瞞する爲めに前進して占めたる、吊水樓から双廟子の間を三十日の夜に全く放棄して、全師團が連刀灣の方へ集まつて仕舞た場合には。明三十一日の朝には必ず敵が之れを知つて、其渡河を妨害しに来るは當然であるから。此の陣地には前日來の如く所々に警戒兵を置いて、敵をして我が轉進を感付かしめぬ爲めに一部隊を残す如く命令した、これも實に申分はないと評者は思ふ。斯くいふて見ると此の第一項は實に申分のない命令の下し方であつて、何等の非難すべき所は少しもないと思ふのは評者ばかりではあるまいと考へる。

さてそれでは第二師團の動作を命令したる第二項はといふと、石咀子附近に一部隊を残して湯河々谷から、敵が南方を窺がはんとするのを警戒すると共に、第二師團の轉進をこれ以て秘匿さして、其歩兵は三十日の夜中に第

十二師團に次いで連刀灣から渡河し、第十二師團の掩護を受けつつ官屯附近に集合して。さて其全砲兵は二、三日來兩師團の工兵が野砲を通過せしむる様に修理したる、黒峪英守堡道を徹夜前進して吊水樓附近に進出し、ここに布列して三十一日早朝から敵の渡河及び架橋を妨害する模様があつたならば、直ちにそれを後岸から河を隔てて猛烈至極に砲撃し様といふ計畫。此陣地からは我渡河師團の前進を妨ぐるに恰好なる、官屯、皇姑墳及び其中間の高地線を側射することを得るのであるから、これも實に申分のないやり方であつて、此の砲兵の配置は工兵操典第二部第九十四の

『敵前ノ渡河ハ最後マテ其發覺ヲ免ルルゴト殆ド難ク半途ヨリ渡河ヲ強行セザルベカラザルニ至ルコト屢之アリ故ニ攻者ハ最初ヨリ此場合ニ處スル爲豫メ歩砲兵ヲ掩蔽シテ後岸陣地ニ就カシムル等諸種ノ手段ヲ盡シ工兵モ亦必要ノ準備ヲ整ヘ敵ノ妨害ヲ受クルモ自若トシテ作業ヲ續行スベシ』とある要領を守つて翌朝に於ける敵の渡河及び架橋の妨害を豫防し、さて

架橋が江官屯附近に出来あがつたならば直ちにそれを渡つて、第二師團の官屯に集合しつつあるものに追及する様にしたのであつて。大體に於て此第二項も極めて至當なるやり方であると思ふが、此砲兵に何等の掩護隊をも附けて居らぬのは此場合容易ならず危険を感ぜざるを得ぬ。後に歩兵一中隊がやつて来たがこれは餘程後であつた。勿論吊水樓には第十二師團の若干の部隊が居るとしても、それは少しも此砲兵を掩護すべき任務を師團長から課せられて居らぬ。からしてそれにおかまいなく翌朝ずん／＼引揚げんとしたではないか。但し此場合一中隊の支援隊は到着し第十二師團は既に皇姑墳を占領して居たのであるから、更に危険はない様なものの江官屯から下流川に添ふては實に澤山な敵が占領して居る此の場合、奇襲的に多少の兵が河を渡つて吊水樓の砲兵に向つたならば、それこそ由々しき一大事が起つたに相違ない。からして此場合早く第二師團から有力の掩護部隊を附するなり、又は第十二師團が残した吊水樓の部隊に其掩護の責任を負はせて置く必要がある。これ

は實際いふべき程のことではないが、一寸と氣が注いだのでいふのである。其外には此の第二項も全然同意である。

第三項の近衛師團を擧げて第四軍を加勢せしめたに關しては、既に前に於て大に其適當なるを論じたので、ここではこれを再び述べるの重複を避けることにして。第四項の近衛後備旅團の梅澤少將に、進んで本溪湖の敵を攻撃して此方面の敵を此の旅團の方に牽制して、以て軍の右側背に侵入するの餘裕なからしめんとしたのは。これも實に極めて巧妙なる側背掩護のやり方であつて、此の命令の要旨四項は何れも評者は同意である。此様な理想に近い命令を下して渡河を執行したのであるから、味方の手筈が頗ぶる都合よく運んだのは當然であるが。更に其上に此の方面に居た敵兵が頗ぶる怠慢の過失を犯したので、此の渡河の計畫は更に／＼我軍の爲めに好都合に進捗し得たのであつた。

此の命令の第一項を實行するに當つて、第十二師團は如何なる行動をなし

たであらふか、今からそれを研究して大に此渡河の戦闘の適否如何を論じて見様。前掲の軍命令の要旨を本命令に先だつて三十日の午後二時三十分に見領したる井上光師團長は。部下諸隊に直ちに出發準備の命令を傳へて本命令の到達するのを待つたが、此の軍司令官が本命令に先だつて其要旨を通報して、豫め諸準備を整へて本命令を待つ様にしたのは時にとつての妙法である。更に其以前の午前十一時に軍から道路修繕の通報が來たけれども、それより以前に師團長は其必要あるべきを推察して、師團の左右兩翼隊から工兵を出して其修繕をして仕舞て居たので、これは其通報を得た時には立派に修繕が完成して軍の希望の通りになつて居た。些細なことだがこれが實に井上師團長の偉い所である全く感心である。兎角此様なことはいはれてからでも容易には出來ぬものであるが、軍が太子河の右岸に渡るのは豫定の計畫であつて、其一番右翼に第十二師團が居る以上は、軍の渡河に便利なる様に準備するのは、命せられずといふともこれ實に第十二師團の責任である。と極めて適當

に且つ極めて精神的に總軍の豫定計畫を解決して居た井上師團長は、萬事につけて全軍の太子河渡河の爲めに、暇があり隙さがあり次第に諸種の準備をして居たので、此の道路の修繕の如きも通報が來る前にちやんと出來あがつて居たのである。これ實に何でもない事の様であるが實際實戦に當つては、非常の精勵を以て聊かも注意を怠らぬ様にせぬと、此様に先見を發揮して事前に於て命令のないことを準備するといふことは出來ぬものである。此一事に見ても此師團が頗ぶる眞面目に渡河の準備に汲々たりし有様が知られるのである。

本命令前に受けたる通報によつて諸隊は出發準備をして、前面の敵情に就いて判断を助くべき材料を集めて居る中に、午後六時に至つて始めて軍の本命令が出たので、同夜午後九時に至つて師團も亦た左の如き要旨の命令を下した。

一、木越少將の指揮する歩兵五大隊、騎兵一聯隊、砲兵二中隊、工兵一中隊、衛生

隊半部より成る前衛は、午後十一時連刀灣に於て渡河を始め得る如く出發し小澁、官屯を経て皇姑墳に向つて前進す

二、本隊先頭の歩兵第十四聯隊は前衛に跟随し高力、在南方山頭より高力在を経て下岔溝に向ひ前進し前衛の右側に連なりて同村西方の高地を占領す

三、工兵第十二大隊(一中隊欠)及び近衛第二、第十二師團架橋縱列より成る架橋隊は第二師團の戰鬥部隊に續行して連刀灣、渡河點附近に至り同處下流に材料を集積し兩師團の徒涉に支障なき如く準備を爲し江官屯附近に架橋す

四、歩兵第二十三旅團の一大隊は吊水樓より下平州東南高地間を歩兵第十二旅團の一大隊(二中隊欠)は下平州東南高地より双廟子の間を警戒す但し師團の皇姑墳を占領するに至らば本隊に歸還す

五、本隊たる歩兵四大隊半、騎兵二小隊、砲兵三中隊、工兵一小隊、衛生隊半部は

歩兵第十四聯隊に續行し徒涉場上流附近に開進し同聯隊に次ぎ渡河す但し歩兵一中隊と後備騎兵一小隊を沙坎北側高地に出し本溪湖方面に對し師團の背側を掩護す

近衛後備歩兵一小隊は後備騎兵一分隊と共に小澁より藍家隈子に通ずる道路を警戒し同一中隊後備騎兵一小隊は胡家凹東南より田官屯に通ずる道路上に在りて本溪湖方向を警戒し第二師團後備砲兵第一中隊は第二師團砲兵に跟随して渡河し師團に追及す

第一項は敵が全く此方面に注意を怠つた隙に乗じて、三十日の夜半を以て本越旅團に有力なる諸兵を連合せしめて、これを師團の前衛として渡河掩護の爲め太子河右岸に渡したので、其編組に就ても其渡河の刻限に付ても評者は全く異論はない。更に其第二項は本隊の先頭にある歩兵第十四聯隊に、前衛の右翼に連なつて渡河掩護の陣地を堅固且つ迅速に占領する爲めに、渡河の前から其分進路から其占領地點迄を示したので、此場合これは頗ぶる適當

なる處置である。而して他の本隊の殘餘はそれに繼續して太子河を渡つて、以上第一渡河掩護陣地を占めたる前衛及び歩の第十四聯隊の後方に於て、豫備隊たるの位置を占め得る如く部署したので、何れの項に於ても評者は聊かも不同意はない。又此の本隊の中から本溪湖方面の敵に備へる爲めに、步騎連合の三箇の部隊を出して警戒したのは用意周到であるが、併し沙坎北側に出した一中隊はこれは左までに必要ではない様に考られる。勿論置けば大に安心ではあるがここに一中隊を置く程の必要は、情況の上からも地形の上からもない様に評者は思ふ。他の藍家隈子方面、田官屯方面に兩部隊を出したのは適當である、此の兩部隊で此方面の警戒は充分の様に自分には考られるのである。實際此の沙坎の東北方の土地は太子河の兩岸が斷崖になつて居て、騎兵などが容易に來られる土地でないのであるから、此所に懸念して掩護隊を出すの必要はない、渡河點直接掩護の爲めにとあれば、下士斥候の一箇も出して置けば充分であると自分は思ふ。

少し話しがあと戻りをするけれども、第一項の前衛に騎兵全部と砲兵二中隊を附けたのは、此場合先づ／＼至當であると思ふが評者の考では此砲兵は山砲であつて其運動も輕捷であるから少し違例ではあるが、此場合全部を前衛に附した方が敵が渡河妨害をやるものとすれば最も好都合であつたらふ。幸に敵が少しも我渡河を妨害せなだからよかつた様なものの、敵が我が半渡を撃たんとして進來する様な場合には、多數の騎兵を以て其側方の搜索警戒に任じ、逸早く其多くの砲兵を以て可成遠くより敵の進來を妨たげ、以て自己師團はいふに及ばず第二師團の渡河をも、安全ならしむるが利益ではあるまいか、それが爲めには山砲二中隊では心細い、全部で四中隊しか居らぬのであるから悉皆前衛に屬するがよいと思ふ。又第四項の舊陣地に殘した部隊は其正面に比較しては餘りに少な過ぎる様ではあるが、一兵でも多く右岸に渡すのが此場合必要であるから、此小部隊でもそれが巧に敵を欺むく様にやつてくれさへすればこれで足りぬといふことはあるまい。斯くの如くにし

て先づ此井上師團長の第二師團の渡河掩護と自己師團の渡河の爲めの命令は、殆んど其大部分に於て同意である。

さて此の命令を此の第十二師團が如何に實行したかに就て、これからそれを詳細に評論することにし様と思ふが。井上師團長が軍司令官から本命令に先だつて其命令の要旨の通報を受けると共に、師團長も亦自己の下さんとする命令の要旨を其部下に傳達した。此の本命令を下す前に其命令の要旨を通報するといふことは、出來得たならば常にこれをやるがよいのであつて、陣中要務令第十二に曰く

「命令ハ之ガ記述ニ長時間ヲ要シ且ツ受令者其實行迄ニ準備ヲ要スル願慮アル時或ハ軍隊ヲシテ速ニ所要ノ位置ニ就カシムルヲ利アリトスル場合等ニ在リテハ先ヅ各別ニ其要旨ノミヲ下達シ後完全ナル命令ヲ付與スルヲ可トス」

と明示してある如く、此場合の様に既に前々から計畫が定められて居て、

愈、それを實行する爲めには少なからざる諸隊の移動を要する敵前の渡河命令であるから、即ち陣中要務令の此條の示す場合と適合するのである。かくして軍司令官も其命令の要旨を前以て通報し、師團長も亦それを各旅團長へ豫め下達したのであつて。此の命令要旨の豫達は極めて適當であつて、爲めに此の渡河を頗ぶる迅速に遂行し得たのは事實である。

此の命令要旨の豫達に於て前衛司令官となつたる、歩兵第二十三旅團長少將木越安綱は如何なる處置をしたかといふと。其要旨を受けた而已で其詳細はまだ不明であるから、取り敢へず自己の部領に屬すべき諸隊に向つて、三十日午後十一時迄に連刀灣の徒涉場に集合すべく命令した。此の處置は最も機宜に適して居る申分はない、既に大體の命令要旨を受けたのであるから、此の木越少將が第一先頭に太子河を渡らねばならぬのは知れて居る、そこで自分が前衛として指揮すべき諸隊を速に其徒涉場へ集めれば、本命令が到着すると共に其場で直ちに前衛命令を下して、其實行に著手することが出来る

のであるから、速に其所部の諸隊を徒渉場に集めるのが最緊要である。將軍は躊躇することなく前衛諸隊の集合を命令し、諸隊も亦其命令の如く太子河の徒渉場に集合したのは、此場合最も適當なる處置であると評者は信ずる。其集合の命令を下してから大部時間を隔てて師團本命令が到着したので、即ちそれを携へて木越前衛司令官は連刀灣の徒渉場に前進して、此所で集合して居る前衛諸隊長を集めて前衛の本命令を下した。斯く手順よく命令の下達が行なはれたので、本命令の下る迄には少なからず時間を要したに係はらず、其諸隊の行動は頗ぶる迅速機敏に實行せられたのは、實に賞賛すべき命令の下し方であつたと評者は思ふのである。

此前衛命令の要旨は、平井大佐をして歩の第四十六聯隊の二大隊と騎兵一小隊を指揮して前兵たらしめ、速に官屯東方高地を占領せしめ、其他を本隊としてこれに續行せしめるのであつて。別に歩の第二十四聯隊の平田時九少佐の大隊を、舊陣地に殘して吊水樓から下平州東南高地の間を警戒せしめて、

此の大隊には師團が皇姑墳に進出したのを見たならば、適宜に此方面を切りあげて本隊へ歸還せよとの命令を下した。先づ此の命令も大體に於て適當であつたらふ、澤山に騎兵は持つて居たけれどもこれが夜中のことであつて見れば、それを先に渡河せしむるのも随分危険であるから、此の處置を取つて前進を始めることにしたのであつて、先づこの前衛の命令はこれでよいといはざるを得まい。

又第十二師團の左翼隊長たりし島村歩兵第十二旅團長は、師團の命令を受けると共に相原大佐の歩兵第四十七聯隊に、三十一日の午前一時迄に樓子山附近の谷地を経て連刀灣西方谷地に集合すべく命令を送り、自己の令下にあつたる其他の諸隊に對しては、右同一時刻に直に出發し得る如く準備を整へしめた、これも至當なるやり方で別に申す旨はない。其他師團の殘餘の諸隊も何れも其時刻までには悉皆出發の準備を了したのである。此時敵に就ては種々なる情報を得て居たけれども、我が渡河第一に進まんとする地方の、沙

坎及び小瀨附近には敵の居らぬのは確かであつた。官屯から先には随分敵の出没する模様であつたが、それより以南には前日來敵の來た模様は少しもなかつたのである。我が渡河の爲めには實に天佑ともいふべき好都合であつたのである。

此夜々半前兵長平井正衛大佐現中將は如何なる處置をしたかといふと、第二大隊長橋七三郎少佐に二中隊を率ゐしめて、先頭第一に連刀灣附近の徒涉場によつて太子河を徒涉し。其對岸の小村落高崖を占領して、右は身窩方向左は小瀨方面に對して警戒し、數個の斥候を放つて其附近諸村の敵情を搜索した。此の橋大隊の二中隊の掩護によつて第十二師團の工兵一中隊は、即時に太子河徒涉場の諸設備を整頓し且つ其整備を迅速ならしめんとして萬般の手段を盡した。其中に諸準備整頓したので橋大隊の殘餘の二中隊が渡河を開始したのは丁度三十一日の午前一時稍前であつた。此二中隊が加はつて橋大隊が全く右岸に揃ふと共に、橋少佐は其第五中隊を尖兵として前進せしめ、

其他は前兵支部となつて枚を銜んで前進し、少しも敵に覺られぬ様に注意に／＼して、まだ夜の明けぬ午前四時といふに胡家凹西北高地を首尾よく我手に占領し。午前四時三十分には前兵の全部が其後方の谷地に開進し、又前衛の殘餘は前兵に引き續いて渡河して、丁度此四時半頃には其全部が渡河を畢つて居たのであつた。

一體此の連刀灣の徒涉場は水深零米七十であつて、此附近の太子河の一番浅い所である上に、前にも既に述べたる如く敵が油斷をして注意を怠つた爲めに、敵に秘して渡河をするには實に申分のない地點であつたが。此の渡河點から僅かに北方に向つて一里半を進んだ所に、胡家凹といふ太子河の曲があつた所があつて。そこは一方は太子河に限られ其他は凹凸錯雜せる山地であつて、頗ぶる危険なる隘路をなして居るのである。萬一敵が先んじてこれを占領した場合には、折角敵に知られぬ様にして苦心慘怛で徒涉した諸隊は、全くそれから先へは容易に進出することが出来ぬといふ不都合があるのであ

る。此の胡家凹の隘路口を敵に先んじて占領するのが、最も大切なる當面の大任務であつたのは上述の理由で明らかである。からして木越前衛司令官が平井前兵長に速に官屯東方高地、即ち此の胡家凹西北高地を占領せよと命令したのであつた。然るに悠長なる敵の龍騎兵どのは、此所より餘り遠方でない地に居つた様であるが、少しも我が第一軍の主力が此の狹隘を極めたる山と河にはさまれたる一條の胡家凹の隘路から出て來ようなどは、全く以て夢にも知らずに此の三十一日の夜の明けるまで、酣眠の楽しみを貪つて居てくれたので、我は非常なる危地を脱して此の大切なる隘路口を前兵二箇大隊の全力を以て占領し得たのであつて。これ實に渡河後第一番の成功であるといふてよい。がまだ、仲々安心は出來ず其前方には随分と多くの危険が横たはつて居たのである。

平井前兵長が胡家凹の隘路口を占領して、前衛の開進を掩護して居る間に前衛は續々其後方谷地に到着する。騎兵第十二聯隊は矢張り此の胡家凹の附

近に位置して、頻りと右側山地から田官屯の方を警戒して、本溪湖方面の敵の襲來に備へたが。此の聯隊は後備騎兵が少し加はつては居たが、殆んど全三中隊あつたのであるから最早夜が明けるのに間のないのに、全部が此の小濠地方に居つてそれから田官屯の方のみ警戒して居らずに、一中隊位を以て此の右側方面の警戒に任じて置いて。他の二中隊を擧げて高力在李家峪、下岔溝、下紅窰方面を搜索したならば、我が師團前衛の爲めには非常に利益を與へたであらふに、歩兵の後方に控へて山地の頗ぶる險路の間で、單に田官屯方向のみに氣をとられて居たのは残念千萬であつたと評者は思ふ。

午前七時前後までには木越少將は其前衛を以て胡家凹西方及び北方の高地線を堅固に占領し、其山砲二中隊を燕州城附近の高地上に放列を布かしめ、敵若し進來せばここで其前進を喰ひ止めて、彼の後岸の吊水樓に布列したる第二師團の砲兵と協力して、師團本隊の渡河を充分に掩護せんとして、準備をさく、手落ちなく慎重の態度を取つて此地に止まり、本隊の先頭にして且

つ前衛の右翼に連なつて下岔溝附近を占領すべき任務を有する、彼の歩兵第十四聯隊の今村大佐現中將の部隊の到着を今か／＼と待つて居た。

此の前兵の占領した陣地の前方に、澤山なる敵兵の居る模様がなかつたに關せず、木越少將が輕率なる前進をなさずして、先づ其全力を此の胡家凹西及び北の高地に展開して、此所で師團本隊の渡河を掩護し様としたのは至當である。見える所にこそ敵の大なるものは居らぬ様であるが、これから二里内外の時官屯や黑英臺附近には、敵の龍騎兵第五十二聯隊も居れば、第十七軍團も控へて居るのは明らかなる事實であるから。萬一前衛の獨力で官屯の方まで進出して、西及び北の兩方から敵の包圍でも受けた場合には。前衛が全滅の非運に陥る而已か、師團及び第二師團は、其半渡を敵に撃たれることになつて、容易ならざる大危険に陥るの虞があるので。此前兵の占めたる正面廣からず且つ相當に堅固なる、胡家凹西及び北の高地線を占めて、敵がこれに迫つて來たならば官屯西方の高地以東に於て、吊水樓の第二師團の砲兵

と協力して、敵を我が十字火的砲火の下に大困難をなさしめて、師團本隊の渡河を充分に掩護し様としたのであつて。此處置は少しく大事を取り過ぎした様には見えるが、確かに萬全の策であると評者は信ずるのである。

木越少將が待ち焦れたる歩兵第十四聯隊は、三十一日午前二時黑峪西北二千米突の谷地から出發して、前衛の後尾に跟隨して午前四時十分に太子河を渡過し、午前七時餘程過ぎに胡家凹北方約千米突の高地へ開進を始めたので、前衛の陣地は愈益、大丈夫になつて來た。これに續行したる師團の本隊は午前六時頃に全部渡河を終つて、同九時から十時の間に我砲兵陣地のある燕州城東方の谷地に開進したが。例の師團命令で右側本溪湖方面の警戒に任せられたる三部隊は、此間に於て何れも其命ぜられたる地點に向つて前進して、師團の右側を警戒するといふ都合になつた。又歩兵第十二旅團から舊陣地附近に残すべき部隊は、日清戰役の當時自分の部下であつた宮内善十郎といふ大尉が、歩の第四十七聯隊の第四、第五の兩中隊を指揮して、双廟子附近にあつ

て北方對岸の敵に對して警戒の眼を見はつて居た。待つて居た今村大佐の聯隊が其右翼に開進したのを見た木越少將は、猶豫することなく歩兵第二十四聯隊の第二大隊と歩兵第四十六聯隊の第二大隊とを併列して第一線となし。歩の第四十六聯隊の第三大隊を以て第二線として、官屯から其西方の高地に對して攻撃準備の姿勢を取り。其部領に屬せる工兵中隊をして小濠から胡家回を経て高力在に至るの道路修繕に當らしめて、師團本隊及び第二師團の前進の爲めに便を謀つたが、此の全處置は最も同意である。就中此の戰鬪の切迫せる場合に其工兵一中隊を本隊及び友軍の爲めに、道路の修繕に任じたるやり方は頗ぶる敬服する所であつて、自分が通過して仕舞たあとでは其困難を忘れて仕舞て、まだく前にとの様な難地があるかも知れぬと、唯々自分の利己主義而已に眼がくらんで本隊や友軍を思ふの暇がないものである。然るに木越少將は此様なまだ其前方にも工兵を要すべき必要があるべき場合に於て、全隊の利害を敏くも達觀して其全工兵中隊をし

て自隊より後方の道路修繕に任じたのは其事や小なりと雖ども、利己を離れて全體の利益にのみ注意した、其精神が頗ぶる立派である賞賛するに價すると評者は考へる。

午前八時になると今村聯隊の第一大隊は、前衛の第二十四聯隊の右翼に連繫して第一線に展開し、第三大隊は第二線となり、第二大隊は其右翼後に第三線となつて、下盆溝方向に對して攻撃の準備を整へ了つた。此際前面には多少の騎兵が出没したけれども、左して大なる部隊が居るとは思はれざる状況であつたので。歩兵第十四聯隊は下盆溝を目標とし、歩兵第二十四聯隊同第四十六聯隊は皇姑墳東南高地を目標として、相伴なふて前進を起して歩兵第四十六聯隊の橋大隊が、官屯に於て騎兵約二百五十騎を撃退したのを、主なる戰鬪として他は左したる敵に出會することなく、何れも其目的とする地點を確實に占領したのは、三十一日の午前十一時前後であつて、ここに第十二師團は其大任務たる渡河掩護の職責の大半を盡し得たのであつた。

井上師團長は午前十時三十分胡家凹附近の高地に於て現状を望見して、前衛には皇姑墳の東側から官屯西方に亘る陣地を占領したならば、それを堅固確實に占領して猥りに前進することなく、一意其守備線を堅固に保持する様に命令し、又其右にある今村大佐の歩兵第十四聯隊には、石廠北側高地線より著るしく前進せずして其陣地を固守すべきを命じたが、其命令の到着前後に於て今村大佐は一大隊を第一線に加へて、石廠北側高地から下岔溝東北高地に亘る線に位置を轉じて、二箇大隊を以て堅固に防禦工事を施した。これが三十一日の午前十一時半頃であつた。此間敵は其兵力を盛んに饅頭山に増加して、此附近で大に我れの前進を拒止せんとする模様が明らかであつて、土人の言に依れば此山には砲兵も澤山にあるとのことであつたので、容易にうかとはこれから先へは前進することは出来ぬ状況であつたのである。そこで井上師團長は木越少將の前衛の名稱を止めて、これを左翼隊として依然前同上の陣地を堅守せしめ、島村少將に歩兵第十四聯隊を返還してこれ

を右翼隊とし。更に其線を東北方に延して左翼隊に連繫して、下缸窰西方高地に亘る間を占領することを命じたが、島村少將は此命あると同時に其歩兵第四十七聯隊を歩兵第十四聯隊の右翼に出して、同聯隊長相原大佐は其第三大隊長太田朗(現少將)をして、下缸窰西方標高一三〇から同九八に亘る高地を占領せしめて、歩兵第十四聯隊の右翼に連なつて防禦工事に著手した、これで此の第十二師團の陣地は愈々堅固になつて來たのであつた。

最初井上師團長は西第二師團長に向つて、占領區域が狭少であるから少濠より北方へ前進せぬ様に胡家凹から申送つたが、同師團長から速に皇姑墳を占領して第二師團をして、胡家凹の隘路を通過して官屯附近へ進出せしめてくれといふ注文が來た。此の西中將の申分は實に尤なる次第であるので、木越少將と今村大佐とに旨を傳へて、可成速に現在の陣地まで進出せしむる様に盡力したのであつたが、三十一日の午後三時に至つて西中將は燕州城に到着して、そこに居つたる井上師團長と相談して今後の行動に關して協定す

る所があつた結果。官屯から皇姑墳に通ずる道路から以北を第十二師團が受け持つことにして、それから以南太子河迄の間はこれを第二師團が受け持つことに相談がまとまつた。

此日零時四十分頃に胡家凹谷地に開進したる第二師團は軍命令によれば、三十一日官屯附近に集合すればよいのであつたが。渡河が豫想外に容易に出來て第二師團も早く官屯附近に集合し得たので、第十二師團の正面が殆ど二里に亘つて居るのを見て、其過廣の爲に敵に乗ぜられる様なことがあつてはならぬと考へて、兩師團長が協護の上で其左翼約三千米突弱を第二師團が受け持つことにしたのであつた。一體前の一刻も速に官屯附近へ進出したいから皇姑墳を早く占領してくれといふ西中將の要求も極めて至當である、何となれば若し小瀧以南に此の師團がまご／＼して居る中に、敵に胡家凹西北高地まで迫られたとした時には、此の師團を用ゆべき餘地が太子河の右岸になので、空しく後方に控へて居らねばならぬ。左すれば折角太子河を渡つた

甲斐が少しもなくなる。單にそれ而已でない若し胡家凹の地で敵に隘路の出口を押へられた時には、第一軍の主力が太子河右岸に發展するに非常な大困難を冒さねばならぬ。此様な理由がある爲めに井上中將から小瀧以南に居てくれといふ通報を得て、一時そこに停止はしたが速に皇姑墳を占領してくれといふ依頼をしたのであつて。其要求に快よく應じて可成速に皇姑墳陣地に進出し、終に此の日の渡河を頗ぶる圓滿に實行し得たのは、詮する所兩師團長が少しも其心中に蟠かまりを持たずして、一意軍の利益の爲めに盡瘁したる結果に外ならぬのである。兎角此様なことからして師團の間に確執を生ずることは間々ある慣はしであるが、其様な忌むべき傾向は少しもなかつた而已か、後方から進んで來た西中將は、井上師團の正面の餘りに過廣なるを心配して、自己が軍から命ぜられた任務以外に、進んで其守備の南方約三分の一を受け持つことを申し出た、これも亦た頗ぶる至當なる申出である。此様にお互に自己の勝手を主張せずして和衷協同して、誠心誠意唯我滿洲全軍の

利益の爲めに働らいて、少しも其間に利己や我利の蟠りを持たなだのは、兩將軍の心中實に光風朗月である。何でもない様であるが此様な場合に實戦では屢々衝突が始まり易いものである。これは大に注意すべきことである。公明正大其量を大にして更に人を容るるの雅量を持ち、一意我日本軍の爲めを思ふといふことを忘れねば、それで協同も一致も出来るのであるが、これが實に非常に困難なことであるのである。

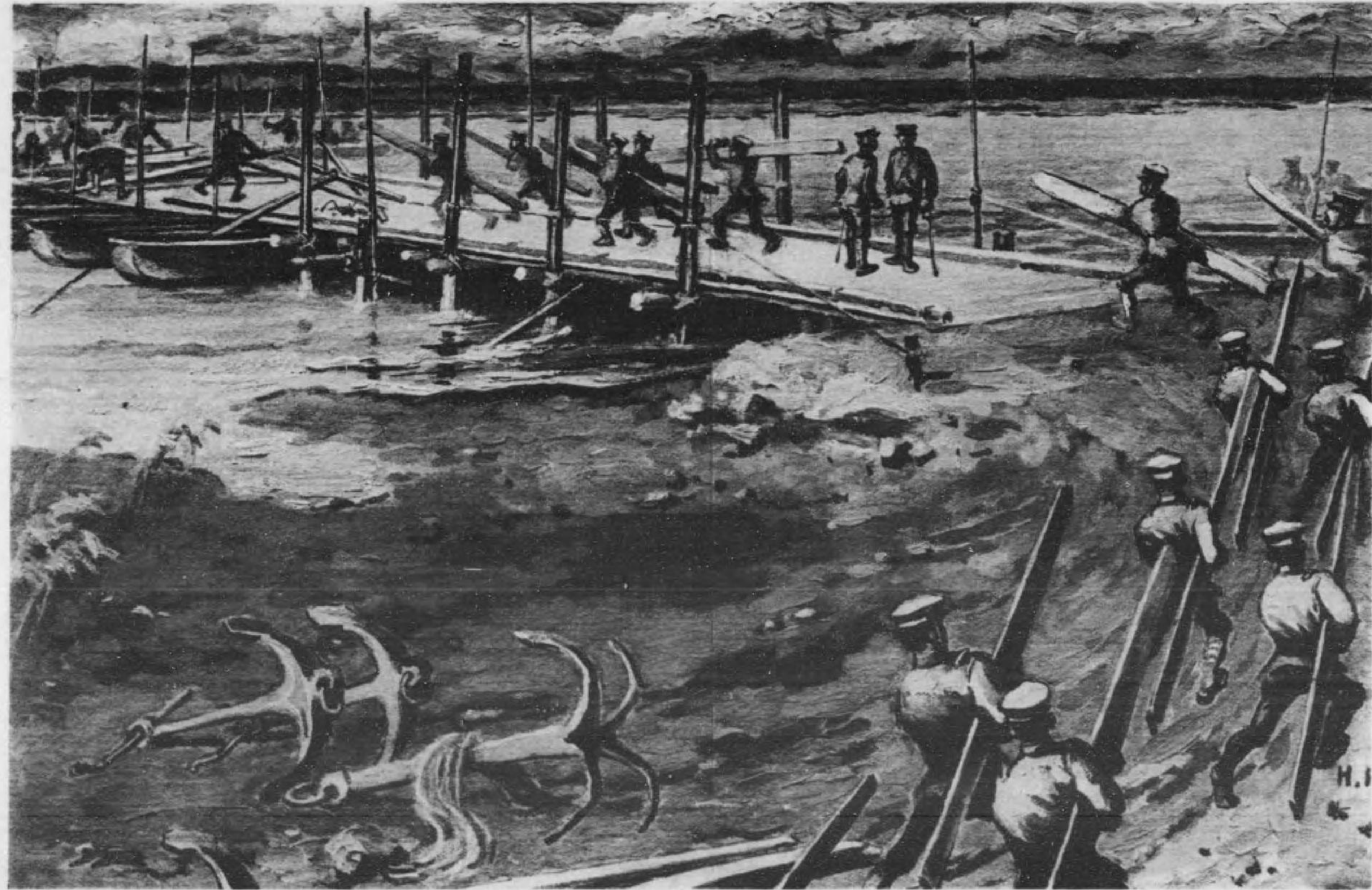
くどい様だが此の日に於ける相浦大佐の騎兵聯隊は、頗ぶる評者の豫期に反したる動作而已をして居つた。勿論敵の龍騎兵が澤山に居たとはいへ、主として搜索を要すべき皇姑墳から黒英臺及び下缸窰の方へは少しも頭を出さず、全く右側の山の蔭で本溪湖から來た騎兵の一部と小戦ばかりくり返して居たのは、全く以て智慧のない話であつて、これ全く大局の上に其眼を注がなかつたのの致す所であると思ふ。此場合の様な敵前渡河に當つては騎兵は非常に用が多い筈である、然るに一方の山間につまらぬ小戦のみをし

て何の得る所のなかつたのは、此日此の渡河の頗ぶる好結果であつたに對して、頗ぶる不満足なる行動であつたと思ふのは、強ち評者ばかりの偏見では御座るまい。

架橋隊は如何なる景況であつたかといふと、これは前にも命令に於て定められたる如く、第二師團戰鬪部隊に續行して連刀灣の徒涉場に至れとあつたので、三十日の午後九時に此の命令を受けたる架橋隊長二宮五十槻中佐は、第一中隊を架橋準備隊、第二中隊を架橋隊とするの部署を定めたが、此時即ち午後九時半には前衛も渡河を始めぬ前であるから、架橋材料などの太子河邊に來るべき筈がない。そこで翌日の午前五時各中隊は其位置に就いて架橋縦列の到着を待つたが、道路險惡なる上に第二師團の後尾が午前八時頃までかかつて渡河を畢つた様な次第であるから、黒峪に前夜から宿泊して居た第十二師團架橋縦列も、今朝午前一時半に大安平を出發した第二師團の架橋縦列も容易に到着するの運びに至らぬので、架橋は非常に遅延して仕舞ふことに

なり。午前十時に至つて始めて前に述べた兩架橋縱列が開進を徒渉場の左岸に始めたが、師團命令に近衛師團架橋縱列の到着を待つて架橋を開始しろとあつた、近衛の架橋縱列などはいづこの空をさまよつて居るか、一切がつかぬ影も形も見せぬといふ有様であつた。此様な次第であるから萬事萬端手違が多くして、此日午後二時少し前に至つて架橋準備を了して連刀灣を出發して、午後三時三十分始めて胡家凹西南の架橋點に到達して、此所に架橋隊は第一軍橋の架設に著手し。橋長百三十五米突の大橋を午後八時に於て漸くにして完成するに至つたが。其命令を受領して後殆んど二十四時間を経て始めて一つの軍橋が出来たといふ誠に以て緩慢至極の始末。元よりこれは架橋當事者が不都合をやつたのではない、彼は遅いながらも材料の到着後四時間にして準備を整へ、架橋に著手して後約四時間に於て架橋を終つて居るから、無論迅速ではないが先づ普通には働いたのである。然るに斯くも徒らに多くの時間を費やしたといふのは、これは實に軍參謀部に大なる責任がある

江官屯ノ架橋



九十九人白道畫

のである。一體太子河を渡るといふことは第一軍の最初からの豫定であつた以上は、軍の各架橋縦列は之を使用するに便利なる様に位置せしむるの必要がある。勿論餘りに過早に架橋縦列などを動かしたりすると、敵に我企圖を察せられる様な結果を生ずるから、充分注意をせねばならぬのは勿論だが、注意しつつ敵に知れぬ様に、架橋し様と思ふ河岸に近い方へこれを移して置くのは、軍參謀部及び工兵部の手腕の見せどころで、大に畫策せねばならぬ一緊急事件である。然るに暢氣千萬にも軍の太子河渡河の決定する迄、依然架橋縦列を各師團に其儘にして置いた上に、第二師團の戦闘部隊渡河の後に集合を命じたので、黒暗に居た第十二師團の架橋縦列さへも、翌三十一日の午前十時でなければ近い徒渉點附近へ來られぬことになつて仕舞た、これ實に極めて拙ない架橋の計畫であつたと評者は思ふ。

勿論此場合は全二師團が徒渉したのであるから、何もそんなにいそいで架橋する必要はなかつたのであるが、太子河は到る所水深くして容易に徒渉が

出来ぬ。萬一戦利あらずして再び河を越へて退却するといふ様な場合に於て、架橋がなかつたならば如何なる悲惨なる境遇に陥るかも知れぬ。其方面の懸念の爲めに主として架橋をするのである以上は、矢張この場合の架橋もいつでもよいといふ様に暢氣に構へる譯にはゆかぬのである。然るに各架橋縦列の位置が適當でなかつたのと、第二師團の通過後に集合することに命令が出たのとで、此様に多大の時間を架橋に費やして仕舞たのは頗ぶる遺憾である。まして況んや近衛の架橋縦列の如きは遅れも遅れたり、九月一日の夕方に至つて始めて連刀灣へ到着するといふ始末。若し二宮中佐が師團命令を後生大事に株守して居たとしたならば、九月一日の夕方であれば架橋が始められぬといふことになる所であつた。此様に架橋縦列が遠隔して居たといふことは、何といふても軍の責任である軍の參謀部と工兵部の不注意である。既に略、數日の前から連刀灣附近で渡河して、官屯附近に架橋するといふ考案があつた以上は、何と都合をしてなりとも敵に知れぬ様に、各架橋縦列を連刀灣

附近に集める必要があるのである。若しそれが思ふ様に出来なんだならば、せめて第十二師團の架橋縦列だけでも早く連刀灣に到着せしめる様にすると、徒渉に付ても必然多大の利益があつたのであるが、それが近い所に居りながら受令後十二時間を経て、始めて架橋準備の位置たる連刀灣に到着する様なやり方をしたのは、如何にいふてもこれは軍に油斷があつたといふの外はないのである。これはいふ迄もなく架橋隊そのものの責任は軽いけれども、兎にも角にも此の架橋は實に非常に遅延したのは事實である。

以上述べ來りたる如く多少の缺點も失策もないではないが、第十二師團の渡河及び第二師團に對する渡河掩護は頗ぶる都合よく進捗し。其架橋も大分の時間こそ費やしたが、必要の生ずる場合までにはそれも架け終つたのであるから、先づこの第十二師團の敵前渡河は充分なる成績をあげ得たものと認むるが適當である。これで我が第十二師團の研究は一先づ中止して、さて此の渡河點附近にありし露軍に就て評論を下すことにし様と思ふ。

敵軍に於ては八月二十九日の午前五時三十分命令を下して、第十七軍團を官屯から房申の間に位置せしめて、太子河右岸に於ける軍の右側を警戒せしめて、更に本溪湖方面に若干の支隊を駐屯せしめて、本溪湖附近から遼陽までの太子河の線を監視せしむる様に残りなく仕度をしたのであつたが。此の第十七軍團長ビリゲルリング大將といふ人は、頗ぶる付の無能の評判高き騎兵出身の大將であつたので、後生大事に其命令の通りに部署をして、日軍が何れから渡河するであらふなどといふことには少しも頓著せなんだ。否々頓著せなんだのではなからふが日軍の陽動的の陣地占領に欺むかれて、其軍團の約半部を以て時官屯から房申の間に陣地を占領せしめて、其對岸に出て來た日本の第一軍に相對せしめて、さて其殘餘の半部を頭道溝附近に纏めて置いて軍團の豫備とし、龍騎兵第五十二聯隊に命じて太子河の線を警戒せしめたのであつた。無能などと悪口はたたくものの此の部署のし方を一見すると、我工兵操典第二部第九十九に

「河川防禦ノ要訣ハ敵ノ半渡ニ乗ジ攻勢ニ轉ズルニ在リ之ガ爲豫想スル各渡河點ニ若干ノ警戒部隊ヲ配置シ主力ハ之ヲ集結シテ敵兵縱ヒ何レノ方向ヨリ來ルモ直チニ之ニ應ジ得ベキ地ニ位置セシムルモノトス(下略)」

とある要領に大略あてはまつて居て非難をすべき點はないのであるが、其太子河の線を警戒すべき任務を有したる龍騎兵第五十二聯隊が非常に怠慢至極であつて、唯だ其目前の吊水樓邊から下流の對岸にのみ氣を奪はれて、少しも其上流の小濞沙坎の方向の遠く敵方へ河川の彎入したる方面に兵を出さず。此聯隊が頗ぶる活用のないやり方をして、全く時官屯から房申の陣地の前のみを警戒の力を用ひ、其左翼は皇姑墳邊にも碌々注意を拂はなんだのは何といふ失態であらふ。前に引用した工兵操典の末文には左の如く記述してある、即ち

「敵ノ陽動ニ欺カレザルコト緊要ナリ故ニ通常騎兵ハ前岸ニ進出シテ敵情ヲ搜索スト雖特ニ渡河ノ眞偽ヲ判斷スルニハ必要ナル渡河點ニ工兵將校ヲ派

遣シテ敵ノ企圖ヲ偵察セシムルヲ可トス』

と明白に其警戒のやり方を示してあるに關せず、日軍の方へ非常に遠く彎入して其間には多數の渡船場がある上に、高崖には此の近邊で一番水深の淺い徒渉場があるのであるから、何はさて置き此の彎入部こそ此の騎兵が全力を盡して警戒せねばならぬ場所である。嘗に右岸にあつて警戒するのみでは不足である。工兵操典の示す通りに遠く迂回してなりとも左岸に渡つて、此方面に日軍が渡河の準備をしはせぬか、内々で偵察に來はせぬかと晝夜これを監視せねばならぬ筈である。然るに此の龍騎兵第五十二聯隊は多くの騎兵を有しながら、少しも其様な搜索を實行したる模様がない而已か、騎兵が居らずとも陣地を占領して居る各隊に於て、充分に警戒の出来る時官屯から下流の方にのみ注意して、少しも側翼の方から日軍が渡河するといふことに思ひ至らぬ。これ即ち『敵ノ陽動ニ欺カレザルコト緊要ナリ』とある戒めを忘れて仕舞て、英守堡以西の河岸に見える日軍而已に氣をとられて、全然我第一

軍の右翼の行動の陽動的欺瞞であるといふに氣付かなんだ。此様に他人の好いことでは到底立派な戦闘の出来る筈がない。此龍騎兵聯隊長の無能であつたのはいふ迄もないが、軍團長たるドリデルリング大將も頗ぶる腑抜けであつて、現在日軍が渡河するかも知れぬからといふので、此の方面に出かけて來て居りながら、其左翼の遠からざる太子河の各渡場を參謀なり工兵將校なりを派遣して、充分に偵察せしめて豫め日軍の渡河をするであらふといふ地點を知るの手段を講ぜず、一に龍騎兵の聯隊の爲すに任せて放任主義をとつて居たなどは、言語同斷全く以て沙汰の限りであるのである。此の軍團長にして二十九日の朝に命令を受けたならば、龍騎兵第五十二聯隊に參謀及び工兵の有爲なる將校を附して、それを少なくとも田官屯附近までの太子河右岸に添ふて進ましめて、詳細に且つ祕密に各渡場を偵察して、緊要と認むる地點には騎兵又は歩兵の監視哨を配布して、敵の渡河を逸早くも知り得るの方法を取るのには當然せざるべからざる仕事である。若し此の手段を軍參謀部が講

じたとしたならば、高崖附近に零米七十に足らぬ浅い徒渉場が有つて、それが敵軍の方に最も彎入したる所にあるといふことも確かに知り得られたに相違ない。若しも此の様な實際の地形上の現況が知れたとしたならば、餘程の馬鹿でない以上は此の沙坎附近の太子河の南方に彎入した部分に、一騎の兵卒も出さぬといふ様なそんな手ぬかりはせぬ筈である。

然るに軍團長も騎兵聯隊長も少しもそれに氣が付かなかんだ、これは此の兩人も宜敷ないが更にさかのぼつていふて見ると、遼陽附近で敵の大軍を引き受けて大決戦をやるといふ覺悟で、開戦以來頻りとそれが準備をしたのは事實である。果して然りとすれば黒鳩公將軍に於て此邊までの河川の狀況位はずつと以前に綿密に偵察せしめて置いて、それを此の方面の防禦に當る軍隊に知らせる様にして置くが至當であつて、斯く論じて見ると此の遼陽に於ける防禦の計畫をなす時に、これ等の偵察は立派になし終つてあらねばならぬ、左すればこれは滿洲軍參謀部の手ぬかりであるといふことも出来る。併しそ

れ等のことが黒鳩公將軍に於てしてなかつたとしたならば、此の方面の大任を受けたるピリ大將が二十九日の任務に就くの手始めに當然これを實行せねばならぬのであつた。鬚髯銀線の如く左右に開きて威ありて猛からずといふ、其堂々たる風采は露軍中にも二人とはあるまいと思はれる程な、頗ぶる立派なる好將軍も見かけ程には内容が充實して居らず。これを輔佐すべき軍參謀にも一人も戰術眼を有するの人がなかつた上に、當面の責任者たる龍騎兵の聯隊長が暢氣千萬なるお心好しの不注意なる人物であつたのであるから。全く以てとり返しのつかぬ様な大失敗をやつてのけて仕舞たのは、露軍の爲めには實に千秋の遺憾である。

第十七軍團方面では日軍が非常な策略をめぐらして、今夜半を以て太子河を渡り其前面に迫らんとして、其れが手配と準備とに忙殺されて居た三十日は、全く平穩無事敵は少しも著るしき行動をせぬと表面的の觀察に安心して、例の軍命令の時官屯から房申の間に納まりかへつて居たのは、實以て氣樂千

萬にも程のあるといひたい程の爲體くである。此様なやり方で戦争が出来れば戦術の研究などを骨を折つてするがものは全くない。露軍に於ても此軍團長は信用がなかつたとか聞いたが、評者も此の有様には頗ぶる愛憎をつかさざるを得ぬ。

此の軍團は天下太平と思ふて居たが、此日本溪湖方面を監視して居たりユバウキン少將支隊の方では、梅澤旅團が前進を始めたのでそれに接觸しつつ退却するに決したが。此の支隊と第十七軍團との間に河沿附近に主力を置いたるダゲスタン哥騎兵第二聯隊が、矢張太子河を監視して居たのであつたが。此の聯隊からリュバウキン少將は時官屯の對岸は日本軍之を占領し、江官屯吊水樓に若干の歩騎兵ありて沙坎附近を偵察せりといふ情報を、此の三十日に於て得て居るのであるが。怠慢なりし龍騎兵第五十二聯隊は、全く例の時官屯房申間にのみ氣をとられて、其直き上流に居るダゲスタン哥騎兵第二聯隊とも連絡するを勉めなんだので、此重要な報告を得ることが出来なんだ。

露軍は實に武運に盡きたのである。知らいでもよいリュバウキン少將へは「日軍沙坎を偵察せり」といふ情報が傳はつて居りながら、當の責任者たるビリ大將には全くそれが届かなんだのは實に天命である。が併しリュバウキン將軍は此の遠方のダゲスタン聯隊にまで連絡を通ずるの注意を缺かなんだので、それで此の重要な情報を得たのであるが、それは關係の少ない方であるから聞流しになつて仕舞たのである。然るに此のビリ將軍の方では距離も近く且つ此邊一帶の防禦の責任がありながら、其龍騎兵は此聯隊と連絡するに勉めた様な形跡が見へぬ。これでは矢張天命ではない要するに此の將軍の手ぬかりである、龍騎兵聯隊長の無能である、實に残念千萬なる失態をしたものである。

併し此のダゲスタン哥騎兵第二聯隊長も聯隊長である、此日本溪湖の方から梅澤旅團の渡河するのを發見し、更に坎沙、江官屯、吊水樓附近に時々日軍小部隊が出没するのを知つて居て、それを其隣りに居る第十七軍團へ少しも知

らせなんだのは如何なる理由であるか、これも決して適當なる處置のし方でないとい評者は思ふが。多分此の聯隊は第十七軍團へは通報せなんだとしても、軍司令官へは報告したに相違あるまい。果して然りとすれば軍司令部に於ても此方面に餘りに重きを置かなかんだ故に、更にそれを第十七軍團に注意しななだのであらふ。若し果して評者の想像の如しとすれば、露軍は全く我が第一軍右翼の行動に欺瞞せられて、日軍は時官屯より下流に於て渡河すると信じ切つて居たのであらふ。であるから沙坎附近に日軍が偵察にやつていつても、それに不審を起すの餘地がなかつたのであらふ。斯く論じて來て見ると強ちビリ大將のみを咎めるのは或は無理であるかも知れぬ。

日軍の渡河點は頗ぶる祕密に偵察されたのは事實であるが、渡河の夜の前の日には此のダゲスタン哥騎兵聯隊は、此所に日軍が度々偵察に來たことを知つて居たのである。若しも此の聯隊に一人でも少し河川の戰鬪に就て研究したことがある將校が居たならば、何の爲めに沙坎附近を日本軍が偵察する

か位の疑問は起りさうなものである、疑問が起ればそこは敵方に彎入して居て祕密に架橋したり渡河したりするに便利だ位のことはずぐ聯想されねばならぬ。況んや地形をよく知つて居るべき筈の露軍であるから、此の高崖に徒渉點があるといふことに思ひ及んだならば、我第一軍の渡河計畫は全くこれが爲めに看破せられて仕舞はねばならぬ運命にあつたのである。

然るに此哥騎兵聯隊にも有爲の將校なく、加ふるに此川を監視して居りながら此所に徒渉點のあるといふ大切な地形に精通して居らなんだ。其上に其お隣りの龍騎兵聯隊どのもこれが頗ぶる暢氣ものであつたので、此の直き上流の騎兵と聯絡するといふことに氣がつかず、此邊で敵が頗ぶる不審なる行動をするのを知りながら、此の小瀧沙坎の太子河の南方に彎曲する地方を全く監視の外に置いた。斯くして安々と我が井上光中將に渡河しかも敵に近い困難なる渡河に於て、大成功を收めさせたのは實に何といふ手ぬかりであつたらふ。

三十日の夜を徹して二箇師團の日軍が、高峯附近の徒涉場から殆んど全部右岸に渡河して仕舞た。三十一日の早朝になつてから始めて露軍の此邊に居た騎兵は、日本大軍の渡河して仕舞たのを見て喫驚仰天したのである。何といふ喜劇であらふ何といふ間の抜け方であらふ、殆んど事實としては受け取り兼ねる程な不思議千萬な油断である。此報に接したる龍騎兵聯隊長は直ちに其部下全員を提さげて其渡河點の方へ飛び出すかと思ふと、これがまた不思議千萬にも僅かに一中隊を此の方面に向はせた。此の様に軍の耳目たる騎兵が敵情に疎といのであるから全く盲目の金聲同様である、其中隊が渡河したる敵に破られるに至つてまた一中隊を派遣したとは何といふ態であらふ、此の聯隊長は到底評論すべき資格のある人物でない。終に散々に打ちなされて時官屯の北方へ追ひ込まれて仕舞たのはこれ當然の結果である。

此の日軍渡河の報に接したピリ大將は非常に泡を喰つて仕舞て、トブルジ

ンスキー中將に急命して、歩兵一旅團と有力なる砲兵を提さげて急進して日軍の渡河點を射撃せしめ。更にオルベリアニー少將に皇姑墳方向に進んで日軍渡河を妨害することを命じ。それと同時にリュバウキン支隊に電報を飛ばして日軍背後に進出して以上の部隊に協力せんことを希望してやつたが、それが三十一日の午前九時過ぎであつて、此時には日軍第十二師團の前衛は胡家回西北の高地を占領して、第二師團の戰鬪部隊迄が殆んど全部渡河を終つて居たのであつて、其處置は適當であつたが其時機は大變に遅れて全くあの祭りになつて仕舞て居た。せめて此の命令が今朝の拂曉にでも下つたならば、第十二師團の前衛が容易に胡家回西北の陣地から進出することは出来なただであらふが、それが午前の九時といふ大遅延の後に軍司令部に報告されて、それから命令が下つて以上の兩部隊が前進するといふ迄には、木越少將と今村大佐が協力して下盆溝から皇姑墳を経て太子河に至る陣地を占めて仕舞たので。一軍團を携へて此方面の防禦に向ひながら、殆んど敵二箇師團の

渡河に對して一彈をも發せなんだといふ奇觀を現したのは、餘り古來の戰史の上にも類例を見ることの少ない失態のやり方であつたが、これを要するに其失態は左の二原因に歸著する、即ち

- 一、日軍の陽動的前進に欺むかれたること
- 二、太子河の偵察不充分なりしこと

若し露軍にして太子河の地形を熟知して居たならば、高崖附近の徒涉點に監視兵を置かぬといふ筈がない、左すれば一時我が陽動的前進に欺むかれても、沙坎附近を偵察したのを見ると同時に直ちに我軍の眞意を知りたる筈である。然るに地形を綿密に偵察して居らぬ爲めに此所に徒涉點のあることをも知らなんだ。其上に充分に我が第一軍が英守堡から双廟子、藍河口の方に前進したのに欺むかれて、これが急轉進をして連刀灣から徒涉し様とは、全く夢にも思ひ付かなかんだのであつて。要するに地形を知らず敵に欺むかれたので、非常な大失敗に陥つて仕舞たのであつた。これ即ち我が歩兵操典第

二部第百に於て

『河川ノ防禦ニ於テハ敵ノ陽動ニ欺カレザル如ク注意スベシ而シテ眞面目ノ渡河ニ對シテハ速ニ之ニ應ゼザルベカラズ之ガ爲メ遠ク騎兵ヲ前岸ニ派遣シ敵情ヲ搜索セシムルコト必要ナリ又交通連絡ノ設備ヲ完全ナラシムルコトヲ勉ムベシ』

敵ノ利用スベキ橋梁ハ豫メ之ヲ破壊シ又ハ破壊ノ準備ヲ爲シ置クヲ要ス其他徒涉場ヲ偵察シ又要スレバ敵ノ渡河ヲ困難ナラシムル爲メ所要ノ工事ヲ施スベシ』

實に一字一句と雖ども此日の河川防禦隊の失敗に對する戒告にあらざるはなしである。若し交通連絡が今少し完全であつて、近いダゲスタン哥騎兵聯隊と龍騎兵聯隊とが通報し合つて居たならば、今少し早く日軍の渡河を知り得たであらふ、徒涉場の偵察が出来て居たならば、斯くまで日軍に欺むかれはせなんだであらふ。これに就ても深く注意して大に其意味を咀嚼玩味して、

輕々に看過すべからざるは操典の記述せる戒告である原則である。一として
實戰の經驗より出でざるものはないのである。皆これ戰友の鮮血より出たる
千古不朽の金言であるのを忘れてはならぬ。

大正四年十月十六日印刷
大正四年十月二十日發行

戰史評論與附

著 作 者

無 名 戰 士

發 行 者

東京市麴町區平河町四丁目十一番地
宮 本 林 治

印 刷 者

東京市赤坂區田町五丁目十一番地
山 田 三 次 郎



發 行 所

東京市麴町區
平 河 町

宮 本 武 林 堂

振替口座東京一〇九一二番
電話番町五五一八番

講兵會改纂

訂正原則之圖示
增補

製本四六版洋布製
價壹圓六拾五錢
郵稅 內地八錢
外地拾貳錢

內 戰闘一般ノ要領
攻、擊、防、禦
持、久、戰、夜、戰、却、戰
訂、補、シ、更、ニ
各兵種
隊形
ヲ、增、補、シ、テ、最、鮮、明、ナ、ル、ニ
色、刷、石、版、印、刷、ト、爲、シ、之、ニ
緊、切、事、項
及、陣、中
必、要、ノ、説、明、ヲ、加、フ

曩ニ本書ヲ刊行スルヤ空前ノ珍書トシテ噴々タル大好評ヲ以テ迎ヘラレタルト同時ニ、大方熱心ナル諸公ヨリ其編纂方及内容ノ補纂ニツキ指教、要望ヲ受クルコト非常ノ多數ニ上リ、茲ニ改纂ノ必要ヲ認メ乃チ某々學校教官及講兵會「講兵」統裁官數氏ニ依囑シテ大增補、大改纂ヲ斷行シタルモノ、洵ニ戰術界珍中ノ珍、寶中ノ寶タルヲ失ハス。

發行所 東京東區平河町四丁目一〇番 宮本武林堂

十月發行
戰史評論

豫告 遼陽會戰に於ける第十二師團下

大正四年十月（於遼陽會戰第十二師團 下）

戰史評論

大正
4. 12. 1
丙交

宮本武林堂發行



戰史評論

無名戰士評
成仁武夫補

第二十九回 遼陽會戰に於ける第十二師團 下

三十一日に於て皇姑墳一帯の陣地を事なく占領して、太子河右岸に充分なる足だまりを占め得たる黒木第一軍司令官は、現在自己の見聞せる状況と諸方よりの通報報告とによつて、敵は今や退却の爲めに非常に忙殺せられて居るものと考へ。先づ第一に時官屯西北方に聳ゆる饅頭山を占領し、以て此の退却中なる敵の右側に迫らんとして、第二師團に其攻撃を命じ第十二師團に其補助をなしつつ、黃堡方向を警戒して沙澗屯の方へ前進すべく、九月一日の爲めに命令する所があつたが。其後敵の主力が殆んど太子河の右岸に移轉

したらしき情況を探知し、是れ全く敵を潰滅せしむべき好時機なりと確信して。更に第二師團に寶淨山を占領したる後羅太臺を目標とし、第十二師團をして三道覇を目標として前進すべく命令した。

前回にも既に一寸いふて置いたと思ふが、黒木將軍は頭から敵の滿洲軍を退却するものと考へて居たのであるから、最初近衛師團から敵の一部が遼陽方面に退き、峨帽莊附近に火災が起つたとの報告を見て之れ全く敵退却の徵候なりと判断した。此判断は事實に於ては間違ひである餘りに早計である、けれども敵が退却するものと判断して我は其退路に迫らんとして急に渡河を決心したので、此の過失は却て我軍の爲めに非常に有利なる狀況を得せしめたのであつたが。此日敵の主力が太子河右岸に移つたのは全く黒木軍を攻撃する爲めであつて、決して退却する爲めではなかつたのであるが、眼中既に露軍なき黒木將軍は全くこれを以て敵の純然たる退却と見て取つたので。其兵力の頗ぶる寡弱であつたに係はらず、之に饒頭山の攻略を命じたる而已か

更にこれに向つて、羅太臺、三道覇を目標として追撃的前進を命ずるに至つたが。これは實に黒木將軍狀況の誤判であつて、其結果は僥倖にして我軍に有利であつたとはいふものの、若し一步を誤まらば非常な危険に陥るのである。幸に敵の逆襲的攻撃が支離滅裂に歸したからよかつた様なものの、若し彼れ黒鳩公將軍にして今少しく沈著して兵力を集團し、此の黒木軍に向つて突進せしめたならば、黒木軍は爲めに太子河の底の藻屑となつたかも知れぬのである。で此の黒木將軍の太子河の渡過に際しては、常に將軍は情況を我軍に有利なる様に誤判した。これは實に恐るべき過失であつて決して不謂で済まし置くべきことでない。敵を眼中に置かず常に敵を我より弱いものと思ふ其意氣の壯烈は頗ぶる結構至極であるが、それが極端に達すると所謂驕兵となるのであつて、驕る平家は決して久しきを保つことは出来ぬのである。此場合の如き敵は我より多くの兵力を有して居ることは略、分明して居り、遼陽南方の設堡陣地の極めて堅固無双であることも充分に知れて居たのであるから、

此の露軍の退却を以て全く力盡きたる退却と判断したのは餘りに早計である。將軍たるもの少しく熟慮したならば、我軍の攻撃が随分と困難であつて、敵の陣地は堅く其兵力は多いのに、それに敵が退却するといふのは果して何の爲めであるか？といふ疑問がここに生じて來ねばならぬ筈である。若し此の一疑問が生じたとしたならば大に慎重なる態度をとるの必要が起る。これは何か敵に注文があつて兵を太子河右岸に移したのかも知れぬといふ所へ考へが及ぶと、それは我第一軍主力を太子河へ壓迫し様といふ目的に相違ないといふ正當なる判断が出来る。

遼陽の設堡陣地がまだ陥落せぬ中に、敵が莫大な其主力を以て此第一軍方面に押して來たとしたならば、それこそ背水の陣を布いたる黒木將軍一世一代の大御難である。それが爲めには此の時官屯附近に於ける饅頭山、寶淨山を速に占領して、敵の此の攻勢移轉を饅頭山から五頂山に亘る高地に據つて死力を盡して拒止する必要がある、その爲めに此の一日に於ける命令が下つた

のなれば、其攻撃は同じく饅頭山の攻撃であつても最も至當であるけれども。此場合は速に此の饅頭山を占領して敵の退路に迫らんとして、これを兩師團に命令して攻撃せしめたのである、からして評者は其判断の誤まれるを默過し得ぬのである。此の第一軍の四、五日間の戦闘には常に此の間違つたる判断が累をなして、少なからず其兵員を無駄に損傷した様な傾きがあるのは、決して否、然らずとこれを争ふことの出來ぬ事實である。

乍併此様に敵を天から吞でかかつた爲めに、敵が眞面目に攻撃して來てもこれを窮鼠の反噬と見くびつて、少しもそれに頓著せず無二無三に之を反對に攻撃し、遮二無二これを一氣呵成的に追撃し様としたので、敵は却つて其勇氣の非常に猛烈なのに辟易して、これ全く非常なる大敵が渡河をしたのである、敵は決して劣勢のものでないと誤解して、爲めに其前進を頗ぶる躊躇逡巡するに至つた模様であるから、此の軍司令官の情況判断の誤まりは却つて敵の疑惧を増し、我軍の志氣を興奮せしめたのは事實であつて、爲めに二

師團足らずの黒木軍主力は敵總大將の四軍團餘の攻勢移轉を何の苦もなく打ち破つたのであるから、此の誤判の功は殊勳の甲以上に當る次第であるが。其眞の敗因は要するに黒鳩公將軍が餘りに錯雜巧妙に過ぎたる攻撃計畫をしたのと、其又敵情判断が頗ぶる敵を過大視して、現に二箇師團内外しか渡河せぬことの知れ切つて居る黒木軍に對して、其外にも非常に大なる兵力があるかの様に判断したに起因するので。これは決して黒木將軍敵情誤判の手柄ではないのであるが、それが我黒木將軍に幸福を持ち來して非常に好都合の戦をなさしめたのであつた。

之を要するに彼我兩大將共に状況を誤判して、我は彼を退却するものと誤判し彼は我を非常に優勢なりと誤判したので、兩誤判が何れも我軍に有利なる様に重複して來たので、それで黒木軍が大勝を博し得たのであるが。詮ずる所誤判はどこ／＼迄も過失である、今其過失が過まちの功名をしたからとて、それを不問に付すべき筈のものでないのであるから、此所に一言黒木將

軍の狀況誤判を戒めて置いたのであるが。敵を常に過大視して恐れ入つたる黒鳩公大將よりは、敵を眼中に置かずして其退却を以て全然敗退と考へ、我軍の志氣を振起する様に状況を誤判した黒木大將の方が、同じ過失の上ではまづ／＼罪の軽い方であると評者は思ふ。が併し我に有利に状況を誤判するといふことは、何人も陥り易い過失であるから大に平素から此様な過を犯さぬ様に、充分に心がけねばならぬと自分は考へるのである。

三十一日の午後十一時に饅頭山と寶淨山とを占領せんとして、翌九月一日の爲めに下した軍命令を午前零時五十分にて受領したる井上第十二師團長は、同一時三十分即ち受令後四十分の後に於て左の要旨の命令を下したのであつた。

一、歩兵第二十三旅團(一大隊欠)騎兵一小隊、砲兵一大隊(一中隊欠)、工兵一中隊、衛生隊半部ヨリ成ル木越左翼隊ハ午前五時守備線ヲ出發シ皇姑墳北側地區ヲ經テ沙澌屯ニ向ヒ前進スベシ

二、歩兵第十二旅團(一大隊ト三中隊欠)騎兵第十二聯隊(二小隊欠)砲兵一大隊、衛生隊半部ヨリ成ル島村右翼隊ハ左翼隊ニ連繫シ沙澁屯ニ向ヒ前進スベシ

三、近衛後備歩兵三中隊、後備騎兵二小隊ヨリ成ル黃堡方面警戒隊ハ奉天及本溪湖方面ニ對シ小瀧東方ヨリ胡家凹東方高地ニ亘ル線ヲ占領シ軍ノ右側背ヲ掩護スベシ

四、下平州及沙坎守備隊ハ前任務ヲ繼續スベシ

五、歩兵第十四聯隊第三大隊、同第二十四聯隊第三大隊、後備歩兵第二聯隊(三中隊欠)騎兵一小隊、工兵一中隊ヨリ成ル豫備隊ハ午前五時迄ニ石廠ニ集合シ左翼隊ニ跟隨スベシ

一體昨夜來の守備線の有様からいへば、此の左翼隊は皇姑墳―東黑英臺道を第二師團との境界として前進してよいのであるが、斯くては第二師團は全然敵方に曝露したる地區を進まねばならぬので、それが前進を容易ならしむ

る爲めに右斜めに皇姑墳の北側を経て沙澁屯に向ひ。右翼隊は其左翼隊を基準として更に其右方に連なつて、同じく沙澁屯に向つて前進することになつたのであるが。大體に於て第二師團の饅頭山攻撃の加勢としては、先づ此の位の命令を下して前進するの外には手段はあるまいと評者は思ふ。

此命令によりて九月一日朝前進を起したる木越左翼隊は、第二師團が其前面の開豁地を避けて漸次右斜に行進して來るので、最初歩兵第四十六聯隊を第二師團に連繫せしめ、其右に歩兵第二十四聯隊を連ならせて居たのであるが。第二師團の右偏のし方が非常なので終に歩兵第四十六聯隊は後方におし下げられる様になり。歩兵第二十四聯隊が直接第二師團と相連なつて前進し、歩の第四十六聯隊は第二線としてその歩の第二十四の右翼の後方に運動するに至つた。此の事たる前にも述べたる如く全く第二師團の損害を減ずる爲めに其行進方向を北によせたる影響から生じたので、これは實に已むを得ぬ次第ではあるが第十二師團の右翼隊は、爲めに非常に運動が難儀千萬であつた

のは事實であつて。最初饅頭山南側を目標として居たのを變更して、後には同山の東北高地を目標として行進するに至つたので、此の木越旅團の部署は爲めに錯雜紛糾するに至つたが。それでも此の旅團は敵前に於て此様な斜行をし、其兩聯隊の位置が交叉するに至つたに關せず、よく統一を保つて少しも敵に其隙に乗ぜられなんだのは感心である。此の第十二師團が友軍の爲めに進路を譲つた爲めに、第二師團はどれ程幸福を得たかも知れぬ。蓋しこれありしが爲めに饅頭山占領まで此師團は其兵力を減ずることが多くなかつたからして敵の唯一の樞軸と頼み切つたる此の饅頭山をとにも角にも奪略し得るに至つたのであつて。友軍の攻撃を加勢するのであるから、自己の多少の不便を犠牲にして、それが攻撃に便利なる如く其進路をも充分に譲つて、さて其右翼に連なつて必死にこれが援助に盡力したる木越少將の適當なる義侠的處置は、非常に此の第二師團の饅頭山占領に與かつて力があつたのであると評者は信ずる。

此日此の第十二師團左翼隊が夜を冒して必死に第二師團に加勢して、右翼隊の方へ優勢なる敵の迫つたにも係はらず。木越少將は其第二十四聯隊を獨斷を以て依然第二師團に加勢さして、師團の命令が其後に於て同少將の處置と同一轍に出でたなどは、如何に此の將軍が穩健至極なる思考を以て、能く其師團長の意圖を推察して行動したかが知れるのであつて。斯く優秀なる指揮官があつたればこそ其行進方向を途中で大變更をして、しかもそれが高粱繁茂せる展望不自在の間に於て、夜半までも戰鬪して居たにかかはらず大なる失敗をも取らなんだのである。而して第二十四聯隊の松田祐作少佐現大佐の豫備の第八中隊が、饅頭山の東北麓で俄然敵と衝突して苦戦に陥つた如きは、これ全く前の行進方向變更から來れる影響であつて、實に危険千萬な出來事であつたが。其喊聲と銃聲とを聞くと同時に第一大隊が直ちに之を赴援して、全力を盡してこれを收容し大危険を辛くも防ぎ止めたのは、全く各隊の協同一致の精神に富んで居たことを證明すべきものである。又此の歩の第二十四

聯隊の前進中に敵騎二中隊の襲撃を受けたとあるが、これは此方面に居たのは彼の無能なる龍騎兵第五十二聯隊をも指揮して居た、オルベリアニ公爵閣下の指揮下の騎兵であつたに相違ないが。同聯隊第二中隊の二小隊の射撃の爲めに、散々に打ちなされて楊家堡子の方へ追つ拂らはれて仕舞たのは當然で、何の必要で敵騎が襲撃をやつて見たのか知れぬが。多大の騎兵を持ちながらいつも逃けまはつてばかり居た敵騎兵の動作中に於ては、實に褒めてやつてもよいとは思ふものの其目的は頗ぶる不明であつて、露軍の戦史には其様な氣ぶりも見へて居らぬのは或は逃げるのに方角を間違へて、敵の方へ逃げたのを我軍に於て襲撃と考へたのであるかも知れぬ。

此の歩兵第二十四聯隊の右に出た歩兵第四十六聯隊の第一大隊が、暗夜になつてから松樹嘴子東南の高地に到着して、其地形上から見ても我軍の情況から見ても、容易に放棄すべからざる緊要なる土地なるを偵知して、一部を此地に止めて他を第二線にありし第三大隊長の方へ遣したのは、評者は頗ぶ

る機宜に適した感心な處置であつたと思ふのであるが。此の大隊長は何故に其攻撃即ち饅頭山攻撃に加はるべき大切なる方に行かずして、要地に據つて敵を拒ぐべき此の高地の方に止まつたのであるか。評者の考では此の地の要害なるを知つたならばそれに二中隊を止めて、これを犬山第三中隊長に指揮せしめて、如何なる場合にも此地を放棄してはならぬことを嚴命して。さて自分は饅頭山攻撃の方に向つて他の二中隊を率ゐて進むのが至當であらふと思ふ。何れにしても同じ様なものの暗夜しかも攻撃點の方に向ふといふことは、要地を守るよりも困難であることは明かであるから、其困難なる方へ自分が附いて行くのが大隊長として至當の處置であつて、實際の都合は如何にあつたか知れぬけれども止まる方に大隊長が残つたのは遺憾であつた。であるから折角派遣した此の二中隊は僅々二千米突内外しかない所を、午後の十時から翌二日の午前三時までかかつて、しかも其饅頭山攻撃戦闘の千秋樂になつた後に、始めて豊田龍成少佐の第三大隊に合するを得た様なことにな

つて、何の効果をもあげることが出来なんだのは、要するに大隊長が必要な方面に行かずして、却つて松樹嘴子東南高地に止まつた爲めに、犬山大尉は経験が少ないから大分暗中をさまよふた果てに、終に戦闘の間に合はぬ様になつて仕舞たのである。

左翼隊に連繫して前進すべき約束であつた島村右翼隊は、其出發に當つて騎兵第十二聯隊を上缸窰と五頂山の間に位置せしめて、以て師團の右側を警戒せしめたる上、歩兵第十四聯隊から一小隊を出して北方に犂ゆる五頂山を占領せしめたが。此の兩様の處置は至極同意であるが、此の相浦騎兵聯隊が遠く烟臺炭坑の方まで偵察した模様がないのは怠慢であると評者は思ふ。又五頂山は北方面に對する最も大切な土地であるから、此所には今少し有力なものを置きたかつた。若し右翼隊が左翼隊の右に在つて沙洋屯の方へ進んだ場合、少しく有力な敵の騎兵でも北方面から來たとしたならば、師團の背後をめちや／＼にされるのは知れて居る。其様な場合には相浦騎兵聯隊の加勢を

し又後援ともなり得る様に、我が師團の右側背に當る鎖鑰地たる、此の五頂山には少なくとも一中隊位の兵を出したかつた。無論此所に一小隊でも兵を出したのは出さないよりはましであるが、若しそれ程の注意があつたならば今少し有力なものを出して置けば頗ぶる安心であつたと思ふ。後に此地へ歩兵第四十七聯隊から一中隊を派出したから、それで大分此方面が手強くなつてよかつたが、出發後僅少の時間を隔ててしかも聯隊を異にしたる一中隊をやる様なれば、最初からこれに一中隊を出した方がよかつたと思ふ。又此地は少なくとも一中隊位を出して堅固に守らして置くべき土地であることは何人も否認すまいと思ふ。

此の北方の要害にして展望自在なる五頂山守備隊は、はたせる哉午前十時四十分に至つて師團の勝敗にも係はるべき大緊要なる報告を齎らした。それは北方烟臺炭坑に通ずる鐵道線路に沿ひ、敵兵約二大隊東進中であるといふのであつて實に非常な大切な飛報であつた。それから約十分の後に相浦騎兵

大佐からも同様な通報が来たが、これは兵力の偵察が充分で諸兵連合歩兵約一旅團といふ報告で、師團は爲めに其右側が非常に危険千萬になつて来たのである。此際逸早く此の敵情を急報したのは此の五頂山の守備兵であつて、此所に歩兵を派遣したる處置の適當であつたことは、此の一事でも頗ぶる其必要が明白である。若し此の歩兵が居なかつても騎兵から報告はあるに相違ないが、此要地を歩兵が占めて居らなんだならば、急遽これに兵を出すといふ様な大騒動をやらねばならぬ。それを極めて沈著して更に一大隊を之に増派して新來の右側の敵に當らしむるといふ様に、泡をくはずに處置することの出来たのは、そこに一中隊餘の兵が出してあつたお蔭であつて、それで大に安心して其方面に對する處置をするに間誤つかなんだのであつた。

井上師團長は午前七時に總豫備隊を集合せしめたる石廠に到着して、ここで第二師團の攻撃が少しく遅延するといふ通報を得て、左右兩翼隊に其事を傳達して攻撃開始の時機を第二師團に準據せしむる様に命令したが。正午過

ぎに至つて敵の一縱隊が炭坑鐵道を傳ふて我右側へ前進中であるといふ報告に接したので。此の敵兵が果して何をするつもりであるか、其兵力や目的が知れる迄一時攻撃前進を中止することにして。これを直ちに軍司令官に報告しそれと同時に、同様のことを第二師團と我が木越島村兩翼隊に通報し。總豫備隊をして其手中に握つて居たる歩兵第十四聯隊の志波今朝一少佐の第三大隊を、直ちに下缸窰西方高地に出して右翼隊と連繫し、以て右翼に進み來らんとする敵に備へた。

此の師團長の處置は頗ぶる適當である、敵の兵力はまだ明瞭ではないが諸兵連合の一旅團とある以上は、これを棄て置いて無暗に西進することの出来ぬのは當然である。さりとてそれが如何なる目的を有するのか知れぬのに、過早に其兵を此方面に向はしむることも出来ぬ。そこで左右兩翼隊は現在進出して占めたる位置にあらしめて、一先づ敵のせん様を見定めることにして、それを諸方に報告通報すると共に、此の敵方に通ずる主要道路のある所の下

缸窰と大窰との中間高地に、志波大隊を出して此方面を警戒せしめ。斯くして更に諸方より集まり来る敵情によりて今後の處置を決せんとしたのであるから、此の場合に於ける井上將軍の處置は頗ぶる時機に適當して居た申分のないやり方であつたと思ふ。

此の總豫備隊から急派せられた志波大隊が、其各一小隊を上缸窰東方高地と下缸窰西方高地とに出して、警戒を嚴にすると共に左方五頂山の歩兵第四十七聯隊と連絡し、其主力を下缸窰に集結して置いて、其中間地區を搜索したのはこれも亦た適當である。又其後軍の參謀長藤井少將から、井上師團長へ

『右翼隊ヲ以テ右側新來ノ敵ニ當ラシメ左翼隊ハ依然第二師團ニ協力シ速ニ
黑英臺ヲ占領セシムルヲ要ス』

といふ通報が來たので、午後三時に石廠に於て左の要旨の命令を下したのはこれも亦た適當であつたと評者は思ふ。

一、左翼隊ハ歩兵第十五旅團ト協力シ饅頭山高地ヲ攻撃スベシ

二、右翼隊ハ五頂山附近ヲ占領シ次山附近ニ進出セル敵ニ對シ我右側ヲ掩護スベシ

此の命令の下る前に於て木越左翼隊長は、既に其歩兵第二十四聯隊を歩兵第十五旅團に依然協力せしめて居たのは前述の通りであつたが、此命令の到着と共に其全力を以て第二師團に加勢を始め。又右翼隊は其全力を以て五頂山附近を占領して、次山北方に集合開進したる敵に對したが。此方面に進來した敵兵は此の一日に於ては他に運動する模様なくして、其後日没に至る迄殆んど無事であつたので、各部隊は其陣地に堅固に工事を施こして敵に備へ、且つ其兵力の混成約一師團程のものであるといふことをも偵知し得たのであつた。

師團は斯くて日没に及んで午後八時に宿營の命令を下して、前の黃堡方面警戒隊と志波大隊には其任務を續行させ、右翼隊と左翼隊のこれに連なる一

部には其陣地を堅固に守らしめて。さて第二師團と共に饅頭山を攻撃する部隊には、攻撃奏功の後には第二師團の右翼に連なつて、西に向つて守備せしむることに命令して、師團の本隊は依然石廠に宿營したが。此の豫備隊の位置は少しく遠い様な感がないでもないが、しかし其目的のまだ充分に知れぬ新來の炭坑附近の敵に對して顧慮すれば、餘りに第一線の方へ近寄せ過ぎて却て其背後を衝かれる様では不利であるから、其儘豫備隊を石廠に置いたのは遠きに過ぎた様ではあるがこれは至當であると思ふ。斯くすれば北方及び西方何れから敵が來ても、殆んど同じ位の時間を以て第一線に應援し得る上に、更に其右側方に出て來た場合には直ちに之に對して運動するに便利であるから、此豫備隊の位置は決して不適當でなかつたと思ふ。而して此夜工兵第十二大隊が師團豫備隊の兵力が少ないので、其一中隊を石廠に送つて残りの第二中隊一箇中隊のみが第二第十二師團架橋縦列の監視員たる少數の工兵と相協力して、四時三十分間を以て橋長百二十米突の軍橋を、江官屯附近に架設

して午後五時前に之を完成せしめたのは、確かに褒めてやつてよい架橋の出來榮へであつたと思ふ。

敵の太子河右岸に移轉せしを以て、全くの敗退なりと誤判せし黒木軍司令官は、昨夜以來其位置を固守したる第十二師團に對して、速に三道覇に向つて追撃前進すべく命令して、更に一方第二師團に向つては寶淨山を占領して羅太臺に進むべく命を傳へたのであるが。軍司令官の考へて居る情況と實際の敵情とは非常に差違が甚だしいのであつて、敵は今や其四箇軍團を太子河の右岸に移して整頓し、總大將自から此方面に出馬してあはや攻勢に轉ぜんとするすさまじき意氣込の所である。それに向つて第十二師團に遮二無二追撃を命令したのであるから、我第一軍の此日の戦闘は實に非常に危険千萬であつたのであるが。黒木大將の情況誤判を以て眞實なりと確信したる、第二師團長も第十二師團長も敵の數日來の行動を以て、全然退却掩護の逆襲位としか思ふて居らなないので。目に餘る敵の大軍に對しても少しもこれを恐れ